

成壽 SEIJU

冬

期号

25卷

横浜善光寺刊

謹啓

師走の修と相成り申した

手素善光寺の寺門の興隆並育英会に格別の
御尽力を賜り厚く御礼申上げます

成壽二十五号をとお届けいたしませ

この度は国際化を目指して言駒澤女子大学特集とロス碑セリ
主任故前角博雄老師の追悼号とさせていただきます
七年も余日少になりました。一年混迷で不安定な年でしたが
明年一九九六年は平和で輝かしい年でありませう祈念
いたしませ

善光寺

黒田武志 拝

合書

古くて新しき道

ありとある

悪を作なさず

ありとある

善よきことは

身をもつて行い

おのれのこころを

きよめんこそ

諸みほとけ仏の教えなり

東京 稲城の台地に
屹立する
駒沢女子大学



玲瓏池より望む大学館(地上7階、地下2階)



新しい天地に伸展する
駒沢学園(東京都稲城市)



祖)〉 (日本芸術院会員・大内青圃 作)を奉安 —



グラスマン・テツゲン老師は、アメリカに禅を説くこと40年、その一生を捧げた故前角博雄老師の高弟である。

テツゲン宰老師は、ロサンゼルスの中にもおよそ28万坪にもおよぶ境内を有する禅の修行道場を宰し、ニューヨークの市街地に禅コミュニティを設けてエイズ感染者の援助、ホームレス対策、保育園の開設など社会福祉事業にとりくみ、将来、マエズミ仏教大学を創立して駒沢女子大学と提携したいというビジョンをいだいている。昨年、故前角老師がその永年の功績によってニューヨーク市立大学を創立した一人ハリス氏を記念して設けられたハリス記念賞を受賞したことを、訪れたシールズ教授から報告されて、あらためて国際的親近感をおぼえた私であった。

(駒沢女子大学学長代理 東 隆眞)

駒沢学園記念講堂(間口、奥行50m、高さ32m)

— 一仏両祖 <釈迦牟尼仏(本尊)道元禪師(高祖)瑩山禪師



国際交流の拠点をめざして

仏教主義教育を建学の理念とし、国際交流によって新しい世界をめざす駒沢女子大学は、平成5年に第一歩をふみ出した。

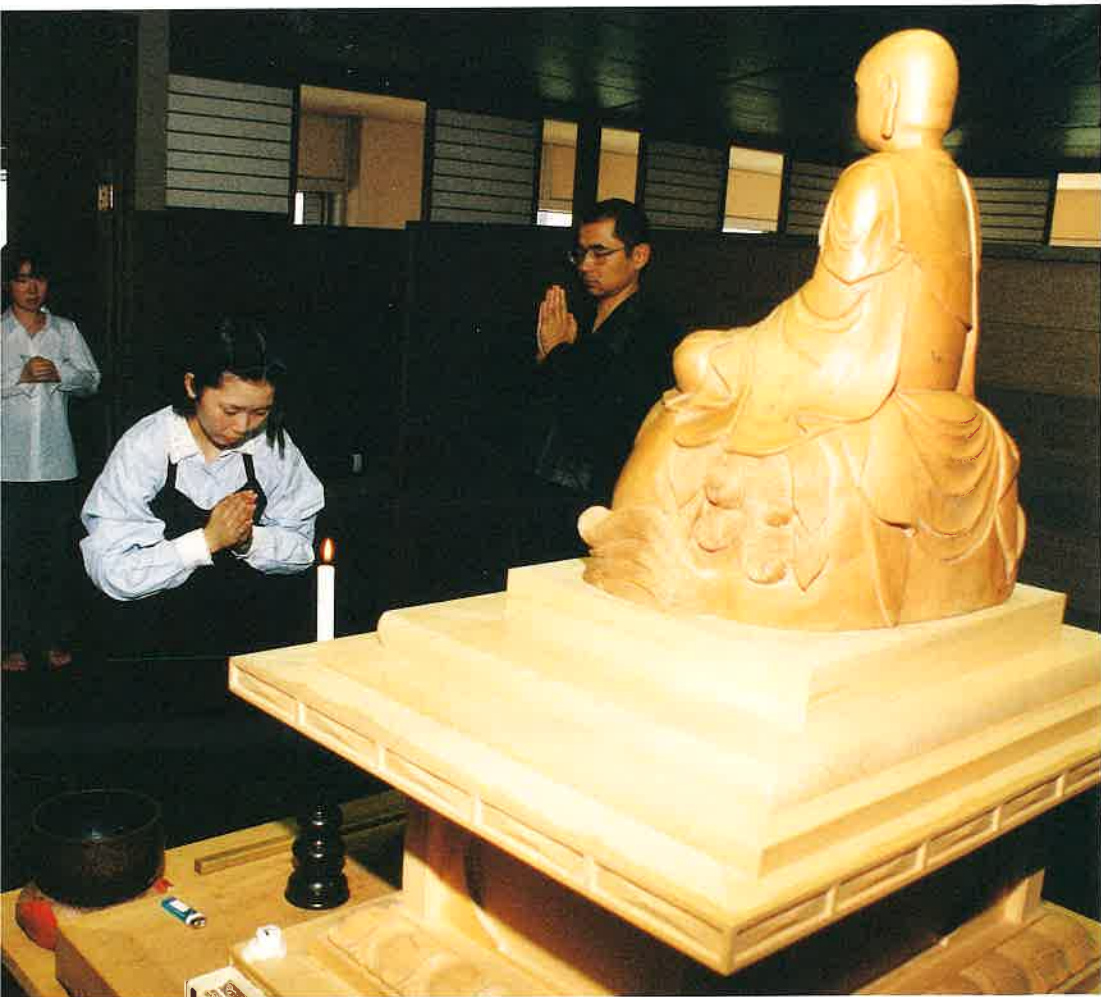
このほどイギリス、エジンバラ大学ダンカン教授の短期留学、アメリカ、ニューヨーク市立大学のシールズ、ガーシュ両教授ら20名の来校、ロサンゼルス禅センターのグラスマン・テツゲン老師ら一行の訪問、またカリフォルニア大学のウィリアム・ボディフォード教授らの来学などがつづいた。駒沢女子大学は、仏教や日本の禅文化と海外の異文化との交流のセンターとしての役割りをそなえつつある。



▲学園主猊下(大本山永平寺宮崎奕保貫首・左)と上田祖峯理事長・学
長(中央)と東隆眞学長代理・校長(右)



◀ ジョーンズ先生の英会話の講義



文殊菩薩(智慧の菩薩)に合掌・礼拝(照心館・坐禅堂)



まず坐相を端正に



坐はすなわちこれ自己の正体なり

—正法眼蔵随問記—

カ	ラ	ー	東京 稲城の台地に屹立する駒沢女子大学	黒田 武志	10
巻	頭	言	………	………	………
特	別	読	物 ●ある住職の壮大な実験	………	………
学	園	め	ぐり ●駒澤学園躍進の奇跡を産んだ移転事業	伊藤 文雄	14
			●禅の国際化に貢献する女子大学をめざして	長尾 通元	24
特	集		●前角博雄老師密葬儀	………	………
			香語 弔辞 前角博雄大和尚略歴 住職地並びに開山地 遺弟並びに法孫	………	………
カ	ラ	ー	前角博雄老師急逝	奈良 康明	41
追	悼		●前角博雄老師を偲ぶ	横尾 太寿	66
			●畏友・前角博雄師を偲ぶ	島崎 義孝	72
			●孤雲飛翔して大山元不動	………	………
			●前角老師の思い出 無量先生の猷辞	河内 義宣	98
			●西來の祖道 我東に伝う	安藤 嘉則	102
			●前角博雄老師を追悼す	沖田 玉映	105
			●海外留学僧時代の思い出	………	………
			●お便り 弔電 弔電和訳	………	………
カ	ラ	ー	ロサンゼルス禅センター	東 隆眞	110
			●アメリカの禅センターを訪ねて	………	………
講	演		●道元禪師と瑩山禪師	………	………
追	悼		●輝く尊像の数々 錦戸新親師の死去を悼む	伊藤 博	137
旅	行	記	●パゴダと寺院の国 ミャンマー(ビルマ)の旅	………	………
声	善	光	寺ニユース 読者のたより 留学育英僧からのたより	………	………

題字・さしえ 伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職 黒田 武志

今年は、戦後五十年目を迎えた節目の年ではありますが、年明けから、阪神・淡路大震災が起り、さらにオウム真理教等により次から次へと押し寄せてくる事件で、連日新聞、テレビで心痛む報道が続いております。

宗教と政治の問題や、信仰の自由と社会の関係等、宗教とは何かと、大きく問われており、国民は勿論のこと、世界の人々が、これらの問題の解決策に注目しております。

フランスの仏教学者アルフレッド・アシエ先生は、人類の滅亡の危機を回避出来る唯一の道は、全ての悪をなさず、善いことを行い、自らの心を浄める釈尊の教えであり、仏心、即ち大慈悲のほかならぬものであると言われております。

此の度、仏教主義教育を理念とし、国際交流による新しい世界をめざしている駒沢女子大学を訪ねてみました。人間の真実の拠り所として二十一世紀に向つて、一歩々々と力強い歩みをお祈り申し上げます。

次に、当育英会の顧問であり、創立来大変尽力いただきました□サンゼルス禅センター主管前角博雄老師が、帰国中、五月十五日朝急逝いたしました。東京での密葬の後、百ヶ日を期して、八月二十六日に□サンゼルスに於いて本葬が執り行われました。

一九五六年以来、四十年間アメリカ合衆国において、曹洞禅、仏教の普及、特に僧堂生活の基本である「永平清規」「瑩山清規」を实践、発展せしめた「東方より西方への仏道」の伝達者の一人ではなかつたかと思ひます。

前角老師の後継者としては、グラスマン徹玄老師であります。前角老師と同様に大いに期待し、同時に尽力を申し上げます。と思います。

「宗祖（両祖）を通して釈尊にかえる」我々は、今こそ、謙虚に「社会」との調和をはかり、一仏両祖の心を持つて、生きとし生けるものの命を大切に、国際社会の平和と繁栄に向けて、大いに貢献をしたいものであります。



同じ星をみつめて

赤間 義徳

「渡米して四十年
世界十か国に法縁を結び
十数の禅センターを設立し
立派な弟子たちを育成した
実兄 前角博雄老師の
大事業。」

宗派を超えて
海外に留学僧を派遣し
人材を育成して
仏教の振興と世界の平和に寄与する
私の
大誓願。



おもえば

太平洋をへだてながら

兄弟ともに

他の宗派・宗教と共生し

仏法宣布に生涯を捧げる

同じ星を

みつめて歩いてきたのだ。

そして いま

兄は

私を導く

星となって輝いている」

前角老師のもとで

開教師として二年間指導をうけた日々

お互い若かった日々がよみがえり

方丈さまは

大誓願成就の活力が

涙とともに

熱く身内に溢れてくるのを感じていた。

ある住職の壮大な実験

●放送ジャーナリスト ばばこういち

—

一つの寺の住職が、宗派を超えた仏教の人材育成のために外国派遣の奨学制度を行っているという話を小耳にはさんだのは、五月の初めのことだった。

そんな奇特な坊さんがほんとうにいるのかというのが、この話を聞いた時の率直な感想だった。

今の日本のお寺や坊さんへの私のイメージは

極めて悪い。お経をあげ、戒名をつけてもらうという日本古来の習慣もおいそれと頼めない。莫大ばくだいなお金を取られるという危惧きぐが強いからだ。しかも宗教法人の優遇税制を利用して金儲かねもちけに励むんでいるという印象も少くない。昨年、私の父が亡くなったときも坊さんに来てもらわず、戒名もつけず私たち近親者だけで葬ったのも、お金をかけたくないというだけでなく、こうしたお寺や坊さんの生臭い金儲けの論理に自分の父親の死を委ねたくないと考えたからにはかな

らない。

この坊さんの話を聞いたのは、ちょうどオウム真理教の事件がテレビで連日洪水のように報じられていた時期であった。

オウムの是非は別として、若い人々がなぜオウムに次々と入信していくのか、そこに現代社会の、現代宗教の病理があるように思えてならない。

日本の仏教はおよそ一四〇〇年前、インド、中国、朝鮮を経由して伝えられた。天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗、日蓮正宗など様々な宗派に分かれ、およそ七万五〇〇〇の寺院、約一〇万人の僧侶、約数千万人の仏教信者がいるといわれている。

しかし、そのほとんどは葬式や法事がその活動の多くの部分を占めていて、本来仏教が果たすべき世直しの役割を實踐しているとは到底思われない。

それどころか、この社会の体制におもねり、その庇護ひごの中でぬくぬく現世の利益を貪むさぼっているというのが、その実態のように感じられる。それをまた日本人の大部分も是としてきたことから、日本の仏教の保守化と墮落だらくが経常化してしまってきたのだろう。

だが、この寺の坊さんは、仏教は葬式や法事という人間の死のみにかかわる形骸化けいがいしたものであってはならない、と考えて活動している珍しい存在なのだと言った。

ほんとうにそうなのか。そんな革新的な坊さんがこの国に存在するのか……。

私は興味を持った。そこで直接電話をして取材を申し入れることにしたのである。

二

「私オウムは認めません。しかし、オウムが出現したということは、現代仏教の在り方が厳し



く問われているという証だと感じています」

黒田武志さんは開口一番こう言った。

横浜善光寺は、横浜市港南区の日野にある。

黒田さんは、この横浜善光寺の住職である。

横浜善光寺といっても長野にある善光寺とは

関係はない。

一九三八年（昭和一三年）一月生まれという

から、本年とって五七歳である。

「お寺は、人間の死にかかわる場所だけにしておいては、本来の役割を果たしたことにはならないとずっと考えてきました。生きている人間の喜怒哀楽のすべての心と、その折々にかかわることのできる開かれた場所だという認識が必要だと思うのです」

黒田さんは、自分の寺を地域社会のコミュニケーションの場所として位置づけ、布教の場、檀信徒の研修センターとして、それまで縁のなかつた若い人々にお寺に対する認識を改めさせたいと考え、実践してきたという。

ボーイスカウトや会社、団体、大学生などへの働きかけを行い、キリスト教顔負けの活動を展開して、十数年間に二六〇〇世帯の檀家を作りあげた。

「学ぶのも檀家なら、指導するのもまた檀家なのです。檀家には大勢の専門家や知識人がいます。こうした場があればすぐれた才能同士が出

会うこともできます。人は一人で生きているのではなく、仏と有縁無縁の多くの人たちによって生かされているのです。

ですから、お寺はこうした人々を結びつける積極的な存在として、社会のお役に立っていくべきではないかと私は考えました」

黒田さんは、人との出会いを大切にするとして寺を考え、その中から人づくりこそ寺づくりなのだという哲学を生みだした。

こうした経過の中で黒田さんが海外に留学僧の派遣を始めたのが、一九八四年（昭和五九年）のことであった。

三

黒田武志さんは、栃木県の大田原市という、当時としては小さな寺の六男として生まれました。男ばかりの八人兄弟だった。

黒田さんの母親が嫁いで来た時の寺は、火災

があつた後で一六畳の本堂と八畳の板の間があるだけだったというから、相当な貧乏寺だったのだろう。

長男は早く病没したが、それでも男の子七人を育てる両親の苦労は容易なことではなかったに違いない。

「学校だけは出してやるが、後は自分の力で生きていけ」と父親は言った。

黒田さんは、駒沢大学を卒業し、大学院を終了した後、兄の勧めで曹洞宗大本山総持寺と永平寺で修行することになる。

「夜明け前からの掃除、一八時間に及ぶ坐禅、食事の作法から大小便の仕方まで事細かな規律……。流れの早い人生の中で、アルバイトでも結構稼げる時代でしたから、いったい自分は何でこんなバカなことをやっているんだろうと、悶々と日々を過ごしていました。その内身体を壊して寝込むようになり、こんなところで寝て

いるくらいなら、東京に帰ろうと考え、半年で永平寺を出ることにしたんです。ところが、福井の駅で東京とは反対の汽車に乗り間違え、富山に運ばれてしまいました」

これがきっかけになって、黒田さんの托鉢行脚が始まる。

「それは、それは想像以上にきびしいものでした。あるときは自分と同じくらいの若いお嬢さんから、へお通り〜と冷ややかに言われまして。へお通り〜というのは、邪魔だから他所へ行けということなんです。初めの内はひどく腹が立ちました。

何カ月も経ち、お金もなく、冷たくされ、野宿を繰り返し、雨が降り、雪が降り、惨めで辛い毎日が続いた後、いつか私は京都に来ていました。食べ物を買うお金もないほど無一文でした。私はある女子校の前を『般若心経』を唱えながら歩いていました。

ふと気がつく、一人の女学生がそばに来て一〇円のご喜捨を下さいました。すると次々たくさんの女学生たちがご喜捨をしてくれて、あつと言う間に応量器が一杯になったのです。

これでご飯が食べられる。お風呂にも入れる……。感謝で胸が一杯になった時、いつの間にか雨が上がり、雲の間から太陽の光がサーッと差し込んできたのでした」

黒田さんは、このとき一つの悟りを開いたというのである。人々がお互いに理解し、心底から助け合うことができたらどんなに幸せな世の中になるだろう、それをつくっていくことこそが仏教徒の生き方ではないのか……。と。

後年、留学僧育英会の構想が生まれるのも、この時の女子学生たちからの力尽きる寸前に助けられた経験が原点になっているという。

苦しい修行に耐える力と助け合う心。これが世界共通の人間の在り方になったときに、人間



ばばこういち氏に説明をする黒田方丈

はほんとうの幸せがつかめるのではないか、と黒田さんは考えた。

それからの黒田さんは、インドとタイで一年有半の修行をした後、釈尊の本源というべき宗派を超えた仏教に徹し、生きている人々の教化救済に努めることを決意する。

その後渡米した黒田さんは、ロサンゼルスの禅センターで二年間開教師として過ごし、人類の福祉の向上と世界の恒久的な平和実現のために自らを捧げようと、新寺を建立するため帰国する。

この黒田さんの情熱に賛同した多くの人々の支援を受けて、横浜市営墓地の門前に横浜善光寺が誕生するのである。

「私は、そこで葬儀や法事だけでなく、若い人々が、お寺に対する認識を改めてもらう第一歩として、子供たちを対象にした日曜学校から始めたのです」

この黒田さんの宗教人としての新しい実践活動は、たちまち多くの共感者を生み出し、十数年の間に、二六〇〇という強力な檀家をつくり上げることに成功した。

そんな宗教活動の中でも黒田さんは、宗派を超えた人材育成の夢を忘れなかった。

そしてついに、一九八四年一月一五日、善光寺開創一五周年を記念して開設したのが、海外留学僧育英会であった。

募集の範囲は宗派を問わないだけでなく、場合によっては僧籍がなくともよい。学業操行共に優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るぎなく、仏法のため、人のためなら自分の命も惜しまないという人材を選んで留学させ、そのための旅費、生活費のすべてを負担しようという制度である。

「各国に派遣された留学僧たちは、それぞれ立場で物を見、考え、修行という形に集約さ

せて帰ってきます。自ら国を選ぶのですから、当然その国で学ばなければならないという目的と意図があります。

彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのかそれはまったく未知数ですが、必ずや宗派を超えた本来の仏教徒になってくれるだろうと信じています。死者の供養だけを生業なりわいとするような安易な生活者になるのではなく、釈尊の教えを情熱を持って布教する宗教人になってくれるはずだと確信しています」と、黒田さんは自信を持って語るのだ。

四

私が、このシリーズ「高齢化社会」に黒田さんを取り上げたいと思った理由は、日本人の大多数が一番かわりのある仏教の戦後の在り方が世直しの主体足り得ていない、宗教者たちの現状へのアンチテーゼからである。

高度経済成長の論理の中で、日本における仏教人たちは調和のとれた社会づくりのためにどれだけ力を注いだのかと思う。

日本経済は確かに繁栄をもたらした。

だが、働いて得た富の配分は適正だったのか、経済の成長がもたらした環境破壊にどれだけの保全投資が行われたのか、都市化の中で、人々の心は蝕むしばまれてきはしなかったのか、老後の不安は解消できているのか……。

こうした様々の問題に戦後の宗教人たちはまともに取り組み、闘ってきたとは私には到底思えない。

そんな問題意識すらあつたのかも疑わしい。

お寺を立派にし、檀家を増やし、税制上の有利性に乗っかって事業拡大に努めてきた姿だけが浮き彫りにされて、宗教人に対する期待は一般市民の側にほとんどないのが実情だろう。

そんな中で、黒田さんは宗教の根源的な在り

方から見詰め直そうとした。

宗教人は生きている人々のために何ができるのかを自らに問うことから、黒田さんの行動は始まった。

黒田さんは、お寺を地域社会のコミュニケーションの場にしようとした。人々が集まり、語り合い、矛盾した社会の問題をどうしたら解決できるかの知恵を出し合う場にしようとした。

黒田さんの説教の場であるに止まらず檀家同士が互いに学び合う場にしようとした。

そんなコミュニティーの場で黒田さんは、一食に一口のご飯を節約して善光寺に寄せてほしい、それで育英会を運営したいと呼びかけたのである。

やがて黒田さんの夢は、檀家の人々の夢となつて育英会が実現した。

すでに六〇人以上の留学僧たちが派遣され、多くのことを学んで帰ってきた。

五

今、日本の高齢者たちは、前号で触れた通り決して幸せな環境にはない。

そのために、戦後の多くの宗教人たちは本来の役割を果たして来たとはいえないだろう。

不幸な晩年を送って亡くなっていく人々をただ供養しただけで、その魂は平安に帰ることができないというのだろうか。

生きている間に、彼らに生きがいを感じさせ、自らの存在理由を自己確認させ、天寿を全うする時、欣然と死に向かうことができようにすることこそ、宗教者たちの最も重要な役割ではなかったのか。

オウム事件が一段落した後でさえ、宗教人たちからこの事件を通しての自らの総括が聞こえてこない現実には、私は今の日本の宗教界の衰微ぶりを感ぜずにはいられない。

そもそも仏教精神とは、和合の原理に始まったはずである。相手を倒したり、相手と対立したりするのではなく、相手を認め、相手を容認し、相手と仲良くすること。闘争するのではなく、互いに相手を理解し、協力することではなかったかと思う。

仏教の基本原理は「共生」であろう。仏教徒たちは、「共生」のためにこの国の戦後、何をしたのだろうか。

この国で、経済優先の価値観が怒濤のような力で強者、弱者をつくり上げてしまった現実には、仏教徒たちが立ち向かおうとしたことがあったのか。国内だけの問題ではない。国外においても日本経済は強大な力で開発途上国の市場を占有し、経済支配を強めてきたのである。それが反日感情を生み、経済摩擦をつくり出してきた。こうした弱肉強食の現実には仏教本来の和合の精神はどう発揮されたのか。

政治や経済の矛盾を精神の面から正面切つて問題提起したり、解決しようとするエネルギーが戦後の仏教界に存在していたとは思えない。

黒田さんの生き方は、この国の宗教人の生き方に一石を投ずるものだと思う。

六

話の後、黒田さんが寺を案内してくれた。本堂はきらびやかな装飾の少ない簡素な広場だ。

日本のお寺の本堂はどれもこれも重々しくきらびやかな装飾で一杯である。それがまた信者にありがたさや畏敬の念を起こさせる要素なのだろうが、横浜善光寺の場合は、檀家の人々が集い、語り合う広場になっている。

こんなところにも黒田任職の宗教家としての強い意志が貫かれているように見えた。

二一世紀は心の世紀だという。文明の進歩と人間の精神の「共生」こそが、新しい世紀に希

望をもたらずキーである。黒田さんの壮大な実験に注目したい。

——注 月刊「黙」(1995・8)より転載しました。

ばば・こういち 放送ジャーナリスト。本名・馬場康一。一九三三年大阪生まれ。山形育ち。東北大学経済学部卒業。大和証券事業法人部、文化放送アナウンス部、フジテレビ編成部を経て、東京12チャンネル(現テレビ東京)編成課長。その後フリーの放送ジャーナリストとしてテレビ、ラジオに出演。司会者、インタビュアー、レポーターなどレギュラー出演を中心に番組の企画、構成、プロデュースなどにも数多く参加。放送批評懇談会理事。

特集・学園めぐり●駒澤学園の巻

駒澤学園躍進の奇跡を産んだ移転事業

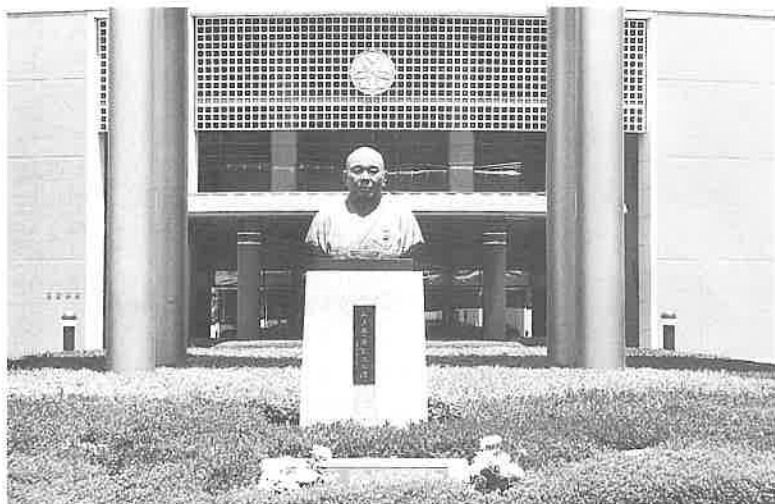
学校法人 駒澤学園 学監 伊藤文雄

駒澤学園は、昭和二年道元禪師のご精神を信奉し、教育に活かす目的で世田谷区弦巻に創立された学校である。しかし高邁な理想とは裏腹に戦災で全てを失った学校は、昭和三十年代になっても教育条件は悪く十分ではなかった。戦後の復興は高校生の急増期に校舎を建て、多くは借地だった校地をかうことで進められた。昭和四十年に短大ができ、除々に経営の基盤を固めてきた。しかし、世田谷の校地は狭く、校舎の建て替えは困難で、大学の新設は二十三区内

の法的規制もあって、これ以上の発展は望めず、私はどうしても外に校地を求めざるを痛感し、このことを理事会に強く要請してきた。

昭和五十五年、学園の将来計画が練られ、理想の土地を求めて東奔西走した。

稲城の土地は大手A大が出ようと断念した所であった。広い土地を安く買うには市街化調整区域しかない。規制を解かなければ学校はできない。私は地元で政治力のある稲城市農協を紹介され、担当課長に会い、地域の活性化を進



創立者山上曹源先生胸像

めたいという熱意と人柄に感じるものがあり、学園の精神や将来構想を語り意気投合した。そして昭和五十六年、理事会で稲城市へ全面移転を決定してもらい、上田祖峯学園長のもと果敢に実行に移した。

他にも名乗りをあげたT私大は農協の力で整理した。健康で文化的街づくりを標榜してきた市長を先頭にして市議会の誘致決議を出してもらい、市の土地利用の基本構想を東京都に持ち込み、開発認可へ向けて大型プロジェクトを始動させた。

用地買収を予算内に収めるには、この土地の六〇%をもつS鉄道の協力が絶対必要であった。会社詣でが毎週のように続いた。不動産の担当部長から「うちは慈善事業じゃないんだから。」と言われたこともあった。私は旧知を頼みS鉄道の実力者に会い、交渉の結果破格な値段で買収することに成功した。しかし、個人の地主は



坐禅堂の聖僧(文殊菩薩)

売るといっても、気に入らなければ病院に入院して、会ってもくれなかった。四〇%の土地が買えないまま開発に向けて事業は進んだ。その間の不安と重圧は大変なものであった。結局この土地はS建設の社長の尽力もあって二年後に買収できた。

土地が買えて、短大英語英文科の申請を始めたが、文部省の窓口は時間が足りないのと手続の不備で門前払い同様であった。必死の交渉を

続けて締切日の夜中に受け付けてもらい、私は市への公約をかううじてはたすことが出来て胸をなでおろした。

しかし、この経験は後に四年制大学の申請に大いに役立った。

事業資金は当初から不安であったが世田谷校地の売却が円滑に進み事業にはずみがついた。

こうして学園は、平成元年、美しい自然の中で本学の心を育む教育を実践出来る環境や、他校の追随を許さない近代的教育施設を兼ね備えたキャンパスを手に入れることができた。

移転事業の余勢をかって、平成五年に駒沢女子大学を設置することが出来た。

駒澤学園は来るべき二十一世紀を展望して、建学の理念に立った新しい教育内容と、大学に課せられた社会的責任をいかに果たしていくべきか真剣に取り組んでいるのである。

特集・学園めぐり●駒澤学園の巻

禅の国際化に貢献する女子大学をめざして

駒沢女子大学理事 事務局長 長尾通之

道元禅師の教えを建学の理念として昭和二年に設立された駒澤学園は、来る平成九年に創立七十周年を迎えようとしています。本学園のめざす女子一貫教育を完成するものとして、また禅を建学の精神とするわが国唯一の女子高等教育機関として平成五年に設置された駒沢女子大学は、その記念すべき年度に第一回卒業生を世に送り出すことになり、大学設置のために粉骨碎身した設置委員の一人として、感慨も一入であります。

駒沢女子大学の設置はたんに、幼稚園、中学校、高等学校、短期大学からなる本学園を、女子総合学園としての一貫教育完成へと拡大したというような、いわば学園沿革上の特記事項に止まるのではなく、明確な時代的、社会的要請に応える意義深い事業であると確信しております。この背景に、女子の進学率上昇、高学歴志向、社会進出というわが国の社会状況があることは申すまでもありません。さらに国際化、情報化の趨勢が男女を問わず大学卒業者に新しい知識



群石むざたに校内校

と技術を求めていることは明白であり、一学部（人文学部）、二学科（日本文化学科、国際文化学科）から成る駒沢女子大学のカリキュラムにおいても、それらは最優先の学習要素として位置づけられています。

しかし、禅を中心とする仏教主義の女子大学によってわたくしたちがめざすものは、来るべき「心の時代」にふさわしい新しい人間像の育成であります。禅はその精神的価値の原点であ

り、自然と伝統への再認識を通して高い人間性を養う道であります。いま、世界は国家と民族のエゴによる紛争に明け暮れ、繁栄と快楽を追求するあまり、かけがえのない自然を破壊して省みません。明日を担うべき若者たちも物質主義と拝金主義に毒されています。この現実立って二十一世紀の世界を展望するとき、われわれ大学人が志すべきものは、地球上のすべての国家、あらゆる民族の尊敬を集めるに足る、幅広い知識とたおやかな心との真の教養を身につけた若い日本女性の育成であります。

そのために本学のカリキュラムでは、仏教化学科では仏教部門として禅学と禅文化に関する講義や演習をはじめ、正法眼蔵、典座教訓など禅籍を学ぶ科目が重点配置され、本学の特色を作っています。そして仏教部門の周辺に歴史、文学、美術、言語の諸部門を配し、日本文化を

総合的に学習するよう構成されています。国際文化学科では、必修の仏教学のほか、専門科目の中に宗教文化史としてキリスト教、イスラーム教と並んで仏教が設けられています。もちろん、国際関係、国際コミュニケーション、地域文化、比較文化の各部門が、外国語とともに中心になります。また、両学科ともに、年間を通じて本学が主催する仏教行事や坐禅実習、永平寺参拝旅行等に参加する機会が用意されています。

仏教と禅文化の国際化は駒沢女子大学の掲げる大目標の一つであり、本学の卒業生を海外に送り出すだけでなく、世界の、とくにアジアの若い女性たちを留学生として積極的に受け入れ、禅の精神を基礎とした教育を実施することも、その目標を達成するための重要な方法と考えております。現在すでに十名ほどのアジア人留学生が日本人学生と机を並べて学び、ともに坐禅

を実践しています。国際交流を通じて異文化を理解し合うことが、世界の平和と進歩に貢献するとの確信のもとに、仏教と禅の精神を中心にした大学教育とその成果を国際的に展開する、これが駒沢女子大学の理想であり、最終目標でもあります。



坐蒲がおよそ六百個用意されている

前角博雄老師が急逝

ロサンゼルス禅センター主管

曹洞宗のロサンゼルス禅センター主管で、アメリカ、ヨーロッパの各地に禅道場を開いて多くの外国人の嗣法の弟子を育てた前角博雄老師が五月十五日午前一時、急性心不全のため、東京都品川区小山の桐ヶ谷寺で死去した。六十五歳だった。

前角博雄老師は昭和六年二月二十四日、栃木県大田原市・光真寺三十六世黒田白純大和尚の二男として生まれる。駒澤大学を卒業後、大本山總持寺に安居。原田祖岳門下の安谷白

雲和尚並びに臨濟宗の釈定光門下・苧坂光龍和尚の室に入って大事を了畢。師父・白純和尚に嗣法し桐ヶ谷寺三世となる。

昭和三十一年、ロサンゼルス禅宗寺の駐在開教師として渡米し、ロサンゼルス禅センター仏真寺、および陽光寺を開創。さらに黒田インスティテュート（研究所）を設立し、学長に就任。ニューヨークの禅真寺、道真寺、フランスの法玄寺、オレゴンの地藏寺を開山し、このほかメキシコ、ポーランド、ドイツ、

オランダ、イギリス、オーストラリア等、世界各地に禅道場を建立して禅風挙揚につとめた。

外国人の嗣法の弟子は十二人にのぼり、曹洞禅の世界的普及に果たした役割は極めて大きい。平成六年、日米文化交流の功績に対し、ニューヨーク市立大学の創立者であるタウン



ゼント・ハリスを記念する「ハリス創立記念賞」を門下の白梅会と共に授与されている。

外国人に対する洞門の海外伝道の中核を担ってきた存在だけに、帰国中の急逝は関係者に大きな衝撃を与えている。

前角博雄老師は四月中旬に来日し、五月十八日にアメリカへ帰国の予定で、十四日「母の日」には生地である栃木県大田原市の光真寺を訪ね、母堂の墓参を済ませた。その夜、前住職地の桐ヶ谷寺に戻り、ふだんと変わらぬ様子で眠った。翌早朝、実弟の黒田純夫住職が声をかけに行って初めて異変を知ったという。

前角博雄老師密葬儀

突然の遷化を哀悼

—— 海外の指導者育成に前人未踏の足跡 ——

帰国中に急逝した曹洞宗のロサンゼルス禪センター主管・前角博雄老師の密葬が五月二十日午前十時四十分から、東京・品川の桐ヶ谷斎場で、大雄山最乗寺・余語翠巖山主の乗炬師により営まれた。アメリカから慧鏡夫人や子供、遺弟らが駆けつけ、国内各地から多数の僧俗が参列して、海外での指導者育成に前人未踏の足跡を残した前角老師の突然の遷化を哀悼した。葬儀委員長を駒澤大学の奈良康明学長、副委員長を駒沢女子大学の東隆眞副学長と大本山永平寺の松永然道国際部長がつとめた。

前角老師の訃報は世界各地の弟子たちに衝撃をもって伝えられた。各地の禅道場では甲斐の摂心修行に入り、日本での密葬儀と時を同じくして読経が行なわれた。本葬儀は百日

思い出のアルバムから

昭和七年 俊雄兄と博雄老師



大田原 黒田師が渡米



黒田博雄氏

大田原 市光真
寺住職 黒田白
純氏の

次男博雄師(三五)(駒沢大学卒)は
このほか米国ロスアンゼルス曹洞
宗團理事會よりの招請により同地
開教師として渡米することとなり
五月二日神戸出帆の山崎汽船で出
発することとなった。

同氏は希望者七十六名中二名の選
に入つたもので滞米五年の予定。

昭和31年5月 下野新聞より

思い出のアルバムから



桐ヶ谷寺方丈と御母堂



光真寺方丈と共に



法話中の前角老師

後にアメリカで厳修された。

戦後四十年間にわたり、アメリカ、ヨーロッパ各地に曹洞禅の道場を開き、多くの外国人子弟を育成した。出家得度の弟子五十人余を輩出し、嗣法の弟子も生んだ。授戒の戒弟は八百人以上にのぼっている。宗務庁主催の「伝道教師研修所」の主任講師を三回にわたって務め、外国籍を有する曹洞宗僧侶に対する、外国人による法灯伝持の道を開くため尽力した。

東京・品川の桐ヶ谷寺三世で、現在は東堂。開創した道場はアメリカに六カ寺あり、ロサンゼルス禅センター佛真寺の開創二世、禅マウンテンセンター陽光寺の開創二世、禅コミュニティ・オブ・ニューヨーク禅真寺の開山、観世音サンガ・ワサチ禅センター法真寺の開山、禅マウンテン・モナストリー道真寺の開山、禅コミュニティ地藏院の開山になっている。

佛事師は、秉炬師を大雄山の余語山主、奠茶師を桐ヶ谷寺の本寺である東京・港区の小坂機融泉岳寺住職、奠湯師を群馬県桐生市の橋本弘雄大雄院住職、逮夜導師を静岡県榛原町の西脇悦道釣学院東堂、初願忌導師を神戸の志保見道元八王寺住職がつとめた。

十九日は逮夜念誦の後、遺弟代表が一人ずつ追悼の辞を述べた。法嗣である禅真寺の徹玄グラスマン師は嗚咽をこらえて、「師に最初に会ったのは三十年前だ。私が教わったことは、生きるときは生きる、死ぬときは死ぬということだ。あまりにも早い死に言葉もない。老師が遺された教えを継承し、老師に恥じないように精進する」と新たな決意を表明した。

また法真寺の玄法マーゼル師、道真寺の大道ローリー師、地藏院の澄禪ベイズ師は、「老師の身体全体が教えだった。老師のいのちは観音のように輝いていた。私の人生は老師の縁によって活かされている」「老師は西洋に禪を弘めるために渡米し、アメリカで人生を終わるつもりだと言われた。自分の語学力で法を伝えることができたらうかと悔いておられたが、老師の言葉は充分に私どもに伝わり、法を受けとめることができた」「亡くなる前に母の墓参をしたことを聞いた。老師の母に対する深い愛を、老師にいただいた法と受けとめている」とそれぞれに感謝と哀惜の言葉を捧げた。

法類を代表して、実弟である横浜市黒田武志善光寺住職が謝辞を述べ、前角老師が神戸から渡米した時の逸話を披露。「渡米して四十年、独立して三十年近くになる。今日、世界十カ国と法縁を結び、十数の禪センターを設立した。世界に誇るべき弟子をたくさん育成し、六十有余にして世を去った。その後の人生は残された私たちの公案と受けとめてくれる」と心情を語った。

二十日の密葬では、曹洞宗の伊東盛熙宗務総長、駒澤大学の鈴木格禪教授、駒沢女子大学の東隆眞副学長、一燈園の石川洋同人、桐ヶ谷寺の斎藤稔総代が弔辞を捧げ、生前の道業を称えた。

伊東宗務総長は、前角老師がロサンゼルス禪センターの基礎を築き、禅ブーム興隆の大拠点として注目され、その活動は米国内はもとより、メキシコ、イギリス、オランダ、ドイツ、ポーランド、オーストラリアにまで及んだこと。また学術面でも「黒田インステ

思い出のアルバムから



桐ヶ谷寺にて
グラスマン老師と
無量師



光真寺墓参中の老師



昭和60年頃
品川駅にて

「イチュート」を創設して八冊もの英文学術書を出版するなど、積極的に曹洞禪の国際的参究に貢献したことを指摘。

さらに宗務庁主催の伝道教師研修所の主任講師をつとめ、懸案だった外国での指導者育成の端緒を開いたことを挙げ、「特に法灯の伝持を強調された師の教えは、宗門の命脈として北米修行の原点となろう」と、その功績を高く評価した。

鈴木教授は「あなたが正法眼蔵についての件でお電話を下さったのは、おかくれになる僅か二日前のことでした。そのあなたのお声の温もりが、まだ私の耳の底に親しく残っています。そのお声の温もりの未ださめやらぬ間に、あなたは突如、化を他界に遷されてしまいました」と切々と「惜別の辞」を読んだ。

「あなたには急ぎ現し世を去って、彼の地に赴かねばならぬ使命がございました。ようか。あなたは御両親様の誇りであり、御兄弟の皆様のご光であり力でした」「至誠熱血の人、博雄大和尚。あなたは不毛の異国に仏法の真実を担われた、大いなる伝道の勇師でした。」——鈴木教授は遺影の前にして痛哭の情を隠そうとしなかった。

東副学長は、七月に渡米して前角氏の主宰する禅センターなどを視察する計画があり、その打ち合わせで五月八日に桐ヶ谷寺で前角氏らと歓談の一刻を過ごしたのが最後になったと無念の想いを吐露。

愛娘が写った一枚の写真を見せてもらった時の、前角老師の「少しはにかんだような、少し照れたような、やさしい表情」を忘れることはないと言葉に語りかけ、「約束通り訪米

行脚の旅に出発する所存だ。悲しいことに、これは前角老師追悼の旅、前角老師の御遺跡巡礼の旅となる」と述べた。

長崎で訃報に接したという石川同人は「自らを生んで下さった母親の報恩のために、身を粉にして尽くして下さった母親のお墓参りを済ませて亡くなったのは、これ以上の大往生はない。それにしても早過ぎはしないか。行き先を見失っている世界に、あなたの死は世界の損失です。あなたは本当の種蒔きをなさった。お別れは本当の始まりであることを教えて下さっている」と語りかけた。

桐ヶ谷寺の齋藤総代は「卒然と泰山木の花散りし」と追悼の句を捧げた。曹洞宗の北米開教総監部からフアクシミリで届いた山下顕光総監の弔辞も読み上げられた。

余語山主は「薫風浪藉門良畔 信手撮来桐谷辺 超短越长天地宝 大山自重乾坤禅」と乗炬の香語を唱えた。法要後、前角老師が残した遺文について「最後の教えといふべきものだ。如是之法とあり、現成公案とある。共に同じことだ。老師の真髓であろうと思う。このことを参究されよということだ」と垂示した。

葬儀委員長の奈良学長、法類代表の光真寺・黒田俊雄住職が謝辞を述べ、遺弟代表の徹玄グラスマン師は「三十五年余にわたり老師との御縁をいただき、修行させていただいた。二十六年前に出家得度を受けた。老師の法は温かく私どもを包んでくれた。ある時、老師は立ち働く人の後ろから団扇であおいで風を送った。その人が振り向くと、あおぐ手を止める。前を向いている時は後ろからあおがれているのを見ることはできない。老師から学



老師の高弟の方々＝密葬遠夜

んだのは、そのようなやさしさだ」と遺徳を偲んだ。葬儀副委員長の松永師が閉式を告げて密葬を終えた。この後、祭壇から柩が降ろされ、参列者は遺体を菊の花で飾って最後の別れを告げた。柩はアメリカから駆けつけた遺弟の手で火葬場まで運ばれ、茶毘に付された。

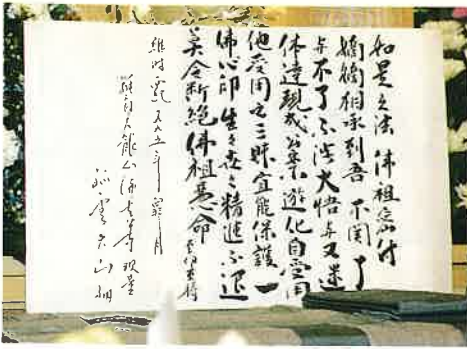
曹洞宗の海外開教は、外国人僧に対する外国人自身による法灯伝持が近年の課題となっていた。そのための制度や機構の整備が進められ、伝道教師研修所における特別摂心の修行など着々と具体的ステップが踏まれてきた。その課題を担い、遂行する中心的役割を前角老師は担っていた。マスコミに禅を派手に宣伝する家風ではなかった。禅仏法を着実に異国に根づかせ、育てるために、彼の地に骨を埋める覚悟を秘めて、静かに燃え続けた。

前角博雄老師急逝



密葬

東京・桐ヶ谷斎場



▲遺文

▶ 遠夜導師・西脇悦道老師



◀ 悲しみの参列

▶ 秉炬師・大雄山余語山主





▲挨拶する黒田方丈

▼アメリカから駆けつけた家族



▲奈良康明駒澤大学学長



▶東隆眞駒沢女子大学学長代理



徹玄グラスマン師



大道ローリー師



玄法マーゼル師



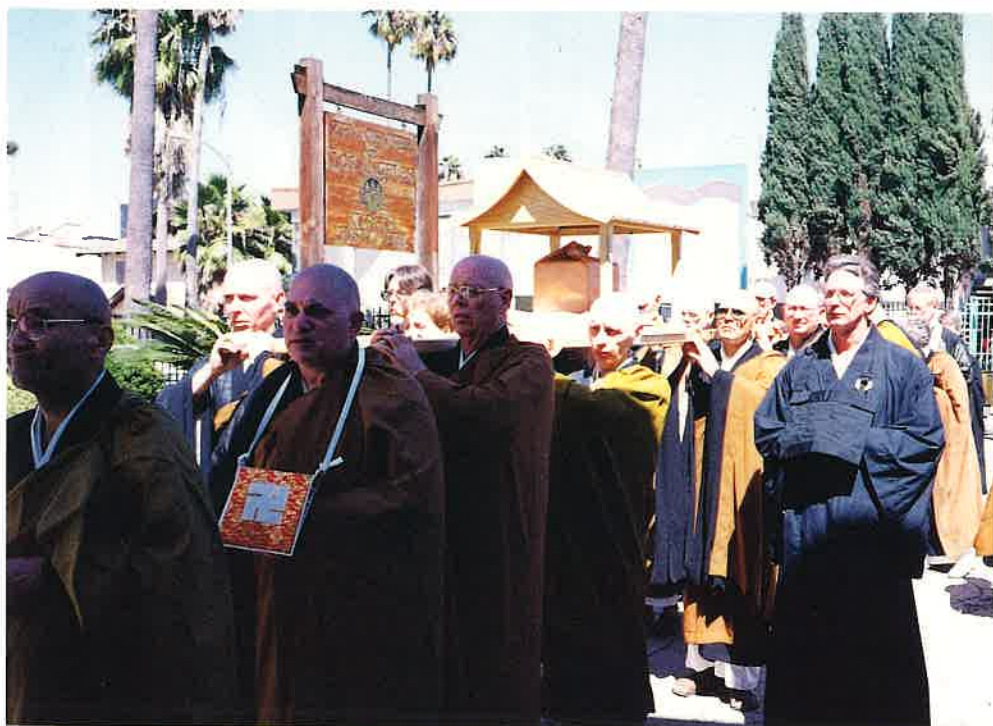
澄禅ベイズ師



願います



▶茶毘に付された御遺骨を胸に先頭が桐ヶ谷寺方丈



◀ 御遺骨が式場に安置される。ロス禅センターで



◀ 中央の仏事師(掛真仏事師)天心・
アンダーソン師。ロス禅センター遠夜

居間の遺影▶



▶ 挨拶する善光寺方丈



▶ 挨拶する光真寺方丈



▶ 埋骨 禅マウンテンセンターに於いて





◀ 黒田方丈とグラスマン 徹玄師

▼ 澄祥ベイズ師と



▼ ロスの日米文化会館に於いて





余語翠巖老師 香語 (訓読)

薰風狼藉す門良の畔 手を信^のべて撮^のし来る桐谷の辺^{ほと}り
短を超え長を越ゆ天地の宝 大山 自ら^{おのずか}重し乾坤の禪
恭しく惟れば

新般涅槃佛真寺開山桐谷三世

大山博雄大和尚真位

教界の木鐸 宗門の大仙

昔^{そのかみ}日 生を下野に享け 生を示して不生を現^くず
今^{こんぜ}世 滅を桐谷に示し 滅を証す不滅の辺り

駒澤に螢雪の功を積み 研鑽すること歳あり

叢林の夢を諸嶽に結び 眠り足ること多年

更に白雲老門の庭に遊び 光龍門下の学 悉く^{おむ}畢る

ここにおいて白純老漢の室中に驪龍含下の玉を奪得す

高く鉢^{はつ}囊^{のう}を桐谷山頭に掛け 拄^{たす}杖^{せう}を拗折し

黃冠振揚つて離俗の掃葉桐谷の
短短長長の地獄大山自重純神

兼備

新設涅槃佛曼荼羅山桐谷三
大山信雄大和尚復位

教興木鐸 宗門大仙

昔日 當生竹常仙 不生不生現
全也 示滅於桐谷 証滅不滅也

核駒淨筆堂切 研鏡有春

経書林夢掃菴 眠足与佳

更儲自雲をへ廻 走能つ下苦悉畢

於是自就を僅玄下尊得獨能言不玉

高掛鉢葉桐谷山臥 柳折拄杖

更飛錫杖玉つて伴曼名

隔と半海道陽神甚各地圖

能如身何 現成公東致身是事

是與不是 短長短不覆前

六十五年の生涯今也此斗雲飛

時初道人河津白蓮華

喝

石人踏雪去

木馬六十年

更に米国に飛錫して佛真寺を開く

もろもろ廻りて禅道場を開き 佛光各地に圓かなり

如是の法に游んで現成公案商量歿おほんぬ

是と不是と長短を超越して覆蔵せず

六十五年の生涯 今や北斗裏に蔵す

時節過ぎて人いづくんぞ追尋することを得ん

喝

石人 雲を踏んで去り

木馬 火中に嘶いなきく

弔辞

曹洞宗宗務総長 伊東盛熙

ロサンゼルス禅センター仏真寺主任開教師前角博雄大和尚の葬儀に際し、謹んで真位の増崇を祈念いたすものであります。

惟うに師は道念厚く開教四十余年の永きに亘り常に宗門の禅の昂揚に精魂をそそがれました。

昭和三十年十一月二十五日開教師の任命を受けアメリカの両大本山別院禅宗寺に赴任せられ、約十年の歳月の後、禅センターを興し現在のロサンゼルス禅センターの礎を築かれました。当時師を慕って多くの若者が集まり禅ブーム興隆の一大拠点として社会の注目を集めることとなったのであります。

師のもとからは多くの優秀なる人材が輩出し、現在リーダーとして各地で師の教えを実践修行されておられます。また師の活動は広くアメリカ国内はもとよりメキシコ、イギリス、オランダ、ドイツ、ポーランド、またオーストラリアにまで及び、まさに世界的活動といえるものであります。

また一方、学術面においても黒田インスティテュートを創設し、八冊にも及ぶ英文による学術書を出版するなど、積極的に曹洞禅の国際的参究に貢献なされました。

さらに近年は宗務庁主催の伝道教師研修所の主任講師を三回にわたりお勤め下さり、いわば永年の懸案でありました外国での指導者育成の端緒をお開きいただいたわけであります。

特に法灯の伝持を強調された師の教えは、宗門の命脈として北米修行の原点となることでありましょう。

このようにそのご生涯の大半を海外での曹洞禅の布教に挺身せられたその功績は、計り知れないものであります。

しかしながら、この度の突然の悲報に接し、わが宗門の損失大なるものを感じ、一時茫然とする思いでありました。まさに北米曹洞禅の新時代を迎えるこの時、師を中心にその展開がはかられるであろうことは、誰の目にも明らかなことでありました。国内外の師を知る方々の嘆き悲しむところでもあります。返す返すも師のご遷化に痛惜の極を抱かざるえない次第であります。

今はただ、生前の道業に対し深く深く感謝申し上げ、老師の大寂定中安らげきを念じ、謹んで弔辞といたします。

一九九五年五月二十日

惜別の辞

駒澤大学教授 鈴木格 禅

米国 ロサンゼルス禅センター・佛真寺主管前角博雄老師。

あなたが正法眼蔵についての件で御電話を下されたのは、おかくれになる僅か二日前のことでありました。

そのあなたのお聲の温もりが、まだ私の耳の底に親しく残って居ります。そのお聲の温もりのいまださめやらぬ間にあなたは、突如化を他界に遷されてしまいました。享年正に六十四歳、あまりにも早い御遷化であります。

あなたは急ぎ現世を去って彼の地に赴かねばならぬ使命がおありだったのでしょうか。

あなたは御両親様の誇りであり、御兄弟の皆様の光であり力でありました。

あなたは若き日遠く米国に開教し、幾多の困難を乗り越えて独自に佛法の道を切り拓かれて参りました。

そしてその法燈は今やひとり米国のみならず欧州にも伝えられて、力強く根を下ろし展開しようとしている矢先でありました。

至誠熱血の人 博雄大和尚

あなたは不毛の異国に仏法の眞實を擔われた大いなる伝道の勇師でありました。その突然の御遷化はまさに仏法開拓の戦場における壮烈な戦死であるということができま

宗門は惜しい人を失った。あなたの新しい佛法を伝うべく旅立たれたのでしようか。それとも大寂室中に坐してしばらくの憩いとられるのでしようか。

あなたの御遺影を前にして私は今痛哭しつつ、あなたの御魂の遥かなる雲の上の旅路の永久に安かれと、至心にお祈り申し上げる外に為すべを知りません。

ああ畏友 佛真博雄大和尚の御魂よ 永遠に鎮りませ

永久に鎮りませ

さようなら佛真博雄大和尚

平成七年五月二十日

鈴木格禪謹んで追悼申し上げ

弔辞

駒沢女子大学副学長 東 隆 眞

謹んで、桐ヶ谷寺東堂、仏真寺開創、故前角博雄老師の御真前に弔辞を捧げます。

五月十五日朝早く、善光寺黒田老師よりお電話が入り、今朝午前一時、前角老師が急逝されたとお知らせに、私は呆然自失ことばを失ったのでありました。

ちようど一週間まえの五月八日、私は桐ヶ谷寺様で前角老師を中心に善光寺黒田老師、桐ヶ谷寺黒田老師をはじめ関係のみなさま方とお会いしたばかりでありました。そして前角老師と打ち合せをいたしましたのであります。

その打ち合せというのは、本年七月下旬に十日間ばかり、私は善光寺黒田老師と一緒にアメリカの前角老師のロサンゼルス禅センターをはじめとする参禅道場、カリフォルニア大学などを歴訪し、かの地の禅を学ばせていただくことについての日程の検討でありました。打ち合せもとどこおりなく終り、そのあとは前角老師をかこんでお食事の一刻をもたせていただきました。それは実になごやかでたのしいふんいきの一刻でありました。その時、老師は一枚の女性の写真を見せてくださいました。

「おや。美しいお方ですね。もしかするとお嬢さんですか」と申しますと、老師は少しはにかんだような、少してれたようなやさしい表情を見せました。

私は、そのやさしい表情をけっして忘れることはないでしょう。

私と善光寺黒田老師とは、前角老師とのお約束どおり本年七月下旬訪米行脚の旅に出発する所存です。悲しいことに、これは前角老師追悼の旅、前角老師ご遺跡巡礼の旅となつてしまいました^が、しかし、これも前角老師のご遺志に従うゆえんかとうけとめております。

ご承知のとおり、前角老師は、明晰なる頭脳と、不撓不屈の精神力と、燃える^がごとき道心と、名利を捨てきつた愚のごとき魯のごとき大誓願心とを抱いて、第一に曹洞、臨済の家風を究め尽くされ、第二に、単身アメリカにわたつて四十年、みずからもアメリカ国籍の人となつてアメリカ、ヨーロッパの各地に正伝の仏法を普及され、第三に禅センターや寺院を次から次へと創設され、日本人以外の信者や法嗣（後継者）を多数育成され、第四に、黒田インスティテュートを創立して、みずから道元学会を主宰し、禅の国際的交流や禅の研究に関する便宜を促進し、ハワイ大学の協力をえて摩訶止観、伝光録、十王経そのほかをはじめとする八冊もの仏教書の英訳本を出版して、世界的なレヴエールで学術的貢献をなされ、第五に、横浜善光寺留学僧育英会の顧問として、春秋に富む若い留学僧たちのご指導にあたられたのであります。

前角老師のご業績は、永遠に不滅であります。老師のおこころをこころとして、老師の

薫陶を受けた多くの老若男女たちは、いよいよ仏法興隆、世界平和のために努力精進されることでありましょう。

前角老師のご指導、ご懇情に哀心より感謝申し上げますとともに、老師の大誓願心にみちびかれて、仏法興隆に向って努力する決意を新たにしますのでございます。

前角博雄老師。ほんとうにありがとうございます。ありがとうございました。ありがとうございます。

合掌

平成七年五月二十日

弔 辞

桐ヶ谷寺檀信徒總代 齋 藤 稔

前角御老師の悲報を桐ヶ谷寺の方丈様より御知らせを受け、あまりにも突然の事に只呆然とするばかりで御座いました。

御老師はアメリカ、ロスアンジェルスを始めアメリカ各地に於て佛教界のために広く布教活動を永年に亘つて精力的に努力されまして、佛教界の爲に大きな貢献をなされました。その活動の拠点となったロスアンジェルスには、私共が想像した以上の規模の大きさとアメリカ国内に於ても有名な数多い信者の精進ぶりを目のあたり拝見いたし、御老師の佛教界の爲になされた大きな努力とその成果に、心から敬意を表するものであります。私事ではあります。が昨年私の姉を亡くしました折に、桐ヶ谷寺で葬儀を行いました折に偶然にも御老師がアメリカから桐ヶ谷寺に来て居られました。葬儀の御導師を御引受け下さったのが、今も忘れる事が出来ません。そしてその折も親しく御話をして戴いた事を想ふとこの度の訃報があまりにも突然の事で信じられない気持ちで一杯です。

御老師の佛教界に於ける熱意と貢献はアメリカに於ても大きな評価を得て昨年その功績

に対しアメリカ国より表彰を御受けになりました。この様に内外の佛教界に大きな足跡を残された御老師を失った私共は悲しいばかりの只々残念の極みでございます。

御老師が生前私共に御与え下さいました佛心を心に深く刻んで精進をいたして参る覚悟で御座います。今は只亡くなられました御老師の御冥福と、アメリカに残された奥様御子様方の御落胆と御傷心の回復が一日でも早いことを念じて居ります。

御老師様どうか安らかに御眠り下さい。

合掌

平成七年五月二十日

前角博雄大和尚略歴

昭和六年二月二十四日、栃木県大田原市光真寺三十六世黒田白純大和尚次男として生まれる。

駒澤大学卒業。曹洞宗大本山總持寺安居。原田祖岳老師門下、安谷白雲老師並びに臨濟宗禾山派定光老師門下苧坂光龍老師の室に入って大事を了畢。黒田白純老師に嗣法。桐ヶ谷寺三世となる。

昭和三十一年ロサンゼルス禪宗寺駐在開教師として渡米。ロサンゼルス禪センター佛真寺、並びに陽光寺を開創。さらに黒田インステイチュートを設立し、学長に就任す。その他ニューヨークに禪真寺及び道真寺を開山。フランスに法玄寺を開山。オレゴンに地藏院を開山。その他、メキシコ、ポーランド、ドイツ、オランダ、イギリス、オーストラリア等、世界各地に禪道場を建立し、禪の高揚に努め現在に至る。多数の外国人の嗣法の弟子を育てる。

平成六年、日米文化興隆の功績を認められ、前角老師及び白梅会に対し、ニューヨーク州立大学よりハリス賞を授与される。

平成七年五月十五日、東京桐ヶ谷寺に於いて示寂。六十五歳。

住職地並びに開山地

桐ヶ谷寺三世

ロサンゼルス禅センター佛真寺二世

禅マウンテンセンター陽光寺二世

禅コミュニティ オブ ニューヨーク禅真寺開山

観世音サンガ ワサチ禅センター法真寺開山

禅マウンテン モナストリー道真寺開山

禅コミュニティ 地藏院開山

遺弟並びに法孫

徹玄グラスマン・禅コミュニティ オブ ニューヨーク 禅真寺住職（ニューヨーク）

玄法マーゼル・観世音僧伽 ワサチ禅センター法真寺住職（ユタ州）

大道ローリー・禅マウンテン モナスタリー道真寺住職（ニューヨーク）

澄禅ベイズ・禅コミュニティ オブ オレゴン 地藏院住職（オレゴン州）

獅心ウィック・メキシコ禅道場

徹心サンダーソン…オレゴン禪道場

実道アンチエタ…

天心フレッチャー…

如玄イオット…

妙融アンダーソン…

浄光ベック…サンタバーバラ禪道場

慈鏡ミューラ…

その他、出家得度の弟子五十数名、嗣法終了の法孫数名、授戒の弟子八百余名

思い出のアルバムから



昭和60年 ニューヨークマウンテンセンターにて



了然尼と共に 一九九四年の夏の終り

隠寮にて(禅センター)



一燈園
石川洋先生と共に



■追悼■

前角博雄老師を偲ぶ

駒澤大学学長 奈良康明

(一)

前角博雄老師と私は、実は、同級生である。

昭和二十二年に私が駒沢大学予科に入ったとき、同じクラスに、そのころは黒田と言う名前で、

老師がおられた。がっちりした体格の真面目そうな男、という記憶がある。私は半年ほどで大学を中退してしまったが、老師はそのまま駒大を出られ、師家の道を歩まれた。

後に、老師がロサンゼルス禅センターを開か

れ、基礎が固まったころ、第一回の道元シンポジウムが開かれることになった。その打ち合わせの時に何年かぶりで再会し、この話がでた。二人ともに、それからたいへん親しみをもつようになつたと思う。

老師が禅センターをアメリカの地に確立されたことの意味の大きさ、意義の重要さは、百万言を要しても言いきれぬものではない。仏法とは言詮を超えた宇宙のハタラクであると同時に、それに随順して生きることそのものでもある。

しかもなお、教化のためにはそれを言葉で表現しなければならぬ。相矛盾する要素があつて、日本人に説くことさえ難しいのに、老師はこれを言語と文化の違う欧米人に対してやつてのけられた。

アメリカ人の青年を坐らせ、一対一から始めて、ここまで持つてこられた力量と努力は並大抵のものではない。私はロスのセンターに泊めていただいた際に、随分と苦勞話をお聞きする機会を得た。言葉の不自由さ、考え方の違い、禪の世界觀の欧米人への入りやすさと入りにくさ、センターという教団の運営の諸問題、人間關係の複雑さ等など、大麥苦勞をされておられた。「どうしたらいいでしょうねえ」などと言われながら、実は、老師には何時もはつきりした意思と見通しがあつた。師家としての実力と同時に、組織を作り、動かす企画性と指導力があつて、だからこそアメリカで有数の禪センター

を築き上げることが出来たに違ひないのである。教団の基礎づくりと同時に、法を継ぐ人材を育て上げたことも、特筆しておかなければならない。日本国内でも、眞の嗣法の弟子を打出するのは容易ではないのに。老師には得度の弟子五十余人、嗣法の弟子十二人、印可の弟子一人を育てあげられた。そうしたお弟子さんたちが、みな、黒衣の僧形で、坐禪のみならず、社会的に実践活動を活発に行つてゐる。仏法をきちんと伝承しながら、僧侶としての、また教団としての、在りようが日本と違うのも、やはりアメリカ的な發展というべきであろう。

最近の欧米における諸禪センター形成と發展は、例えば鈴木大拙師が禪を欧米に紹介したのとは、基本的に異なるものと思つてゐる。同師の功績は主に思想としての禪の紹介であり、無論、それなりの歴史的な意味を持つてゐる。しかし、最近の禪仏教の普及は、いずれの禪セン



ターであつても、坐禅堂と本堂、衆寮を中心とする生活の本拠があり、修行者が存在し、それを取りまく信者層があり、経済的に自立している。宗教が社会に定着し、発展していくための必須条件である「教団」が確立され、定着しているのである。老師のロサンゼルス禅センターを中心とする活動は、そうした新しい機運を自らまきおこし、他の範となつたものである。

同時に、これは特に前角老師の功績だが、禅の思想研究にも大きな貢献をしている。黒田インスティテュートを中心とするシンポジウムの開催や、研究会、出版はすでに軌道にのつている。学会で評価を得ている学術研究書の出版も、すでに十冊を超えていよう。今日、アメリカでは、道元思想を中心としながら、広く日本仏教を専攻する研究者が少しずつ増えている。そのほとんどの学者がロスの禅センターを訪れ、滞在し、坐禅し、老師の教えを受けている。老師

自身の禅思想の理解の深さと表現力が、アメリカにおける道元思想研究を促進させたものと言つていい。

(二)

禅はすでに欧米の社会に移植され、根を張りつつあるのであり、新しい時代に入っている。

その一翼を担つて来られたのが前角老師だつた。それだけに、老師の突然の遷化は、今後の欧米における禅仏教の発展に少なからぬ影響を与えるであらうと思う。

今日の欧米には、曹洞宗系ではあるが、様々な系統の禅センターが活動している。いずれもがそれぞれの地域、国に定着していく最初期にあり、いろいろと難しい問題を抱えている。それだけに永平寺、総持寺両本山をふくむ曹洞宗宗門との密接な関係を求める声が強い。また私たち日本の曹洞宗としても、しかるべき援助と

激励の姿勢が必要であらう。

今後の大きな問題の一つに、真の仏法の伝承と、各地の文化との相互変容の問題がある。

道元禪師の場合をみても、中国で学ばれた仏法が、日本の社会に定着するためには、例えば言語、風習、国民性等の關係で、日本化された状況の中で実践されたし、禪師ご自身もそれに努力されている。仏法が定着するためにこそ、その土地々々の文化伝承との相互変容が必要なのである。『正法眼蔵』を始めとする宗典の日本語での思想化と表現、中国とは異なる独自の清規の発展など、その日本化の一例といつていい。同じことが欧米の禪の将来にも言える。欧米人の中で生きていく禪である以上、思想、実践、儀礼、生活様式などの面での変容は必然である。しかし、それが仏法を失うような形で行われたのでは意味がない。だからこそ、どうすれば仏法が保持されるのか、常に留意され、努力され

ねばならないものであらう。

しかし、各禪センターは小さいし、より大きなまとまりの中での互いの切磋琢磨の機会は少ない。一人よがり陥る危険性なしとはしないのである。これは私たちの曹洞宗の場合と比較すると、理解し易い。洞門の寺院は日本全国に散在しているにもかかわらず、思想、儀礼、生活等に曹洞宗として一応まとまった伝承をもっている。これは、一に、両本山への尊崇と僧堂の生活を宗侶が共有していること、すなわち、一つの教団としてのまとまりがあるからである。しかし、世界の禪センターには、相互の横の連絡は無いに等しい。といつて、日本の曹洞宗の枠内に、私たちと同じように位置づけるのは、地理的にも、言語的にも、文化的にも、組織的にも、不可能である。

それだけに、このまま放置したら、おそらく二十年くらい後には、「それでもあなたは曹洞系

の教団ですか？」と互いにびっくりするようなことになりかねないし、法の正しい伝承にも疑問が生じてくる。

したがって、今どうしても必要なのは、各センターの横の連絡をつけ、原点に戻って、共同の修行の体験を分かち合うことであろう。

この点は今日の曹洞宗、具体的に宗務庁も十分に認識していて、ここ十年ほど、世界の各センターの指導者を集めて、共同の特別摂心を毎年開いている。特にこの二年は、言葉の関係もあって、ロスの禅センターの施設を利用し、前角教師を指導者として開かれている。各国から来る指導者たちは、それぞれに師匠を異にしているものの、老師の力量と人格には、皆納得している。特別摂心はきわめて重要な機能を果たしながら、順調に、歩み出していたのである。

そして、今、老師は突如として遷化されました。世界の曹洞禅の修行者グループは、今

後、「仏法」のもとに、どのように自立し、且つ協力し、相互に研鑽し、連帯していくのか。これは禅の国際的な発展のために重要な問題であろう。曹洞宗としても、各地の禅センターと話し合いながら、最善と思われる道をさぐっていかなければならぬ。それだけ、前角老師の力が大きかったということもある。

老師のご遷化を心から悼むとともに、特別摂心を一例として述べることによって、老師の大きな功績の一端を讀えるものである。

(一九九五年八月五日)

■追悼■

畏友・前角博雄師を偲ぶ

鶴見大学副学長 横尾太寿

前角老師が帰国中の、去る五月十五日、突如遷化されたという訃報はわが耳を疑う痛切な知らせであった。禪によって鍛えられたあのシツカリとした背骨と肩巾はまさに頑健そのもの、健康であられるに違いない——そう信じていた私にとって師の急逝はまことに痛恨の極みであった。師とは終戦後、日米講話条約が結ばれて間もない昭和三十一年、共に曹洞宗開教留学僧として渡米した同行二人であった。当時、日本人の海外渡航は極めて規制が厳しく、外交官と

かトップの商社マン・フルブライト交換留学生や研究員などに限られ、日本交通公社に尋ねてもその渡航手続きは不如意なのであった。仕方なく私共は自らアメリカ大使館とか外務省・法務省（入管関係）などを訪れ漸く査証が得られたのであった。年間一千万人もの海外渡航者がひしめく現今にてらし往時を偲べば、今は懐かしい想い出ではある。

さて、そのアメリカの市民社会では、かのメイフラワー号のピューリタンに象徴されるピュ



ーリタニズムの伝統がどのような形で生きてい
るのであろうか。私にとって第一の関心事であ
った。その最も具体的な事例としてアメリカ人
が一市民として、毎日曜日に教会に行くことを
義務と考えている人々の如何に多いことか。単
に新教各派・旧教にかかわらない。自らを教会
出席者即ちチャーチ・ゴアと認め、吾々新参
者の外国人にも教会への出席を勧めるのであ
った。一九五〇年代後半から、この教会参加率が
全人口の六十%を超すという統計もあり、この

参加率の高
さこそアメ
リカ宗教の
特徴かと納
得したのも
であった。
一方、日本
からの仏教

各宗教団はその布教対象が主に日系人社会に向
けられ、戦前・戦中のあの激しい排日運動の中
しかも、戦中における戦時収容所内においてす
ら各宗開教師たちは血のにじむような想いで布
教に努力してきたのであった。ただその底流に
はやはり日本の伝統・檀那寺〓檀家、といった
形態があり、またそのことによって教会寺院の
維持が保たれたのも事実である。世界中から多
種多様の移民が集まり同化され、〓人種のルツ
ボ〓といわれるこのアメリカ社会に果してキリ
スト教以外の諸々の宗教的空間或いは社会的空
間があるのであろうか。渡米後間もない頃のこ
とである。そんな疑念を前角師と語り合ってい
た頃、ある知友から臨済系の老禅僧が一人黙々
として、米人を相手に坐禅の指導道場を開いて
いるので参加してみないかとの誘いをうけ、早
速御案内して頂いた。ごく普通のアメリカ人住
宅、質素な応接室での夜の参禅会。十数人のア

メリカ人が静かな暗闇の中で瞑想坐禅中であつた。鐘の音と共に部屋は明るさをもどし、そこに千崎如幻師の凜然としたお姿と慈愛に満ちた温容が現れ、十五分ばかりの法話が勿論英語で行われ、質疑応答の後散会という実に淡々とした清々しい集会であつた。この時の心象は私共にとって生涯忘れ得ない強烈な印象をとどめることになった。

私は教育界に身を投ずべく夙に帰国してしまつたのであるが、前角師が後年アメリカにとどまり、日系社会のみならず、積極的にアメリカ人社会への開教にふみ切られた道念と原型は、この千崎師の禅窟にあつたのではないかと信じている。

さきにアメリカ社会の宗教的空間を自問したが、アメリカ人の信仰における徹底した個人の自発性とその行動力とは、まさに一箇半箇を標榜する禅家の高風に連なるものであつた。千崎



勤行と語学勉

強の毎日

黒田氏から米国便り

田原市寺町光真寺住職黒田白純
二男黒田博雄氏を以て胸沢大園
科卒は北米ロスアンゼルス日
人仏教協会禪宗寺別院開教師と
て招かれ、五月渡米したが十三
日、光真寺あて次のよつな龍府た
り第二信を寄せた。

写真 禪宗寺別院前の黒田氏
(向つて右)

からチンアカレンヂに通い、語学勉強に励んでいる。当地の気候は内地と委りなく、屋外は焼きつよつな暑さの日もあるが、屋外は湿度が少なく涼きよい。別院では「仏心」という小冊子を発行、別院と邦人との間の連絡をとつている。当地では内地の珍らしい物産を見たいといつていたので、コケシ人形のよつな物産を送つてもいい。

当時の新聞記事 (右・前角老師、左・横尾先生)

師はそのような真面目なアメリカ人、一人、一人にセクトにとらわれず、仏陀の光明と慈悲を五十有余年に亘って伝えられたのだった。自ら「ホームレス如幻」と称し、自分たちの会所を「ただよえる禅堂」と呼び、弟子一人もたず静かに示寂されてすでに三十数余年が経った。

そして、その間、前角師は営々として曹洞の禅風を全米に開示し続けたのであった。日本の二十数倍という広大な全米州で、「草の葉一枚でもよく三世にわたって仏塔をたてうる」という仏陀のお言葉通り、この信心と道念がなければ成し得ることではない。そして、その道念は、実弟であられる黒田大円老師の主催する横浜善光寺留学僧育英会の設立によって、更に強力に支えられることになった。育英会はすでに設立十周年を迎え、法燈の国際化をめざして日本仏教各宗からの留学僧を諸外国に派遣しました、外国からの留学生は、日本国内の諸大学に受け入

れて頂き相互に将来有為なる人材の育成にあた
られている。その御聖業には只々畏敬の念高ま
るばかりである。

タゴールの詩に、「星は螢のように見えること
を怖れはしない」という一句がある。前角師は
星の如き風格をもってアメリカ社会に対された
のだが、人は師を、螢のように見ていたかも知
れない。しかし、師のもとに参集したアメリカ
の高弟たちにとっては、師はまさに星の光りて
あった。その高弟たちによって師の貴い遺業は
必ずや継承され、益々その光を放つことを信じ、
急なる遷化を悼み、御冥福をお祈りするのみで
ある。千崎師の示寂もまた臯月(昭和三十三年)
であった。その奇しき縁を偲びつつ。



Memorial Service
for
Hakuyu Taizan Maezumi

August 27, 1995

Japan America Theatre
Little Tokyo, Los Angeles
California

本葬差定
ORDER OF SERVICE

龕入堂
Procession and Placement of Relics

對真小參
Dharma Dialogue

香 語
Verse Offering

奠湯仏事
Sweet Water Offering

奠茶仏事
Tea Offering

秉炬仏事
Dharma Torch Offering

謝 辭
Appreciatory Words

代表焼香
Incense Offering

焼却供養
Fire Ceremony

導師退堂
Exit of Officials

一般焼香
Incense Offering in the Plaza



Hakuyu Taizan Maezumi

1931, February 24, the third of eight sons born to Hakuju and Yoshi Kuroda at Koshinji, Otawara, Japan.

1942, Tokudo under Sozen Hayakawa

1954, Graduated Komazawa University

1954 -1955, Monastic Training at Sojiji

1955, Soto Sect Dharma Transmission from Roshi Hakuju Kuroda

1955, Zuise, Sojiji and Eiheiji

1955, Third Abbot of Kirigayaji

1956, Arrived at Zenshuji, Los Angeles

1967, Established the Zen Center of Los Angeles - Busshinji

1970, Inka from Roshi Hakuun Yasutani

1973, Inka from Roshi Koryu Osaka

1976, Founded the Kuroda Institute for the Study of Buddhism and Human Values



1980, Founded Zen Community of New York - Zenshinji

1981, Founded Zen Mountain Monastery - Doshinji

1983, Established Zen Mountain Center - Yokoji

1984, Founded Kanzeon Zen Center - Hosshinji

1991, Founded the Dharma Institute, Mexico City

1995, Instrumental in the formation of the Soto Zen Buddhist Association (America & Europe)

Died May 15, 1995, Kirigayaji, Tokyo, Japan



Maezumi Roshi's Last Dharma Words

The Dharma of Thusness has been intimately conveyed from Buddhas and Ancestors.
It has been transmitted, generation after generation, down to me.
It has nothing to do with being complete or incomplete.
Nor does it concern enlightenment upon enlightenment or delusion within delusion.
Just manifest Genjo Koan!
Play freely in self-fulfilling and other-fulfilling samadhi!
Maintain and nourish the One Buddha Mind Seal.
Life after life, birth after birth, please practice diligently.
Never falter.
Do not let die the Wisdom seed of the Buddhas and Ancestors.
Truly! I implore you!

The year 1995 in the Month of Azaleas.
Los Angeles
Abbot of Dairyuzan Busshinji
(Great Dragon Mountain Buddha Truth Temple)
Humbly,
Koun Taizan

These words were taken from Maezumi Roshi's Inka (Dharma Seal of Approval) document to his first disciple, Tetsugen Glassman. Since this was Maezumi Roshi's Last Dharma words, this document, although usually private between master and disciple, is shown here.

■前角老師追悼■

孤雲飛翔して大山元不動

第三回育英生 島 崎 義 孝

日本時間の五月十五日未明、前角老師遷化——の訃報は瞬く間に世界に知れ渡った。数日を経ずしてアメリカ各地、ヨーロッパからも十余人の高弟、弟子が遺体の安置してある東京品川にある桐ヶ谷寺に参集した。これより数日前、アメリカ帰国前には拙寺にも来駕いただく予定で電話も頂戴し、こちらもその心づもりをしていたが、訃報を聞いて一瞬わが耳を疑った。まさか、——とは誰の口からも漏れる言葉だったと思う。

通夜が十九日の夕刻桐ヶ谷寺でいとなまれ、葬儀が二十日に同寺に隣接する桐ヶ谷斎場で行なわれ多くの会葬者があつたが、これは密葬であり本葬は改めて老師の本拠地であるアメリカ、ロサンゼルスで百か日を期してもたれることになつていた。

老師がそのアメリカで始められたロサンゼルス・ゼン・センター (Zen Center of Los Angeles) 以下ZCLAと略す) は、一九八二年以来、マ

ウンテン・センターで毎年五月上旬から八月下旬にかけて夏安居が行なわれているが、今年のもそれは二か月で終了し、ここ一月ばかりは放参も返上、センターのメンバー総出で本葬の支度に携わってきたという。彼らにとってみればまさに前代未聞の大掛かりな仏式の葬儀で、しかも日本からの多くの参列者も見込まれるため、たとえば式次第のようなものにしてからが、日米両国語を用意しなければならなかった。



八月二十五日にはアメリカ国内はもとより世界各地から、多くの人々がロサンゼルス市内南ノルマンディー街にあるZCLA（日本名は仏真寺）に集まった。日本からは仏真寺の本寺であり老師の故郷でもある栃木県大田原市の光真寺、老師の初住寺である桐ヶ谷寺、ZCLAへの留学僧の派遣元である横浜善光寺一行、さらには曹洞宗代表の方々など有縁の人々がるはる波濤を越えてカリフォルニアに飛来した。一行はZCLAの開山堂に型通り拝塔、五盞三拝をすませ、その夕刻には関係者一同がセンターの中庭で精進バーベキューを囲みながら前角老師を偲び、また久闊を叙しあった。この日はいわば到着だけのことであり、葬儀のすべての行事はこれから三日間にわたるのである。

翌二十六日は午後の比較的遅い時刻から始まった。というのは逮夜が営まれるからである。前角老師には十二人にのぼる嗣法者がいるとき

れるが、師の遷化後は一番弟子であり、ニューヨークヤンカーズ市でニューヨーク・ゼン・コミュニティ(ZCNY)の主管、バーナード・徹玄・グランスマン師がZCLAの跡を享けることになっていた。同師はZCNY主管のままZCLA住職をも兼ねるのだが、すべての式に先だってその晋山式が簡単なが、一同が見守る中で執り行われ、開山堂に報告された。ZCLAは一九六七年に設立されたものだが、老師の実父であり、受業師でもある黒田白純師が開山になっている。また、ここには老師の参禅の師だった三宝興隆会の安谷白雲師、また武蔵野般若道場の芋坂光龍師の尊像・位牌が置かれている。そこにさらに日本から持ち帰られた老師の遺骨が安置され、実弟でもある善光寺住職黒田武志師の導師で安骨の法要が営まれた。そして安骨の法要が終わると、引磐、鼓、鉞、さらにユダヤ教徒の用いるショーファー(shofar)



開山堂にむかう両班(ロス禅センター)

と呼ばれる角笛が交互に鳴らされるなか、十二人の弟子がそれぞれに老師の遺骨や遺影その他奉書に包まれた愛用の仏器などを携えて中庭に現われた。外で待ち構えている参列者の中を輿に乗せられた遺骨が通り抜け、すでに設けられた祭壇の前に安置され、逮夜が始まった。

逮夜は九仏事師の内五人が立ち、実に丁寧な手順で行なわれた。日本でもあまり見られないという法式で執行されたのには、去る四月に一カ月にわたりサンフランシスコ北方のグリーンガルチでの特別撰心で采川道昭師（山形県、宝泉寺住職）による法式の指導を受けていたからに他ならない。まず、入龕仏事の導師としてサンフランシスコ・ゼン・センター（以下、SZCと略す）の正文・タナス師が香を薫じ、続いて移龕仏事を禅敬ハルトマン師、鎖龕仏事を秋葉玄吾師（バークリー、好人庵）、掛真仏事を天心・アンダーソン師（SZC）、そして引き続き

知野弘文師（ロズガトス・ゼン・センター）が故人への思いを込めて一句を吐かれた。

それにしてもアメリカ社会はやはり日本と大きく異なるという思いをせずにはおれなかった。ひとしきりの式が終わると最後に、任意に弔辞を述べる機会があるのだが、老師の思い出や、感謝の想いを語るその語り口がいかにも直截で、人々にアピールしようとする気持ちがよく現れていた。故人への想いは自分自身で密かに反芻するものだと筆者などは思うのだが、ここではそうではないらしい。祭壇の前に進み出て、哀惜の念を存分に示す。老師と長年かかわってきた数人の人々が立った。わけてもオレゴン州ポートランドで小児科医をいとなむ傍らグループを指導しているジャン・澄禪・ベイ師の弔辞は、いささか情に流されたきらいがあったものの、師という存在を失った人間の最も激しい苦衷を表していたように思う。

その後は中庭で休息の時間があつた。この時には先ほどまでの緊張がとけてクッキーや飲み物を片手に、あちこちでもごも歓談する様子が見うけられた。遠来の参列者はハグを繰り返して、相互の近況を伝え合った。新たな知り合いが出来るのもこういう機会だ。筆者もたびたび自己紹介し、また受けた。まことに別れの時は同時に出会いの時である。葬儀の前日というのに参会者は三〇〇人以上にもものぼつただろうか。老師が住まいされた隠寮にはもつぱらアメリカ国内の各ゼン・グループの代表や日本からやってきた人々が夕食を採りながら話し合つておられたが、中庭でも歓談は続き、夕暮れの遅いロサンゼルスの日が沈んでもそれは尽きることがない。私事にわたるが、一九八八年秋、老師の高弟の一人であるメッルテェル・玄法・デニス師率いるカンゼオン・サンガ（現在はユタ州ソルトレイク市）の人々について、数か月間ヨ

ロッパ各地を摂心行脚した時に知合つた懐かしい顔もちらほら見られ、またも老師の導きかと思感極まるものがあつた。この摂心行脚は実に老師の強い意志によつて実現したものだからである。

明けて二十七日、いよいよ本葬の朝を迎えた。日本では齋会のさいの献粥というのは、早朝に文字通り粥を差し上げるものだが、ここではいったい何が用意されるのかと興味をもつた。側近の弟子たちは老師の日本食好みを先刻承知しているが、教育が徹底していたものとみえて、日本でやるように仏具膳に飯、汁、二種盛、それに箸を添えて供えてあつた。今回に限つて彼らはこれをブランチと呼んでいた。ブランチというのは日曜日に採る朝食とも昼食ともつかない食事のことだが、たしかにこの日は日曜日にあたり、遅いめの献粥でよかつたのだが、定中



の老師も苦笑されていたのではないか。創設時からの決して広いとはいえない禅堂兼本堂で、大勢の人々が見守るなか、ノーマン・蔵傑・フイッシャー師（SFZC）の導師で行なわれ、箸を飯の上に立てるとこまで実に如法だ。そしてそれに引き続いて、盛装で威儀を糺した一同が舍利礼を唱和するなか、十余人の遺弟によって、それぞれのセンチに持ち帰る分だけ分骨された。聞くところによるとアメリカでは茶毘に付す場合ふつう遺骨を拾うことはないそうだが、今回彼らはどのような思いで分骨に臨んだのだろうか。密葬のときすでに経験している人たちが大部分だったが、いろいろな意味で彼らにとってこの葬儀は新しい経験になっただろう。この儀式を終えると、これより遺骨や遺影を抱いた弟子、法類の行列は葬儀会場にあてられているダウンタウンの日米文化会館に向かうはずである。何台もの車に分乗した葬列は、前角

老師に因縁のあったいくつかの場所を途中で訪れることになっていた。まず、現在のZCLAから北へ約三キロのセラノ街にあった旧センターの跡地を訪れた。ここは一九六七年に老師が独立して初めてグループを組織し、十人ばかりの若い人々の指導に当たられたZCLAにとってはいわば記念碑的な場所である。現在地のノルマンディーに移ったのは翌年である。一九八八年、筆者がZCLAの記事を書くため資料集めをしていたときにはその建物はまだあったが、いまではこぼたれてしまつて何も残されていない。ただ相変わらず普通の住宅街のたたずまいをとどめているだけである。このセラノ街時代のことを知っているのはおそらく古くからのメンバーだけだろう。なにしろひとりの人間が生に平均十何度も引越し、自分の祖父母、曾祖父母の墓がどこにあるのかよく知らないといった人々が大半を占める社会なのだ。この跡地

で諷経・回向。そこを起つと次に一行はダウンタウンに近い禅宗寺に赴いた。ここは今日では北アメリカにおける曹洞宗の総監部が置かれており、文字通り北米における曹洞宗の拠点であり、アメリカ各地のゼン・グループと日本の本山を結ぶ核にもなっている。もともと日本人あるいは日系人にとっては一種のエスニック・チャーチだが、また、ゼンに興味のある人々には坐禅の行なえる道場になっている。行列がここに立ち寄ったわけは、老師が一九五五年に赴任し、一九六六年に至るまでのちょうど十年間ここで開教師として過ごされたからである。おそらく老師にとってもこの六十年代中葉は重要な時代だったと思われる。というのも当時、「ゼン」という言葉がようやくアメリカの青年層に膾炙し始め、実際に指導者を求め始めた頃であり、そうした時代の要求に応えるべく、自らの修行の仕上げを決意されたらうからである。ここ

にいながら時代の空気が変転するさまを悉さに肌で感得しておられたはずだ。ここでも諷経・回向。

禅宗寺をあとにすると、午後一時には靈龕は数ブロック先にある日米シアター前に辿り着いた。日米シアターは日米文化会館の附属施設で、これらの施設はその名称が示すように日米両国の相互理解を促進するため在米日本企業、在米の日本人あるいは日系人、日本大使館などの尽力で一九八四年に完成したものだ。日米の懸け橋の役割を果たしてこられた老師の葬儀にはうってつけの会場だったかもしれない。車から降りた一行二十数名は再び列を整え、葬列を開始した。先頭の維那子が十仏名を唱え、続いて欠の引磬、鼓、シヨーファーの一団、そして弟子・法類の順での、両側に関係者が待ち構える間を整然と会場に歩を進み入れた。

会場の内外にはすでに定刻前から葬儀に列席

するために大勢の人々が参集している。大半が在家風の人たちだったが、関係の日本仏教各宗派の人々はもちろん、韓国仏教の人あり、チベット仏教の人あり、上座部仏教の人あり、はたまたユダヤ教の人などの姿もあり、まさにアメリカ仏教のおかれている一面を改めて垣間見た思いがした。いわゆる禅仏教の立場をはっきり示しながら、しかも他の宗派・宗教と協調していくことの大切さ、難しさをしばしば伺ったが、ここにも改めて老師の一面を垣間見た気がした。それはともかく、シアターでの葬儀は今回の中心になる行事だっただけに、センターの人たちは随分神経を使ったようだ。実際に儀式を執行するのは国籍も、言葉も違う遠来の人々であり、彼らの役割は会場の設定と儀式に流れを円滑にすることに限られていたといってもよい。したがって当日までは執行者のいないまま、何度もリハーサルを繰り返し、必要な仏具や備品を何

度も確認しなければならなかったのである。これだけでも大変な作業だったろう。そうした接待や準備にかかわる苦勞話を、式がすべて終わった後の休息日に聞かされようとは、この時筆者は夢想だにできなかった。

ここでも九仏事師による丁寧な儀礼が行なわれた。一般参列者はシアターの観客席に坐り、ステージには主立った人々が着座した。主賓に禅宗寺の主管であり、北米開教總監の山下顕光師が就かれ、導師の光真寺方丈を中心に左右に九人が仏事師が曲录に座を占め、左側には遺弟衆が整列し、右側には老師の夫人である恵鏡氏、三人の遺児、法類、兄弟、親族などが参列された。日本から曹洞宗の管長専使として宗務庁教化部長の佐藤良彦師、両大本山専使として永平寺の松永然道師(国際部長)、總持寺の東郁雄師(講師)が出席された。本山の弔辞では老師の永年にわたるアメリカ開教の功績を讃えられ、

まだ早いその遷化を惜しむ言葉で結ばれており、改めて死を悼むの思いを禁じざるをえなかった。ただ、老師の日頃の口吻を借りて言えば、ひとり曹洞禪を宣揚されたのではないということだろう。汎く仏法という立場に立って多くの場所に積極的に赴いて、努めて人々に会い、交流を重ねてこられた老師のこれまでの行跡からそれはいえる。だいいち、この地にあつて現地の人々にはそのようなわが国での宗派意識は希薄であるし、それはなにより高祖禪師の遺志にも反する。立場上の挨拶であつたと思う。そういう意味ではむしろハワイのロバート・エイトケン師の弔辞が老師の心境をよく伝えていたと筆者には思えた。同師はアメリカへの仏教伝導にかかわつてきた先達者の名前を上げ、これらの人々に匹敵する業績を上げた一人として老師を位置付け、積年にわたる友情と交友とに深甚の感謝の意を表された。おそらくこれがつとも

一般的なアメリカ人の老師に対する意識ではなかつただろうか。対真小参、香語が本山代表者によつて唱えられた後、奠湯導師メル・ホワイトマン師、奠茶導師鈴木格禪師、そして最後に乘炬導師黒田光純師によつてそれぞれの仏事が、恭しく修行された。式は二時間にも及んだが、五百もの座席は満員で、焼香炉が回されるまでしわぶき一つないほど肅々と時間が流れていった。法要が滞りなく進行した陰では、采川道昭師と老師の実弟である桐ヶ谷寺住職の黒田純夫師が都監としてあらゆる面に心を配り、宗務庁国際課長の山本健善師が裏に回つて尽力された。

同じ日の夕刻、日本から大部分の参列者が宿泊していた近くのホテルで食事会が催された。狭い待合ロビーは人いきれで、一種の安堵感のようなものが漂つており、開場までの待ち時間には名物のカリフォルニア・ワインもふるまわ

れ、さながら誕生パーティーか結婚パーティーかと見紛うほどの明るさだった。司会者はいずれもゼン・センターに深いかわりのある人たちで、しかもそれぞれの分野の達人である。日本語通訳になったはずの秋葉夫人ヨシさんが思わず米語を米語で通訳してしまい、各テーブルからどつと笑い声があがった。アメリカ生活が長く、ふとそのまま米語が口をついて出てきたのだろう。このように宴会は初めからきわめて和やかな雰囲気の中で行なわれた。歌あり、ダンスあり、トークショーまがいの出し物ありで、もしロビーに黒のリボンを掛けた老師の遺影が飾っていないければ誰もが何かお目出度い席だと思っただろう。いろいろな催し物がひとしきりあって一息つくと、やがて場内が暗くなり、老師の生い立ちやZCLAの歴史を刻むスライドが大きなスクリーンに映し出された。皆がしんみりしたのはこの時だろう。ちゃんちゃんこのよう

なものを着せてもらったまだ乳児の頃の写真から始まって、少年時代に家族と映した写真、学生時代、道場での行脚生活、本山での瑞世の記念写真、禅宗寺での開教師時代、ヒッピー姿の若者を多数交えて写した写真、ZCLA創設期の摂心後の記念撮影、野球帽をかぶって水まきをしている姿、ユートを着て俯きかげんに散歩している様子、笑い顔、提唱の時の獅子口、弟子たちとの歓談、…。有髪でネクタイを締めた若かりし頃の老師の姿が写し出された時には場内から思わず歓声が上がった。走馬灯のように短時間でつぎつぎに替わっていくスライドを見ながら目に涙している人が何人もいた。彼らは決して余興だけを楽しんだわけではないのだ。それぞれの人がさまざまな思いを抱きながら帰路についたことだろう。

四十年前、神戸から貨物船に乗り込んだ一雲

水がアメリカ大陸の大地を踏みしめるまでには二週間に太平洋の波の上で過ごさなければならなかった。しかし、今日のようにジェット機が大空を駆け回る時代になっても日米の距離はやはり遠いと言わねばならない。くわえて今回のように大勢の関係者が一度に来るのは大変だ。そこで本来なら改めて一周忌にでも行なうべきかもしれないが、ちょうど百か日にもあたっていたためだろう、引き続き埋骨式も行なわれることになっていった。翌二八日、山のセンターが次なる会場である。早朝、ゼン・センターから十何台もの車に分乗してロサンゼルス東方一二〇マイル、アップル・キャニオンに抱かれたジャチノ山まで大挙して出掛けた。先発組も含めて少なくとも二五〇人を下らない人々が集まった。筆者の知るかぎり、毎年の夏安居のフィナーレを飾る首座法戦式にもこれほどの人数は集まったことはないだろう。車の騒音や、この頃

ではドラッグの密売に絡む銃の撃ち合いでとみに治安の悪化するようになったロサンゼルスとは異なり、近辺はきわめて閑静で、松の巨木が林立し、野性の鹿やたくさんの野鳥を目にすることもしばしばある。このセンターは当初、みっちり坐禅・摂心したいというZCLAのメンバーの意向から一九七九年に始められたもので、多大の援助を惜しまなかった神戸、八王寺の故志保見道雲師を開山に迎えて創設され、道雲山陽光寺と命名されている。二〇万坪を擁する。何年か前の夏、ここでの摂心に加えてもらったとき、老師の裏山の急勾配を登りながら話しつつ、途中にたくさんの石を動かしたり土を均した辺りにさしかかると、足を止めて「そのうちに連中（弟子たち）とここに入るんですよ」と笑いながら言われたのを覚えている。「骨を埋める気持ちでアメリカに来ました」という言葉も何度も伺ったことがあるが、こんなに早くその

時期が来るとはご自身でも想像すらされなかつたことだろう。

十一時にはいったん皆で禅堂に勢揃いし、遺骨を囲んで黙禱した後、いつものように鳴し物が先導して件の墓所に向かった。長蛇の葬列が砂漠地の急な坂道をたどる。鼻緒の草履ではすべりやすく、歩きにくい。墓所はすでにきれいに掃き清められ、埋骨式の支度はできあがっている。上方に「桐ヶ谷三世、仏真二世、大山博雄大和尚靈位」と書いた真新しい木の墓標も立てられている。老師は思い半ばではなかったかと考えると、残念な思いがした。否、遺弟衆によつて、自らが定めた墓所に懇ろに葬られるのはあるいは本望だっただろうか。焼香に煙が風に煽られてすぐに雲散してしまふ。生前の言葉通りアメリカに骨を埋められたのである。しかし、これほどの覚悟をしなければ異郷での伝道など覚束ないものだろうか。慄然とした思いを

禁じえない。

老師に骨を埋めるほどの決意を促させる何かがあったとすれば、その一つは自らをアメリカという土地に嫌応でも拘束する家族という存在ではなかっただろうか。単身であれば気儘に動くことができる。しかし、力にもなれば手枷足枷にもなる家族というものがあれば、自然どこかに落ち着かざるをえまい。晩婚だったが、十六歳の長女を頭に一男二女の子どもの父親でもあった。マウンテン・センターに至る途中を一回マイル近く入ったところにアイドルワイルドという街があるが、ご家族はそこに住まいしておられる。しかし、多忙だった父が戻ったのは無念にも遺骨だった。老師はアメリカ国内では二箇所のセンターを見る責務があったし、弟子のセンターにも赴き、また、メキシコ、遠くヨーロッパ各国に摂心の指導に出掛けられることもあり、さらにセンターの運用の必要から日本

に戻られることもしばしばだったから、自宅で家族と過ごされる時間は決して多くはなかったはずだ。マウンテン・センターでの埋骨式を済ませると、今度はごく身近な人たちだけがその自宅に集まって安骨諷経をいとなんだ。三〇人ほどの人が入ると家の中はいっぱいになってしまった。老師が書齋にしておられた部屋には、すでに日本から運ばれていたのだろう、禅宗風の在家用仏壇が置かれていた。舍利礼を唱える中、めいめいに焼香、合掌して簡単なながらも自宅での法要も終了し、これで三日間にわたるすべての行事が無事済んだ。

老師が親孝行だったことは有名だが、遷化される前日、つまり五月十四日の母の日には多忙の中をわざわざ郷里まで墓参に出掛けられたという。数年まえに物故された母堂は「嘉」といわれ、「前角」姓は母方のそれを採られたものだし仄聞している。兄弟のなかでひとりだけ母方

の姓を名のるにはそれだけの理由があったのだろう。その母堂と同じ名前を一番下の娘さんにつけておられる。一九八七年春、初めてこのお宅に伺ったとき、まだ小さかったこの嘉くんがどこから採ってきた花なのかブーケを作って、はにかみながら手渡してくれた。そこでふたりでスナップ写真を一枚ということになったのだが、この嘉くんも現在では十一歳の少女ざかりになっていて、自宅での法要のため、参列客が家に入れ替わり立ち変わりにいたときにははしやぎ回っていたが、汐のように押し寄せた人びとが三々五々帰途に就くと、涙顔をして皆を見送ってくれた。老師はこの子どもたちを残してどんな思いで逝かれただろうか。孤雲飛翔して大山元不動、定中照鑑。

(養玄寺住職)



慧鏡夫人の挨拶（密葬儀）



お子様たち

訃報 (obituary) 前角博雄老師 (1931—1995)

前角博雄老師の突然の遷化は、曹洞禪宗のみならず、全仏教界並びに全宗教界にとって、誠に大なる損失である。師の「十の方向」に亘る教説は、多数の人々に触れ、同時に甚深なる慈愛と洞察力を伴って、師の徒弟を導いてこられたのである。われわれは前角慧鏡師と御家族と師の弟子の方々並びにホワイト・プラム・アサングに甚深なる哀悼の意を捧げるものである。

前角老師は、教次にわたり、曹洞宗宗務庁後援による「特別摂心伝道教師研修所」の主任講師を務められた。最近のものでは、去る

三月、グリーンガルチファーム (Green Gulch Farm) のグリーンドラゴンテンプル (青龍寺?) で開かれたのである。師はその研修会で「光明の伝達—規範と清規」のテーマのもとに、参加者を教導されたのである。師の指導の下に参加者たちは、わが宗の僧堂生活の基本典籍である「永平清規」と「瑩山清規」を実践し発展させたのである。

前角老師は一九五六年にロスアンゼルスに赴任されて以来アメリカ合衆国において僧堂禪仏教の普及に尽力されたのである。師は、かの国において曹洞禪仏教の思想を普及させ

るにあたっては、注意深い教師であり、且つ慎重なる解説者であった。

解説は異文化間の理解の基本的伝達の手段の一つである。今日では、それは、かつてより更に重要なものなのである。われわれは、われわれの理解から何をしようとしているのかを、われわれ自身に問う場合、コンセンサスを思いつくことは難しいことに気づくのである。事実、相互に相反する二つの急を要する願望をもっているとき、一方では、われわれの願望は、すべての文化に含まれる普遍的人間の経験を認識することである。他方では、われわれの願望は異なる諸文化の中の具体的に表現された人間の経験の相違を理解することなのである。換言すればわれわれは他の文化を完全に知られたものとして見ることを欲しないのである。むしろ、他の文化を新しい

思想や価値の異質の世界に入る個々の意識を作るであろう異国趣味（エキゾティシズム exoticism）として保持することを望むのである。いかなる個人も曹洞禅宗の微妙さのすべてを伝えることができるとは思わないのだが、しかし前角老師の場合は、師のユニークなアプローチ、師の解釈のスタイルと方法、そして師の法の継承者への教説のスタイルと方法は年とともに完璧に発展し洗練されて、それは師をして「東方より西方への仏道」の伝達のための重要な橋となしたのである。

師を失ったことは誠に痛恨の極みである。しかし師とその教えは決して忘れられることはないであろう。師の教説は人々の生活を、豊かにし続けるだろう。老師は曹洞禅宗に対して測りえない貢献をされたのである。

（ゼンクォーターリーより転載）

前角老師の思い出 —— 無量先生の献辞 ——

今後の徹玄老師のために

「一休の遺偈」は、一九九五年五月一五日の早暁、日本にて遷化された前角老師の好きな偈であつた。

われ死せず

われは、いずこにも往かず

われ此処にあり

されどわれに何ごとも問う勿れ

われ答えず

この人に「もし死んでしまつたら」ということをイメージすることはなんと難しいことであ

らうか。老師にとっては、菩提達磨と同じく、死はないのである。武帝が菩提達磨に問いかけんとしたように、われわれが老師に問いかけなかつたとしても、いや、百年間も老師に呼びかけなくとも、老師は答えなかつたであらう。われわれ自身の仏性に、いかに問いかけることができようか。趙州と猛犬（中川宗洌老師が常にそう呼んでいたが）のように、大鑑慧能の衣鉢と百丈の鷺鳥のように、今もなお老師は青い眼の僧にあるように、われわれの生命の中に存在するのだ。そして今なおわれわれと共にあるのだ。まさに「此処」にいるのだ。今なお、偉大

な狂人の如く、甘く、辛く、怒りっぱく、洗面の、全生命と死とを含み、そして偉大な禅の祖師達や禅者達の真実の継承者の教えは、公案や問答から踊り出て輝くのである。老師の弟子達は法系の最後と初めに、突然に、朝課の供養に老師の名を聞くのだ——大山博雄大和尚と。

真に偉大なる師よ。われわれは老師に相見しえたことは幸運だったし、今なお、相見しうることは幸運なことだ。

一九七二年の九月に最初に私が師に会った時、前角老師は四一歳であった。けっして小さくは見えない小さい男性で、軽快な中にも存在感のある瘦身の男性、しかしなんと言っても瘦身の人だった。彼の大きな頭には広く長円形の半分隠れた眼と広く刻まれた口とがあった。前角老師の顔には神話的な龍の優雅な彫刻がなされていた。後年その優雅さは不可思議な幽玄に変わっていった。しかしなお魅力的だった。師は常



ピーター無量(筆者)右側と前角老師と、母堂

に魅力的であつたし、柔弱さがなく、デリケートでもあつた。丁度鳥が大空を飛んでいくように、師は跡を残すことなく身を運んだ。師が休息するためによつて来ると、常にその場の中心に位置した。その存在が周囲の凡てを変えるのだった。

前角老師はわれわれが師に会つたその日から、わたし達に教示した。その教えの凡てが必ずしも納得できるものではなかつた。師の慈愛と遊び心のためにもつと厳しくあるべきだつた。そのため師は再説するだろう。師の弟子であつた人達の幾人が、前角老師の応答がまさにこの瞬間に、怠惰な僧の實踐にとつて如何なるものであるか、今まさに此処で思考することができ得であろうかと。

わが家の暖炉棚に日本の丘の傍の大きなカラの写真が掲げてある。文字いっぱいを刻んだ大きな真直ぐな石碑、極めて古いものもいくつ

かある。長い記念の木の額、花々と木々の蔭、広い大きな石の階段が急勾配の丘を下つて巨大な桜の老木の根元に続いている。今や輝やかしき春だ。大きな石段が木の下に到つたところに、黒田光純老師が、弟の前角大山老師と談笑しながら、前庭に向つて歩んでいる。(前角老師は、家系の存続のために、実母の前の姓を嗣いだのだ)。老師たちは黒衣と金襴の袈裟を纏っている。そして前角老師の第一の法嗣の徹玄グラスマン先生が背の高い、浅黒い年長の弟子のひとり随えて、小高い丘から、老師たちの跡をついて下りていく。この菩薩達は、常緑のそして赤い椿の咲く丘の上にある広大な墓地から離れた、家族の墓地での父であり、師である椹庵白純大和尚の記念法要からのちようど帰り途なのである。椹庵白純和尚の墓は光真寺と称する自坊と蛇尾川と大田原の北の市街を見下ろしている。丘の中腹の木陰は百花放斎の光と、霞かか

った太陽の光線の中で雲のような桜の花に幽玄の輝きを放っている。それはあたかも仏陀の金色の衣が、その中で光り輝いているかのようだ。

前角老師が光真寺に戻り、兄の光純老師と人生最後の日を過ごしたのは、桜の花の、この春が過ぎ去った時だった。

ロサンゼルスにおいての二十五年間にわたる教化で、師は十二人の法嗣に伝法した。そして一九九五年の早春に、上足の弟子四人が日本曹洞宗から正式に認可されたのであるが、その時老師は師家として、米国における大業が成就したと強く心を感じたことを、徹玄師に語っている。老師はある意味において、老師自身が、アメリカの禪の伝統の自由な発展の道筋に今おかれているのだと、感慨深く語っている。

そしてそれは、ある古い足場は取りはずす必要があり、日本の師たちにより創造的に設立さ

れなければならぬ。五月始めに古い友人の西脇悦道老師（長岳寺住職）を証人として同道の上日本に赴いた。老師として認可された徹玄師とその継承者達の記録と白梅会の法孫のためのトレーニンングセンターの設立と、精神的指導者としての老師の業績の出版のためである。印可の記録は次の最後の法話に現わされている。

「生生世世精進不退にして

仏祖の悲命を断絶せしむることなかれ

至切至禱」

五月十四日の夕刻、前角老師は、弟の純夫老師の東京の寺である桐ヶ谷寺に戻った。老師は日本で最も楽しく感じる時間を弟の家族と共に過ごした。翌朝、純夫老師が呼びに行った時老師は答えられなかった。

（福田孝雄訳）

■前角老師を讃える

西來の祖道 我東に伝う

第二回育英生 河内 義宣

右の句は言うまでもなく、道元禪師さま山居の詩の第一句です。仏法東漸といわれ、インドから中国、朝鮮、そして日本に仏法が伝えられました。その間を往來した人の数は『シルクロード往來人物辞典』によると、道元禪師以前に、名前のわかっているだけで二千名余になります。そのうち日本に來た外国人、日本から朝鮮、中国等に往來した人は約千名います。

これらの中には仏法と關係ない人も多数含まれますが、そうした中で自分こそが眞實の仏

法をもたらしたのだという道元禪師の自負がこの第一句に感じられるのではないでしょうか。

そして、道元さまから七百年、仏法は更に太平洋をこえてアメリカにわたり、約百年、今や完全にアメリカ社会の中に根を下ろしたと言えると思います。鎌倉円覚寺の釈宗演老師をはじめ、安谷老師、中川老師、千崎如幻師等の不惜身命の努力がありました。自らアメリカの国籍をとり、アメリカ人の奥さんを持ち、アメリカ人になりきって伝道教化に尽くされ、師家分



上の多くのお弟子を育てあげられたのは前角老
師お一人でありましょう。老師御自身の胸中、
道元禪師のようなご自負もおありになったので
はないかと拝察するところがあります。

私は第二回留学僧として、ロスアンゼルスと

ニューヨークに遊ばせていただき、多くの人に
接し、参禅辨道のあり方を見て、中国にダルマ
様がこられ、初期禅宗が発展してゆく様子とい
メージを重ねあわせ、一切の爽雑物（葬式、法
事、声明等々）を混まじえないで直に禅の第一義

に参じてゆく、その清新潑刺さに感激を覚えたものでした。

一方、ニューヨークのグラスマン徹玄先生のゼン・センターでは作務にたいへん重点がおかれ、労働の中にこそ修行があるというあり方で、余分なことを考えている余裕がないほどベーカーリーでの仕事は厳しいものでしたが、そのことに前角老師は、中国仏教（特に禅門）史の中で百丈禪師が坐禅修行の中に作務をとりいれられたことを述べられて、さらにそれを発展させるものであるという評価をされておりました。

労働の中に修行がある、労働こそが修行というあり方は、白隠禪師なども「動中の功夫は静中の功夫に勝ること百万倍」といわれていることでもあるのですが、臘八の摂心も、この労働こそが、ここニューヨークゼンセンターの臘八摂心であるといわれると、ちよつと首をかしげたくなったのですが、前角老師がそのように積

極的な評価をされているのを聞き、さすがに新しい文化の中で布教をされている老師は見方が大きいなと思ったことでした。

最後にもう一つ老師の思い出を申しますと、ある時の閑話に「和尚、寺の住職はつらいですね、自分が実行できないことも話さなくてはならないから」と言われたことがありました。行解相應、解、悟りの智慧があれば、それにとまらなかつた行・日常生活がなくてはならない、それが修行の眼目であるわけですが、行も解もまったくできていない私にはまさに三十棒でありました。

（釣学院住職）

■前角老師追悼

前角博雄老師を追悼す

第六回育英生 安藤嘉則

本年五月、老師の遷化の報を聞いたときには、本当にただ驚くばかりであった。ちょうどその

頃、東隆眞先生より、アメリカの黒田研究所 (Kuruda Institute) の東アジア仏教研究の最新刊『The Scripture of Ten Kings (『十王經』)』を中外日報に紹介するように、とのご推薦を受け、その原稿を来日中の前角老師にお見せすべく、なんとか脱稿したのであった。そしてその拙稿を前角老師にお渡し下さった東先生から、老師が大変よろこびであったことを伺い、大変う

れしく存じていたのであったが、それからわずか一週間もたたぬかの悲報であった。

私は平成二年の夏から秋にかけて、黒田武志育英会理事長にお世話いただき、善光寺海外留学僧(第六回)として、ロサンゼルス禅センター(ZCLA)、マウンテンセンター、ニューヨークのゼン・マウンテン・モナストリー(ZMII道真寺)、ゼン・コミュニティ・オブ・ニューヨーク(ZXNY)、そしてサンフランシスコのゼン・センター、グリーン・ガルツジ、桑

港寺等を歴訪し、大きな衝撃をもって、アメリカ禅を参学することができた者である。

今懐かしくその参学の旅を振り返るに、多年ロサンゼルスを中心に、禅の伝道教化に奮進された前角老師がアメリカにおいて築き上げたものがいかに多大なものであったのか、あらためて感じざるをえない。ZCLAをはじめ、全国各地に展開する門下のめざましい活動と、その拠点としての施設（禅道場）の充実ぶりがある。目に見える形での成果であるといえよう。カリフォルニアの山中の広大な土地に、メンバーたちが手作りで作り上げたマウンテン・センターの仏殿（ブツダ・ホール）・坐禅堂などの堂宇は、むしろ日本の伝統的な伽藍様式には及ぶべくもないかもしれない。しかしそこには禅のフロンティア精神、禅の西部開拓ともいふべき潑刺とした空気がみなぎっていた。そしてなによりも前角老師の存在そのものがアメリカの人々にとつ

て絶対的なよりどころであったのであり、アメリカ人の心に残したこの決定的な影響力、精神的支柱こそが、前角老師の最大の遺産ではなかったのではなからうか。

老師がなぜアメリカの人々に対して、あのよきな指導力を発揮し得たのか、というのは、やはりひとえに老師のもつ仏道への堅固な菩提心と、人種・民族の枠を超えた「弘法救生」の慈悲心に基づくことはいうまでもあるまい。渡米四十年もの伝道生活の原点はまさにここに帰するであらう。しかしまた老師が常に英語によって自在に宗旨を開示することができたこと、そうした語学的な側面も見逃すことはできぬであらう。（残念ながら日本には力量のある師家・老師あるいは『正法眼蔵』などに造詣の深い宗学者はいても、英語に堪能な方はほとんど見当たらないので、なからうか。）老師の英語による法話（ダルマ・トーク）は実に力強く、確信に満

ちたものであった。そして大衆とともに坐禅に専念された。私が参加した平成二年のマウンテンセンターにおける夏安居中の摂心では、途中で韓国の仏教者会議に参加され、アメリカに帰国するや、すぐに摂心に戻り大衆を接化されていたお姿がまだ目に浮かぶのである。その時老師は、端から見ても、大変お疲れであったようにお見受けした。しかし外遊の疲れをいやす間もなく自ら大衆とともに坐禅をされ、また独参による接化を休まれることはなかったのである。

周知のように老師は曹洞宗臨濟宗といった宗派の垣根を超えて、一大事を明らかにむべく修行に専念されている。こうした老師であったからこそ、確信に満ちた仏法の開示がなされたのである。臨濟や曹洞といった日本的な宗派的発想はほとんど意味をもたぬ、クリエイティブなアメリカ禅においては、まさにこうした参学体験が生かされ、いかにその指導力が発揮できた

のではないかと思うのである。

老師の急逝に遭い、今更ながら老師の存在の大きさを思い知らされると同時に、これからの老師のお弟子の方々がそのご遺志を継いで、全米へ、そして世界へと法燈盛んにならしめんことを願うばかりである。

(駒沢女子大学講師)



■前角老師追悼

海外留学僧時代の思い出

第六回育英生 沖田玉映

白雲万里の如く 紺碧色の海に雲が広がり、
行けども行けども、真つすぐな路、それを挟む
様に地平線の見えるかの様な麦や唐きびの畑に
カリフォルニアの一番驚かされて、日本より何
十倍の拡大な土地のスケールなる印象と今でも
深く残って居ります。

大山前角老師も、名前の如く、米国大陸の様
に、スケールの大きなダイナミックな人柄で、
日本、米国、北欧を伝道教化されました。

老師様の悲報を最初にお聞きした時は、余り

にも信じられませんでした。

老師様とのご縁は、横浜善光寺、海外留学僧
として、ロスの禅センターに二年間程、お世話
に成りました。

大変に快く暖かくメンバーの皆様親切にし
て頂いたのも、偏に老師様のお陰と深く感謝し
て居ります。

老師様が、昭和三十一年に渡米された頃は、
日本は経済的にも弱く、言葉では、云い現すこ
との出来ない程、ご苦勞をされたと聞いて居り

ます。無一物の中、数多くの在俗出家の弟子を生み、伝道教化し、その弟子達が、米国から北歐へと禪をとたえる程に成りました。

老師様の平素の生活は、大変に質素をモットーとされ、特に納豆とうどんを好まれ、毎日でも飽きることなく、好物のご様子でした。日本茶も、それはお茶が白湯（ゆ）になるまで勿体無いと何度も何度もくり返しお飲みになりました。時折、ある材料で日本風のお惣菜を作つて差しあげますと、御世辞でしょうか「やっぱり、お美味しい」とニッコリされたお姿を思い出します。米国生活の長い老師様も、やはり日本の味を懐かしく思われていたのでしょう。

又、栃木のご生母様の卒寿のお祝いの手土産に、小さな珍しいサボテンを贈ることになり、どのようなように梱包して税関を通過するか思案される茶目（め）つ氣ぶりを發揮し、いつも、ご生母様へのお心労わりも忘れずいらつしやいました。

週末は、山のご本宅で過ごされ、ロスの禅センターに戻られますと、家に帰れば、垣根を刈つてくれ等、色々と頼まれるし、休養することも出来ないし、苦笑され、お心の中は、可愛い子供達と一緒に過ごされる時を、喜ばれている様子でした。

東西奔走され席の温まる暇も無く、一生涯を伝道教化に捧げられ、これからは、多くの遺弟をあの世から見守つて頂けると信じて居ります。老師様のご冥福をお祈り申し上げますと共に、老師様の蒔いた種が花を開き実を一つでも多く結ぶ様、増々のご発展を記念申し上げます。

合掌

(玉泉寺住職)

お便り

謹啓

薫風清涼の時節なれど御尊薫老師並びに御一同様方におかれましては、御心痛御悲嘆の募る日々を御すごしの事と拝察し心より御見舞いを申し上げます。

遅ればせ乍ら前角老師の御遷化の訃報に接し、書状にては重々御無礼とは存じ乍ら御悔やみを申し上げます。

御家族、御親族また禅センターの諸兄にとりましてはもとよりのこと、海外開教の末席に縁を頂いた者にとりましても等しく大きな驚愕と悲痛落胆の思いを禁じ得ません。米国のみならず世界の禅仏教への大きな損失と今後への強い支えを亡くした悲しみに、無常迅速とは申せあまりの衝撃の強さに御慰め申す

べき言葉を失います。

只々 足跡御遺徳の偉大さを偲び警咳に接し得たことを感謝して品位の増崇を念じ申し上げます。

本日（二十五日）晩課の席に連なるべく桐谷寺様へ拝登して、最後の御別れを申し上げます。てまいりたいと存じます。

先ずは取り急ぎまして心乱れるままに御悔やみの御挨拶を申し上げる次第です。何卒御法身堅固と御心安らかならんことを切に念じ申し上げます。

五月二十五日

合掌

元北米開教師禅宗寺勤務大場満洋九拜

善光寺 堂頭老師 大座下

弔電

ご遷化を悼み、謹んで哀悼の意を表します。

曹洞宗管長 梅田 信隆

謹んで前角老師のご遷化を悼む。

大本山總持寺貫首 梅田 信隆

俄かな御遷化の報に接し、謹んでお悔み申し
上げます。

大本山永平寺貫首 宮崎 奕保

俄かな御遷化の報に接し、謹んでお悔み申し
上げます。

大本山永平寺副貫首 檜崎 一光

謹んで前角老師のご遷化を悼み、衷心よりお
悔やみ申し上げます。

大本山總持寺 副貫首 成田 芳髓

監院 齋藤 信義

ご遷化の報に接し、謹んで哀悼の意を表しま
す。

曹洞宗務総長 伊東 盛熙

俄かな御遷化の報に接し、謹んでお悔み申し
上げます。

大本山永平寺監院 南澤 道人

ご遷化の法に接し、ご生前のご功績を偲び心からお悔やみ申し上げます。

曹洞宗 教化部長 渡辺 泰峰

前角博雄老師の、ご遷化の報に接し、謹みて品位を増崇し奉ります。

溪寿寺 檜崎 通元

急な御遷化に驚いています。ロスでのご案内や偉大なる業績を思い浮かべ万感胸に迫ります。大往生に合掌しております。

金沢市大乘寺 板橋 興宗

前角博雄様の突然のご逝去の報に接し、心よりお悔やみ申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

宗教法人釈迦牟尼会 会長 山本 龍広

突然の悲報に接し、誠に痛惜の念でいっぱいです。

ご家族皆様のご心痛をお察し申しあげますとともに、在りし日を偲び心からご冥福をお祈りいたします。

サンフランシスコ桑港寺 細川 正善

前角博雄老師の突然の訃報に接し、大変驚いております。師が生涯、熱意を注がれた海外開教は多くの人の認めるところでございます。その業績はいつまでも日本の仏教界に残ることでしょう。心からご冥福をお祈りいたします。

(株)仏教タイムス社

ご生前のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。ご遺族の皆さまのご心痛をお察し申しあげ、謹んで哀悼の意を表します。

中国人民政治協商會議

全國委員會 外務担当 関 東昇

前角老師のご逝去の訃報に接し、心からお悔み申しあげます。

神道教弓矢八幡教会 林 馨

博雄師の突然の訃報に接し、心より哀悼の意を表します。お志なかばにしての突然のご逝去、さぞお心残りのことも多かつたことでしょうが、今はただお安らかにお休みくださいませ。衷心より御師のご冥福をお祈り申し上げます。

ひかり幼稚園 菊地 展江

前角博雄氏の突然の訃報に接し、誠に残念でなりません。共に遊んだ幼い日を思い出し、もう一度お会いしたかったと悔やんでおりま

す。心よりご冥福をお祈りいたします。

萩原 俣行

石川先生のご講演の中で、お兄様のご訃報を知りました。あまりに突然のご逝去、お慰めの言葉もございません。ただ、ご冥福をお祈りするばかりです。

熊本 斉藤 恵子



弔電和訳

曹洞宗北米開教総監部

ご主人様のご逝去を心よりお悔やみ申し上げます。

ロバート・M・メジロ

前角大山老師の突然の訃報に接し、心からの哀悼の意を表します。

貴方とご家族の皆様に対し、心よりお悔やみ申し上げます。

前角老師には、十五年来、師の設立された人間学会の会員として、ご指導頂きました。深いご厚情に預かり、師は魂の導師でありました。

多くのお弟子と友人たちが、これからご指導に預かれた筈であったものを、大変残念であります。

敬具

曹洞宗北米別院禅宗寺開教師一同

ご主人の訃報に接し、心より哀悼の意を表します。

御仏が共にあられますことをお祈り申し上げます。

ポーランド僧伽 クワン ウン

前角大山老師のご遷化に接し、哀悼の意を表します。

ゲリー・シシンウィック（ロサンゼルス）
敬愛する師、孤雲大山大和尚のご遷化に接し、
心より哀悼の意を表します。

和尚様の公案を大切に、御教えを引き継ぐべく
最善を尽くす所存です。

和尚様は実に大きなものをお与え下さいまし
た。

永遠のお別れに悲しみを禁じ得ません。どう
も有り難うございました。

フクセン ホルザフェル&パリ曹洞禅堂一同
前角老師の御家族の皆様及びお弟子様たちへ
御老師によって伝導された深遠なる法話をか
みしめながら、この深い悲しみを皆一同、共
にしております。

真の宗教と信仰は、時と場所の違いを超越さ
せます。

特別摂心での老師の最後の説法は素晴らしい

遺言となりました。

法燈は永遠です。

老師によって証せられた禅は、確実に西の地
へと通達されました。

衷心よりお悔やみ申し上げます。

ロサンゼルス ダルマ禅センター・セウング
サン

前角老師の、御遷化の報に接し、心より哀悼
の意を表します。残念でなりません。でも私
たちの心には、いつも御老師は生きていらっ
しゃいます。

すぐにでも、この世へお戻り願いたい。再び
衆生救済の光をお放ちください。

山は常に青く 水の流れは止まず
南無釈迦牟尼仏

観世音増伽（フランス）

フランス国観世音僧伽は、老師のご遷化に接し、悲しみを超えた感動でいっぱいです。各人、心より感謝を捧げます。

皆様方に、謹んでお悔やみ申し上げます。

道真寺禅会員一同

著名なる黒田家の一員であり、我々の多くの師であられた前角大山老師の御遷化に臨み、黒田家御一統様に甚深なる哀悼の意を捧げます。

老師はわが国へのダルマの偉大な伝道者の一人として、また与えて下さった感化と教導として、我々の記憶に残るであります。

サガポナツク禅堂僧伽

深甚なる哀惜を込めて弔慰を表します。

ゲンポー・センセイと観音僧伽

皆様へ、謹んでお悔み申し上げますと共に心より御冥福をお祈り申し上げます。

サンフランシスコ禅センター

我々の師であり友人である前角老師が日本で遷化されたとの報に接し、衝撃を受けました。衷心より哀悼の意を表します。

老師はアメリカに於ける禅の実践の創始者として記念碑的存在でありました。老師を失ったことは痛恨の極みであります。

我々は黒田老師と御家族の皆様々に衷心よりお悔やみを申し上げます。

我々は仏道の継承者として、前角老師の示された輝く規範によって感化されたことをすべて継承して参る所存であります。

ロサンゼルス禅センター僧伽一同

ロサンゼルス禅センターの僧伽一同は、孤

雲大山和尚の遷化の深甚なる悲しみを黒田家御一統様と共にいたします。

黒田老師は弟様であり長き人生の友である方を失いましたが、我々は我々の真の師を失いました。余りにも早く偉大なる人物が失われてしまいました。

全員老師の御遷化を悼むものであります。

JOREN 禅センター

御家族の皆様に対し、衷心よりお悔み申し上げます。

ジョウレン (JOREN) 禅センター創設者である前角老師は真の師でありました。

我々は老師の透徹せる慧智と自愛とを衷心より惜しむものであります。

ゼン・マウンテン僧院僧伽

前角博雄大山老師の御生涯と御教えに対し、

心よりの弔意と深い感謝を捧げます。

ポーランド親世音僧伽

前角大山老師の御遷化を、お悔み申し上げます。御老師の御教えは私たちの心の中で永遠であります。

ミヨーカー・アンダーソン

お兄様の御逝去に心よりの弔意を表します。御家族の皆さまへ深く感謝申し上げます。

グアレスキ タイテン [善傳寺住職 / イタリ ア禅協会会長]

西欧における禅の偉大なる先駆者が突如御遷化なされました。

ご老師の人生と信仰の衝撃は、偉大なる仏法という大樹から数多くの枝を通じて、流れでました。

私たちは皆心より感銘を受けております。

禅真寺僧伽一同

禅真寺を代表して申し上げます。

大山博雄大和尚の遷化という深い悲しみを、どうぞ乗り越えさせて下さい。

私達は師の愛に満ちた素晴らしい人間性と力強い教えに深く感謝いたしております。

私達は皆、師のすべてに感動させられてきました。師の指針はいつも私たちを励ましてくれるでしょう。心から感謝申し上げます。

ロバート・ゴーシン・アルゾーセ（ハワイ禅センター）

孤雲大山前角大和尚のご遷化に接し、心より哀悼の意を表します。

ご老師には生涯をかけても、御恩返しのない、深いご厚情を賜りました。 敬具

ドナルド・S・ロペス Jr（ミシガン大学並言語文化学部仏教研究教授）

前角老師の早過ぎる遷化の一報に接し、深く哀悼の意を表し、前角老師と御家族に対し、お悔やみを申し上げます。

私は十年以上にわたり前角老師の知遇を頂いたことを名誉とし、かつ極めて価値ある助言に学びました。

黒田研究所の役員の一員として、私は十年以上に亘り、その研究所が名声と威信を得て発展してきたことを見守ることができました、またシリーズの刊行物が英語で書かれたものの中で、仏教研究定期刊行物として最も著名な物になったことを見ることできました。これは全く御老師の賢明なるご指導と先見の明によるものであります。

米国への仏法の伝導において老師は最も重要な人物でありました。老師を失ったことは誠

に寂しいものとなるでありません。

敬白

す。

テッシンセンセイとメキシコ僧伽

弟様、大山博雄大和尚の御遷化に接し、哀悼の

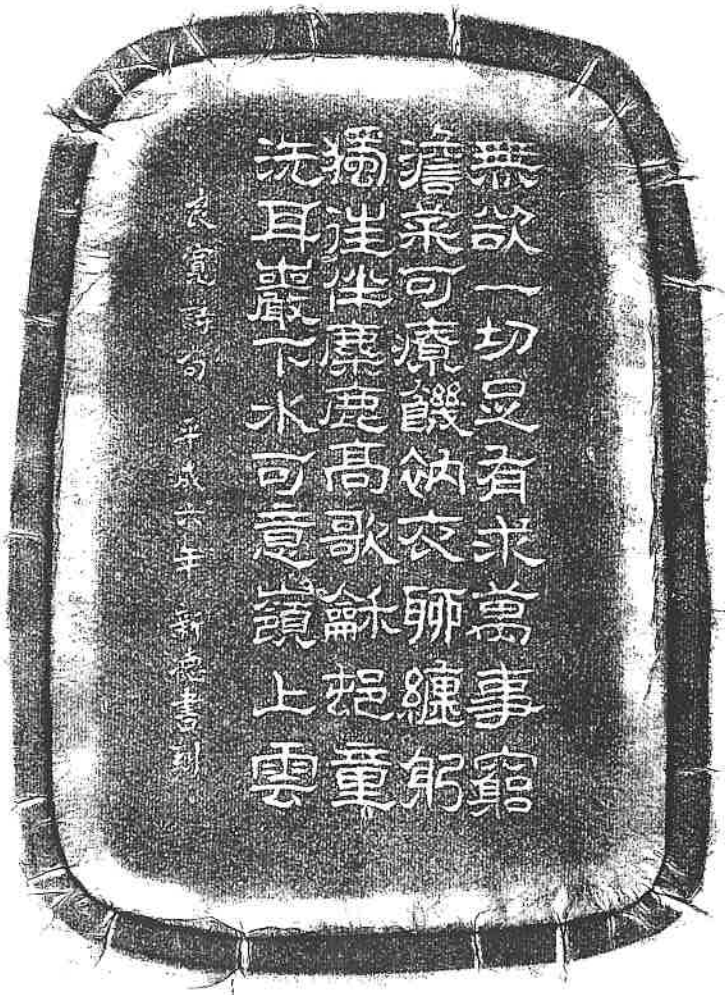
意を捧げますと共に、永遠の感謝を表しま

観世音僧伽 [KANZEON SANGHA, U.]

[K.]

御老師の遷化に接し、御老師の御生涯への感謝を込めて、深甚なる哀悼を表します。





無欲一切足者求萬事窮
 澹菜可療饑衲衣聊纏躬
 獨往坐麋鹿高歌歛媿童
 洗耳巖下水可意嶺上雲

長寬寺分 平政六年 新德書刻

王新德謹刻



*The Disciples of Maezumi Roshi,
The Kuroda Family, and
The Dharma Brothers and Sisters of Soto Zen*

invite you to the

*Memorial Services
for
Hakuyu Maezumi Roshi*

Taiya (Wake)

Funeral & Fire Ceremony

Appreciation Banquet

Interment of Relics

*Please reply to Zen Center of Los Angeles by July 15, 1995.
923 South Normandic Avenue, Los Angeles, CA 90006-1301
(213) 387-2351 FAX (213) 387-2377*



Schedule of Events

Taiya (Wake)

Saturday, August 26, 1995 3:00 p.m. to 5:00 p.m.
ZCLA, City Center, 923 South Normandie Avenue

The Sangha will gather to offer a service and testimonials to Maezumi Roshi. Refreshments will follow.

Funeral & Fire Ceremony

Sunday, August 27, 1995 1:00 p.m. to 3:00 p.m.
Japanese American Cultural and
Community Center, Outdoor Plaza
244 South San Pedro Street
Los Angeles, California

The officiants of this service will be Roshis from both Japan and America. Bring or mail your written parting words to Maezumi Roshi. These will be offered in the Fire Ceremony. Ample public parking is available in the immediate area. Your early arrival is requested.



Appreciation Banquet

*Sunday, August 27, 1995
5:30 p.m. to 9:00 p.m. Dinner
New Otani Hotel
120 South Los Angeles Street
Little Tokyo, Los Angeles, California*

Following an afternoon break, we will gather for refreshments, a meal and an evening of appreciation. The hotel is located near the Plaza; the banquet will be in the hotel mezzanine. Donation: \$75.

Interment of Relics at Zen Mountain Center

Monday, August 28, 1995

*Interment at noon
Lunch at 1:00 p.m.*

It is suggested that participants depart from Los Angeles by 8:30 a.m. in order to arrive at the Mountain Center in time for the ceremony. Contact the Mountain Center office for directions at (909) 659-5272.

In lieu of flowers, offerings will be gratefully received for the Hakuyu Maezumi Roshi Memorial Fund. For your convenience an envelope is provided. You may mail it in or bring it as a personal offering at the funeral.

White Plum Lineage (白梅会法系図)

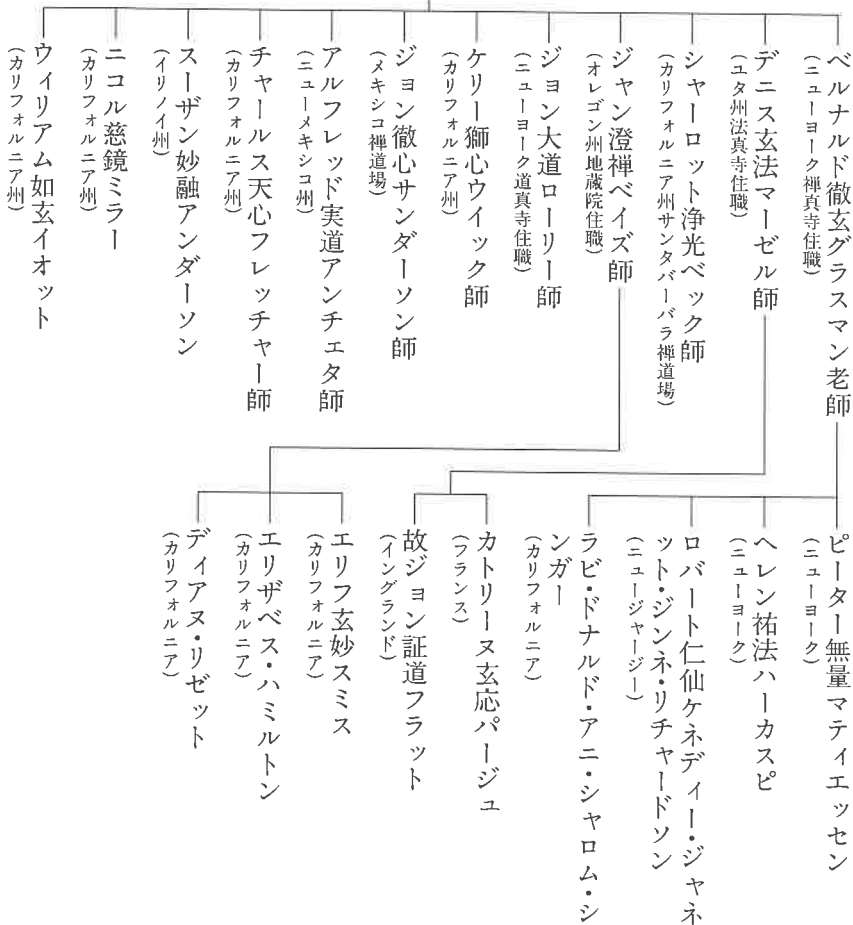
ホワイト プラム リネージ

黒田白純大和尚
(1889-1979)

苧坂光龍老師
(1901-1985)

安谷白雲老師
(1885-1973)

前角博雄大和尚
(1931-1995)



◀ 禅マウンテンセンターの法堂にて



▼ 禅センターのメンバーとともに



ロサンゼルス禅センター | 故前角博雄老師追悼巡礼の旅

◀前角老師の遺影を中心に



▶前角老師の私宅で



▶ 提唱する東隆眞理事



◀ 中央の導師はグラスマン徹玄師



▶ 法堂にむかう



◀ 山下北米総監とともに 禅真寺に於いて



▶ UCLAのキャンパスにて



▶ UCLAの図書館内





佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時
照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子
色不異空空不異色色即是空空即
是色受想行識亦復如是舍利子是
諸法空相不生不滅不垢不淨不增
不減是故空中無色無受想行識無
眼耳鼻舌身意無眼界乃至無意識
界無無明亦無無明盡乃至無老死
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無
為之無所得故菩提薩埵依般若波
羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有
恐怖遠離一切輪迴夢想覺竟涅槃
三世諸佛皆依般若波羅蜜多故得
阿耨多羅三藐三菩提故知般若波
羅蜜多是大神咒是大明咒是無上
咒是無等等咒是除一切苦真寶
藏故般若波羅蜜多不可思議不可
說不可說

揭諦揭諦 六度萬行
波羅揭諦 三善庵
菩提妙淨可

誦此經數十萬遍
造九十萬種功德
若欲供養十方諸佛



アメリカの禪センターを訪ねて

—— 故前角博雄老師追悼・巡礼の旅 ——

横浜善光寺留学僧育英会理事

東 隆 眞

四十年、着実な布教

日系以外に禪を伝える

去る五月十五日、曹洞宗開教師・前角博雄老師は、帰国中、東京、曹洞宗桐ヶ谷寺（黒田純夫住職）で急逝した。示寂の七日ほどまえ、桐ヶ谷寺で老師みずから開創し活動しているアメリカ各地の禪センターへ案内するからぜひ訪問してほしいとの要請をうけ、その日程の打ち合

わせをすませたばかりであった。私は、実弟の黒田武志師（横浜市、曹洞宗善光寺住職。横浜善光寺留学僧育英会理事長）とともに訪米の途についた。黒田師はかつて開教師として渡米し、前角老師のもとで指導をうけていた。このようになわけて、七月二十八日から八月六日まで、生

前の前角老師とのお約束を果たし、老師を追悼し、遺跡を巡礼する旅となった。

北米開教は、故内田晃融師によれば、明治三十二年（一八九九）西本願寺が在米同胞の懇請によって同派の日本人僧侶を派遣したのが発端とされる。曹洞宗は、大正十一年（一九二二）磯部峯仙師がロサンゼルスに曹洞宗北米仏教会を設立したのが第一歩だと聞いている。その後、多くの先人たちが幾多の困難を克服して、着実に布教、伝道の成果をあげてきた。いまでも情熱に燃える開教師たちによって、血のにじむような努力が継続されている。

前角老師は、昭和三十一年（一九五六）ロサンゼルス禅宗寺駐在布教師として渡米した。日系人への布教よりもアメリカ人対象の開教に重点をおいた。老師はアメリカ国籍を取得してアメリカ人となり、四十年のあいだにロサンゼルス禅センター（開山は黒田白純老師。仏真寺。

現在の住職はグラスマン・徹玄ニテツゲンニ老師）、禅マウンティン・センター（開山は志保見道雲老師。陽光寺。現在の住職はテツゲン老師）
へ以上、ロサンゼルス）、禅コミュニティ・オブ・ニューヨーク（前角老師開山。禅真寺。現在の住職はテツゲン老師）、禅マウンティン・モナス トリイ（前角老師開山。道真寺。現在の住職はローリー・大道ニダイドウニ先生）へ以上、ニューヨーク）、観世音サンガ・ワサチ・禅センター（前角老師開山。法真寺。現在の住職はマーゼル・玄法ニゲンポウニ先生）へユタ州）、禅コミュニティ・オブ・オレゴン（前角老師開山。地藏院。現在の住職はベイズ・澄禅ニチヨウゼンニ先生）を開創した。

このほか、フランス、イギリス、ドイツ、オランダ、ポーランドにも禅のグループ、道場がある。出家得度の弟子五十数人、授戒の弟子八百余人。嗣法を終了した高弟は男女数人にのぼ



ローリー・大道先生とともに



前角老師の墓塔に詣でて



禅宗寺で山下総監と記念撮影



UCLAに招きを受ける

る。前角老師が日系人社会以外の人々に伝えた
禅は、確実に継承された。

このたび、私どもは、ロサンゼルス禅センタ
ー、禅マウンティン・センター、禅コミュニティ
イ・オブ・ニューヨーク、禅マウンティン・モ
ナストリーの四カ所を訪問した。また禅宗寺(北

余薫を伝える仏真寺　ロサンゼルス

さて、ロサンゼルス禅センター(禅真寺)は、
ロサンゼルス市ノーマンディ街九二三番地。ロ
ス空港から車で四十分ばかりの地点。前角老師
のアメリカ開教の本拠地である。およそ三十年
まえ歯科医院を買収して、老師や弟子たちの普
請作務によって改造した。およそ千八百坪。禅
堂、後堂寮(役員室)、隠寮、サンガ・ハウス、
会員住宅の五つの建物と二つのアパートメン
ト・ビルディングがある。だから、禅真寺とは

米開教総監部)、カリフォルニア大学、サラ
ローレンス・カレッジも訪問した。

ここでは、ロサンゼルス禅センター(禅真寺)
を中心にその概況を報告し、私の理解したとこ
ろをまとめておきたい。

よんでも日本の仏教寺院のイメージはまったく
ない。クロダ・インスティテュート(黒田研究
所)の看板も掲げてある。

ここで道元学会を開き、道元禪師や禅の研究
を開いている。また『摩訶止観』や『伝光録』
の英訳本や、イリノイ大学のピーター・グレゴ
リー教授、カリフォルニア大学のウィリアム・
ボディフォード教授、プリンストン大学のステ
イファン・タイザー助教授らの仏教研究を「東

「アジア仏教研究」シリーズとして刊行し、九冊をかぞえる。

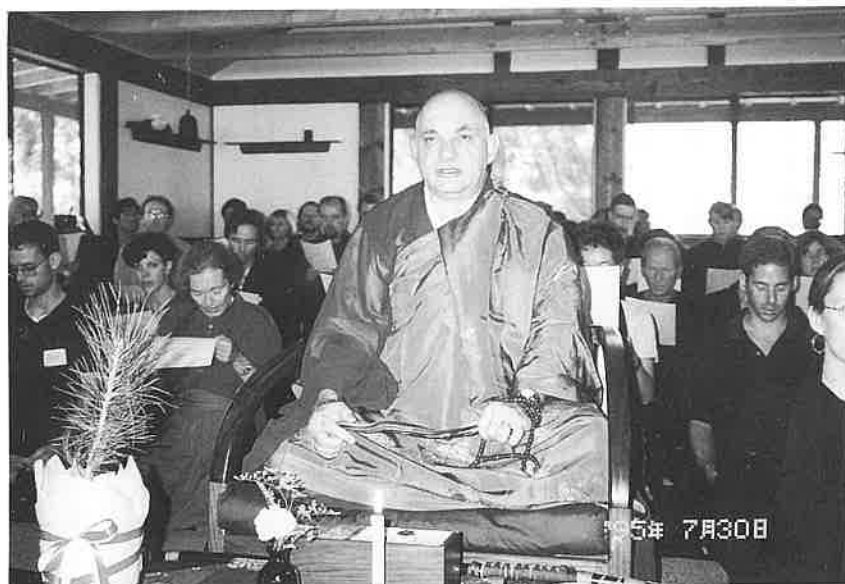
ロサンゼルス禅センターは原則として会員の会費によって運営されている。会員は三百人。三十五人の家族をふくむ会員が生活共同体を形成している。

任職は、前角老師なきあとテツゲン（徹玄）老師にひきつがれた。二十五年以上にわたって前角老師に師事し、公案の参究もすべて透過した。老師という称号は、このことに由来する。老師のほかは、先生（センセイ）とよぶ。テツゲン老師はカリフォルニア大学出身の技術者でグラマン社につとめていた哲学博士。ダルマ大師そっくりの風貌。住職代理は、ウイリアム・ニョゲン（如玄）・イエオ先生。ウェンデイ・エギョク（慧玉）・ナカオ先生は、前角老師の秘書役をつとめていた女性僧侶。ハワイに生まれ、父は日系二世、母はポルトガル人。ワシントン

大学を卒業し、同大学院を修了。いまはテツゲン老師の秘書役。昭和六十三年（一九八八）の夏、禅マウンティン・センター（陽光寺）で九旬安居して、首座をつとめたという筋金入りの禅僧である。頭脳明晰なうえに柔和で謙虚なものがしは印象的である。

ロサンゼルス禅センターの宗教活動としては、冬期の安居、毎月、二日ないし七日間の撰心会、毎週、初心者指導、毎日、坐禅およびその指導、毎週第二土曜日坐禅会、そのほかを定期的に行なっている。社会活動としては、毎月一回、地域の清掃を行なっている。おそらく、これらの定期的な活動は、今後も前角老師の生前とかわることなく継続されていくであろう。

ロサンゼルス禅センター・仏真寺は、前角老師の居住の本拠地でもあった。ここは老師の慈愛のやさしさにつつまれたふんいきが感じられる。老師の遺品のかずかずを、この仏真寺の一



禅マウンテン・センター、徹玄老師



首座法戦式のはじまり

室に保管、整理して、「前角博雄老師記念館(室)」
としてはどうか。

ひるがえつておもうに、曹洞宗北米開教の第一期は、宗門僧侶の旅行、短期滞在、視察などにはじまる。

第二期は、他宗教の開教(研究、出版などをふくむ)と並行して、相互の刺激と協力関係のなかでの(a)日本人開教師による日系人社会への布教ないし寺院建立と(b)アメリカ人社会への開教ないし寺院建立である。前角老師の前半生は、第二期(b)に位置づけられよう。

第三期は、アメリカ人僧侶によるアメリカ人社会への布教である。

第四期は、アメリカ人僧侶によるアメリカ人以外の人びとに対する開教で、このなかには日本人もおのずからふくまれ、そうなるとアメリカ人僧侶による日本人への布教という事態も生まれるであろう。アメリカから日本への禅の逆

輸入である。

前角老師の後半生の開教は、第二期を過ぎ、第四期へさしかかっているところまで影響を及ぼしていると評されてよいであろう。

もちろん、前角老師ばかりではない。しかし、前角老師の登場によって、禅はいつそう本格的にアメリカ人社会に定着する決定的な段階に入った。

東 隆 眞(あずま・りゅうしん)氏

昭和十年、京都府生まれ。同二十九年、大本山總持寺僧堂に掛錫。同三十四年に駒澤大学仏教学部禅学科卒、同大学院修士課程修了。現在、駒沢女子大学副学長、駒沢女子短期大学副学長、学長代理。駒沢学園女子中学・高等学校校長。文学博士。著書に『道元小事典』『瑩山禅師の研究』『曹洞宗』などがある。

道元禪師と瑩山禪師

東 隆 眞

仏教は、およそ二千五百年前、インドの釈尊の坐禅成道にはじまります。その後、原始仏教、部派仏教の時代を経て、中央アジア、中国大陸、朝鮮半島から日本、またチベット、モンゴル、ロシアに伝わった北伝仏教、また大乘仏教（チベット仏教〈密教〉を含む）と、スリランカ、ミャンマー（ビルマ）、タイ、カンボジア、インドネシア、マレーシアなど東南アジア上座部、南伝仏教に分かれて伝わりました。今や、ヨーロッパ、アメリカなどアジア以外の国々に向けて北伝の大乘仏教、南伝の上座部仏教はどんどん広がっています。

故前角博雄老師の仏教は、北伝大乘仏教の系統に属する日本の曹洞宗（禪宗）であります。

日本の曹洞宗は坐禅成道する釈尊を教主・本尊とし、高祖道元禪師、太祖瑩山禪師を両祖とし、その一仏両祖を尊崇します。

仏教は釈尊の坐禅成道をその歴史的、宗教的原点とするのですから、曹洞宗が釈尊を教主、本尊とするのは当然のことであります。

釈尊の仏教の本質を明らかにし、正しい仏教の伝統を確かめたのが、道元禪師であり、道元禪師の立場を正しく継承し、広く発展させたのが瑩山禪師であります。

そこで道元禪師と鑿山禪師について簡単におはなしいたします。

道元禪師は、今からおよそ八〇〇年まえ、鎌倉時代、日本の京都に生まれました。日本に百濟から仏教が伝えられたのは五三八年（一説には五五二年）のこととされています。やがて奈良時代になると、中国大陸や朝鮮半島から仏教をはじめとする新しい外国文化がもたらされました。奈良時代の仏教は、華嚴宗、律宗、法相宗、成実宗、俱舎宗、三論宗など、經・律・論の六宗です。

次の平安時代の仏教は、最澄と空海が中国へ留学して学んできた天台、真言の二宗でした。

奈良時代、平安時代の仏教は、学問中心の仏教であり、貴族的な仏教であり、国家鎮護の仏教であり、靈驗利益の仏教でありました。

道元禪師は日本の仏教がもたらされてほぼ六百年後の京都に生まれ、直接には、母の死

によって無常を感じ、母の遺言にもとづいて天台宗の比叡山で出家したのでした。

道元禪師の関心は、いったいほんとうの仏教とは何か、ほんとうの仏教はどのようなように伝えられているのかということでした。道元禪師の生涯は、この二つの点について前代への疑問と懷疑を提起し、そしてこの二つの点を解明することについてやされたと言つてよいと思います。道元禪師の宗教的人格がきわめて慈悲の精神に富んだものであることは言うまでもありませんが、それに加えて、道元禪師は、まれに見る求道心が強く、きわめて理論的で哲学的な性向をそなえているといえましょう。

さて、そこで、道元禪師の説く仏教の特色について、二、三の点をあげてみましょう。

第一に道元禪師は、正しい仏教の教主は釈尊であることをつねに強調します。「娑婆世界の教主、釈迦牟尼如来大和尚」としてしています。



「釈迦一仏を見たてまつるべし」と『永平清規』にあります。北伝の大乗仏教である日本仏教では、釈迦牟尼仏のほか、薬師如来、阿弥陀如来、大日如来の諸仏、観世音菩薩、文殊菩薩、弥勒菩薩、地藏菩薩、不動明王など、諸菩薩、明王などを教主、本尊とし、ないしは尊崇するので、道元禪師は、これら諸仏、諸菩薩を否定するものではありませんが、正しい教主は釈迦牟尼仏であることを強調します。

道元禪師の説く教主、釈尊は、超越的、絶対的、唯一神的な性格の存在ではなく、かりに歴史上の人間釈迦とするにしても、苦しみ悩む人間性をむき出しにした釈尊ではもちろんないのです。慈悲深い父であり、偉大なる師であり、理想となる釈尊であります。私たちの信仰生活を通して、その生活のなかにあらわれてくる釈尊であります。

第二に、仏教の本質は坐禅であることを主張

しました。このことは『正法眼蔵』の『辨道話』に明らかであります。道元禪師以前の奈良仏教、平安仏教も、また鎌倉時代の道元禪師の周辺においても、仏教にさまざまな宗派、学派に分かれてしまい、仏教の正しいすじみちがはっきりしなくなりつつあったのです。このときにあって道元禪師は『正法眼蔵』『仏道』の巻に書いて正しい仏教の一つのみちを求めて、宗派仏教をしりぞけ、坐禅こそ仏教であり、仏教の坐禅であることを説いて、また宗名をしりぞけたのです。道元禪師は、仏教はいわゆる小乗とか大乘とかの枠組みにとらわれることなく、このような枠を超えて理解しなければならぬと考えました。また、坐禅といっても、いわゆる禪宗という宗派の説く坐禅ではなく、菩提樹下の金剛座の上で坐禅して成道した釈尊の本質に直結する坐禅でなければならぬと考えました。このような坐禅を自受用三昧といいます。そのす

がたは結跏趺坐であります。からだの結跏趺坐もあり、こころの結跏趺坐もあります。その作用は身心脱落であります。これを要するに只管打坐とよびました。只管打坐は、1、坐禅の一行にうちこむ、2、ひたすら坐禅する、3、ただ坐禅する、4、坐禅の精神で日常生活を行う。坐禅を超えた坐禅。この四つの意義をそなえています。

第三に、道元禅師は、正しい仏教の伝統を確立しました。『正法眼蔵』『仏祖』『行持』の巻に明らかであります。過去七仏の釈尊、第一祖摩訶迦葉尊者から菩提達磨尊者を経て、大鑑慧能禅師・洞山良价禅師・雲居道膺禅師・天童如淨禅師から永平道元大和尚に至る系譜と、代表的な祖師たちの言行を説いたのであります。歴史的な形式を借りて仏教の生命が純一に継承されてきていることを体験のうえからも確認したのであります。

道元禅師の特色として挙げなければならないことは、まだいろいろありますが、とりあえず、ここでやめておきましょう。

道元禅師の四代目が瑩山禅師であります。瑩山禅師は、道元禅師滅後およそ一五年、越前に生まれました。瑩山禅師は、道元禅師の滅後の弟子たちの周辺が一時的に混乱しまして、これを「永平寺三代相論」とよんでいます。この相論を目のあたりにして、これを歴史的教訓とうけとめ、道元禅師のおしえを再確認し、さらにそれを実践的に継承して、多くの檀信徒を獲得していったのであります。いまは、この点に限ってご紹介いたします。とくに、さきにあげた道元禅師の三点に重ねあわせて触れておきたいとおもいます。

第一の点ですが、道元禅師の教えにしたがって瑩山禅師も釈尊を教主として位置づけるのは同一であります。あえて違いを言うとするれば、

道元禪師は積尊一仏を強調したのでありますが、瑩山禪師は地方の守護神である白山に親近感を抱き、祖母、母親、自分と三代にわたる観世音菩薩信仰の影が濃厚となっているのがみとめられるのであります。瑩山禪師以後の曹洞宗寺院が積尊以外の諸仏諸菩薩などを必ずしもこぼまなくなるのは瑩山禪師以降で、すなわち瑩山禪師の弟子、その弟子あたりであります。そのことについて瑩山禪師は積極的に指導したというのではありませんが、瑩山禪師の宗教的環境および従来の神仏信仰に対する包容性が間接的に影響を与えているのではないのでしょうか。

第二の点ですが、道元禪師の坐禅の教えを学び、これを分りやすくして門下に教えているのであります。瑩山禪師は、坐禅の教えをすぐれた宗教的素地をそなえているだけでなく、必ずしもすぐれた宗教的素地をもたない人にも坐禅を広める努力をしました。『三根坐禅説』は、上

根はもちろんのこと、中根、下根の人びとも、すべての人がひとしく坐禅の悟りにあずかることを説いています。また『坐禅用心記』では、坐禅中に心が散乱するときは、出入の息を数えてみるとよい、なお止まないときは公案を考え、坐禅中に心と説いて、道元禪師の只管打坐を補強する手段として、数息観や公案の功夫を説いているのです。道元禪師は教える立場に立って説いています。瑩山禪師は、どちらかといえば学ぶ立場に立って説いているといえるでしょう。このことが、日本の曹洞宗の民衆化、一般化する重要なポイントの一つであろうと思われれます。もう一つ、ここで指摘しておきたいのは、道元禪師の坐禅は、自受用三昧とか、身心脱落とか、只管打坐とか、そういうことばによってあらわされています。これらのことばは、いわば坐禅中心の表現です。これに対して瑩山禪師の立場は、「平常心是道」という瑩山禪師が悟りを

開いたときのことばによって特徴づけられるとおもいます。平常心是道は、中国唐代の僧である南泉と趙州の問答に発し、以後よくもちいられてきた禅のことばです。これを瑩山禅師はみずからの宗教体験とすることによって、その禅風を確立しました。平常心是道とは、日常生活をまごころで生きていくことを言います。まごころで生きていくとき、誰でも、いつでも、どこでも、平常心となるのであります。このように必ずしも坐禅のかたちにとらわれない坐禅をこえた禅、日常生活のなかに平易に実践していくことが出来る坐禅のおしえは、瑩山禅師の特色といつてよいでしょう。

第三の点ですが、道元禅師は、正しい仏教を求め、その正しい伝統を明らかにしました。しかし、釈尊からはじまって歴代の祖師たちの生涯とか、悟りの内容とか、悟りがどのような師から弟子へ伝えられた、とか、その詳細につい

て、この点をおぎなつてまとめられたのが、瑩山禅師の『伝光録』です。瑩山禅師は、釈尊から自分のまえまでの五十数代にわたつて、ひとすじの光がどのようなに伝えられたかを一代も洩らすことなく完全に調べて明らかにし、これを門下に伝えたのでした。仏教を学ぶ者にとって、仏教の伝統と權威はこの上もない誇りと自信と安心を与えます。

なお、瑩山禅師は、道元禅師よりも多くの寺院を建て、多くの弟子を育てました。とくに、瑩山禅師は、道元禅師の男女平等思想をうけついで、女性の弟子を自分の後継者とし、女性を寺院の住職としました。そのほかにもいちいちお伝えしたいこともありますが、別の機会にゆづります。

輝く尊像の数々

錦戸新観師の死去を悼む

佛師・錦戸新観師が、四月十六日、八十八年の生涯を閉じられました。善光寺には、錦戸師が制作された数々の尊像をお祀りしてあり、衷心よりお悔やみ申し上げます。

黒田住職は寺を持ったときから、いつかきつとご高名の錦戸師に、善光寺のために佛像を制作して戴こうと胸深く決めていました。十八年目になってやっとその念願がかない、昭和六十二年、不動尊脇侍の制吒迦、矜羯羅の二童子を迎えることができました。その後平成二年に不

動殿の本尊・大日如来像を、同三年には大日如来の脇侍として阿弥陀如来像と薬師如来像を勸請し、五月に開眼法要が行われました。

「精進を樂とし、精進を永遠の命とす」を座右銘として彫り続けたいと語って「成寿」第18巻参照）おられた錦戸師。発願から実に四十七年の歳月を要したという七観音の制作が成就し、記念として平成六年に、六十余年に亘る彫刻のあとを振り返る作品集も刊行されています。

心からご冥福をお祈りいたします。



ありし日の錦戸先生(平成3年)



◀ 十一面観世音菩薩

平成三年五月
善光寺客間にて

制吒迦童子・矜羯羅童子



- 善光寺収蔵作品（文中以外）
- 大日如来三尊仏
 - 聖徳太子坐像
 - 法華経レリーフ
 - 千手観世音菩薩

パゴダと寺院の国 ミャンマー(ビルマ)の旅

ニューヨーク
州立大学教授 伊藤 博

昔、竹山道雄の『ビルマの豎琴』を読んで以来一度訪ねてみたいと思っていました。幸い黒田方丈の御援助もあり大学の冬休みを利用して一週間ほどミャンマーの仏跡を中心に旅することができました。首都のヤンゴン(旧名ラングーン)と第二の都会マンダレー、それに二千以上のパゴダ寺院があると言われるバガン(旧名バガン)を車で廻ってきました。

日本の十二月はビルマの乾期に当り一年中でも最も凌ぎ易い時期です。中国系ミャンマー人

の旅行社の社長が自ら空港に出迎えてくれ、色々取計らってくれましたので快適な旅ができました。但しミャンマーは日本の一・八倍もの広さで幹線道路さえほとんど舗装されていないので移動に時間がかかります。道が狭い上穴が多く、対向車や自転車とすれ違う時何度もひやひやしました。中古車が多く、あれ程道端でパンクしたり故障して立往生しているのを見た事もめずらしいです。

夜中車を飛ばし朝早くメイッテイラと言う、

国のほぼ中央にありバガンとマンダレーの分れ道になる重要な産業交通地点に着きました。マンダレーをも含むこの地域は第二次大戦中十八万人もの犠牲者を出した激戦地でした。戦後メイトティラ湖の守護神であるナガヨン（竜神）パゴダ（一二〇二年建造）を日本とミャンマーの仏教徒教会が協力して改装して戦没者を葬いました。ミャンマーに来て初めて見るせいかとても鮮やかで印象的でした。塔内には仏舍利と仏四体が安置されています。

マンダレー

ヤンゴンとは対照的にマンダレーはイギリス植民地時代以前の伝統的なミャンマー文化の粹を窮めた、日本の京都の様な文化都市の感じがしました。仏教のビルマへの伝来は商人や仏教徒達が大乗小乗両派をこの地に伝えた時に始まります。特に仏教の敬虔な信者として知られて

いるインドのアショカ王が紀元前二六〇年頃マンダレーを訪れたのが記録に残っており、しかしそれから千三百年以上たった一〇五六年にビルマのアナラッタ王が今のスリランカの上座部仏教を導入した事により現在の型に定着しました。その年、国民の間に受入れ易くする為に一種の妥協策として、アナラッタ王は従来の土着の自然信仰のうち、仏教の教えにあまり反しない三十六の精霊（ナッツ）を残し他のナッツを崇拜する事を禁じました。そしてタキ・ミアンというナッツを仏教の守護神として加え、合計三十七体の精霊をバガンに新しく建てたシユエズイーゴン寺に祀りました。時が経つにつれて人々は古い精霊をお祀りに来る時、仏教という新しい信仰を見出し拝む様になりました。パゴダや寺院に飾ってある三十七のナッツの他にもミャンマーの社会には無数のナッツが今でも日常生活に生きています。そもそもナッツ

は破壊的なあばれん坊の性格を持つている精霊で、いかにして宥めおとなしくさせておくかに気を使います。家内安全商売繁盛にもナツツは関係してきます。ミヤンマーの家庭には死者の霊を祀る習慣はなく位牌も置いてありません。その代りに小さな仏像を家の中や玄関の南側に置いたりしてお参りします。家のナツツを祀る為、赤と黄色の布地で仏像を巻き、お供えにコナツの実を吊してあります。街角には紐で結んだ花卉を髪に挿した女性や車のバックミラーに飾った花卉をよく見かけますが、これはナツツに捧げる意味もあります。

さてマンダレーはミヤンマー最後の王朝（一八六〇—一八八五）として栄え、当時の王宮が広大な敷地に復元されています。本殿を始め数多くの宝物、調度品等が今でも王宮内の博物館に飾られており、在りし日の王侯貴族の優雅な生活振りが偲ばれます。ただ一つ不似合いなの

マンダレー王宮でのロケーション



は漆塗りの豪華な建造物の屋根がトタン張りでいかにも安っぽく見えます。これは王様は銀色の屋根の下に住むという伝統に基づいているからです。王宮を囲む一方が七十メートルもある堀には昔舟遊びに使った木造船が復元されレストランになっています。最後の王ティーボーは国防や政りごとに嫌気がさし、仏事に没頭した結果イギリス軍にその座を追われインドに追放



マンダレーの丘に建つ寺院

されました。マンダレー王宮にあった「獅子の玉座」がロンドンに持って行かれましたが、その一つがヤンゴンに戻され、国立博物館に飾ってあります。

マンダレーにあるパゴダや寺院はほとんどが初代のブンミン王の建造による物です。マハムニパゴダはマンダレー最大のもので、本尊は四メーターもあります。十八世紀後半よそからわざわざ運んで来た物で、金属でできており、信者が貼り付けた金箔で表面がピカピカに光っています。ところで金箔の精錬は、三年間も水に付け柔らかくなった竹の皮に金粉を包んでその上からハンマーで何回も叩いて作る地場産業です。マハムニ仏の他にカンボジヤで作られた六体の人やライオンの青銅の像が祀られており、それ等に触ると病気が治ると云われ沢山の人がお参りに来ている。境内の博物館にはお釈迦様が悟りを開くまでの話が大きな絵に書かれて沢山

飾ってあります。

次に市の東北にあるマングレーの丘に登りました。町全体が見渡せる丘の頂上にはいくつかの寺院が建っています。本堂にはパキスタンのペシャワールからアシヨカ王が運んで来たと言うお釈迦様の骨が祀ってあります。

丘の麓にあるクドードパゴダは特徴のない物ですが、それを取巻く七百以上の高さ五メートル程の小さいパゴダの一つ一つには大理石で出来た石板が立ててあり、その表面には経律論の三蔵の全文が次々と彫られており、これは世界一大きな經典だそうです。七百三十番目の石板にはグンミン王が二千四百人の僧侶を集め半年がかりで作らせた過程がこと細かに彫ってあります。このクドードパゴダの近くにあるシュエナンドー寺院は珍しく木造で、内側、外側共に繊細な彫刻が施され、土と石でできている東南アジアのほとんどの仏跡とは対照的です。長年

風雨に曝され朽ち果てていますが、歴史の重みを感じます。この寺院でクンミン王が亡くなりティーボー王がしばしば瞑想に更けりました。

功 徳

街角ではロンジー（腰巻）を着けた男女が麻で作ったジャンバッグを肩に掛け、ゴムのサンダルを履いてゆつくりと行き交うのどかな光景をよく見かけました。又道行く人が気軽にパゴダや寺院に立寄ってお参りしています。

車で移動する際、寺院主催のお祭りを見ました。ドラ、太鼓、シンバル、琴や笛の演奏に乗って歌ったり踊ったり賑やかでした。人形劇や芝居も繰り広げられお釈迦様の話や色々のナツツの話に皆聞き入っています。

マングレーをイラワジ川に沿って南下すると四十年ほど王朝として栄えたアマラプラに出ます。今はひっそりとした町ですが、石仏や仏

具の家内工業の町として知られ台湾などにも輸出しているそうです。すぐ近くの湖に架つている大変長い木造の橋は二百年前に造られたそうで、その下で水牛を使つて農作業する人や、魚を釣っている人の点在する白いパゴダを背景に絵葉書にもなる景色です。最後に今でも使われている僧院を覗きましたら出家した子供や若僧侶が各々の日課をしておりました。

例え一日でも一週間でも出家して修行する事が一番の功德とされていますが、出家をしない一般の人々は修行僧の為に僧院を維持し僧侶の為に食物や袈裟を用意し身の廻りの世話する事が同じ様な功德とされています。車の窓からよく見かける風景でしたが、大人も子供も道端に立ち、鳴物で行き交う車の注意を引き運転手の投げる小銭を集めてお寺や学校の施設に寄附しています。

パゴダを建てるのが最大の功德とされている

アマラプラの田園風景（マングレーの南）



ので至る所にパゴダや寺院が見られます。しかしこれは裕福な人だけがができる事なので一般人は戒律を守る他、諸々の善行を心掛けるわけです。例えば喉の渴いた旅人の為にいつでも水瓶を置いておくとか、鳥籠の中の小鳥を何がいかにお金で買取り放してやる事が今でも行われています。この際小鳥を取って売る人の行為はどう解釈するのでしょうか。ミヤンマーでは魚や動物を殺すのを悪と考え従来中国人や回教徒の仕事とされており、仏教徒が殺生すると後世で一番下等な動物として生れ変るとされ、社会的にも肉屋や魚屋は見下げられてきました。

バガン

次の目的地バガンはインドネシアのボロブドールやカンボジアのアンコール・ワットと並ぶ三大仏跡の一つとされています。萬ずのナッツが宿る聖山ポパを右に見ながらバガンの町に入

りました。マンダレーが絢爛豪華な仏教都市とすれば、バガンは二千以上ものパゴダや寺院が集まっている赤茶色の荒涼とした大地です。パゴダは全部土で盛った丘でお釈迦様や高僧の遺品が埋っています。寺院は空洞で中に仏像が置いてあり、外側はテラスが幾段にも積み重ねられ、上に行く程小さくなっていて頂上はストウパーの恰好をしています。丸型の寺院は入口が



バガンの尼僧

一カ所しかなく、そこ迄参道が続いており、正方形の寺院は四カ所入口があります。一つ一つの仏跡も見事ですが無数にある遺跡の全体の景色は圧巻です。

バガンの遺跡はほとんどが十一世紀から十三世紀に建てられた物です。十一世紀の中頃これ迄ミャンマーで栄えていたヒンズー教や大乘仏教が衰え南方上座部が広まり始めておりました



バガンの古寺

が、時の王アノラタが一〇五七年にミャンマー最初の王朝を確立しました。征服したモン族から經典やお釈迦様の遺骨を持ち帰りシュエズイゴンパダの建立を始めとする仏教都市作りを専念しました。十三世紀末クビライカンの率いるモンゴル軍に滅びる迄二百余年仏教文化の中心地として栄えました。

アナンダパゴダと僧院は高さ五十メートル以上もあり、バガン王朝のパゴダ建設を代表する最も美しい物と言われています。正方形で四つの入口があり、その一つには仏の足跡が二つあります。中はひんやりとし、奥に十メートルもある仏像が四隅に置かれています。次に国会議事堂を思わせる様な形のダビニユ寺院はバガンで一番高い建物で二層になっており、上の方に大きな仏像が置いてあります。上のテラスに登ってイラワジ川の対岸に沈む夕日を眺めました。最後に河岸に建っているシュエズイゴンパゴダ

はバガンにある最古の代表的なビルマ建築物です。金色に輝く塔にはお釈迦様の齒のコピーと骨二本が納められています。四隅にはストウパーに飾られた四メートル程の仏像が置いてあり、又薄暗い中にフラスコの絵が見られます。その他二十以上のパゴダと寺院を精力的に廻りましたが、中には時代により中近東の顔かたちをした仏像やモンゴル軍が書いた壁画等も残されています。これ等のパゴダの囲りにはお供えの花を売る店や小さな仏像や仏具を売るおみやげ屋が立ち並んでいます。マンダレーは漆が有名で工房に行きますと馬の毛を椀状に編みそれを漆で固めた食器を作っています。手で押しと形が変わりますが、変わっても中の汁は洩らないのは不思議です。

ヤンゴン

バガンからヤンゴンに戻るとあたかも別の国

に來た感じでした。それ迄訪れた場所に比べ建物や町並みを見ると百年以上のイギリスの植民地時代の影響がはつきり感じられます。とは言ってもヤンゴンの歴史は「聖なる黄金の塔」と言われるシュエダゴンパゴダに始まります。どぎつい程に強烈な印象を与えるこのパゴダは高さ百メートル近くもあり、頂上には大きなダイヤモンドが使われ、他に数千のルビーやエメラルドが眩いばかりに輝いています。このパゴダは昔ミヤンマー商人の兄弟がインドに旅した時、仏様に会い聖髪をいただき奉納した場所です。この仏舎利塔の周りには無数のパゴダと四つの祈念堂と動物像があります。

ビルマの暦は一週八日あり、一日一日が一定の方角を指し、動物を祀っています。例えば月曜日は東を指し、お月様を象徴し、嫉妬深い虎の性格を表します。又一週間の最後の日である八日目は北西を指し、架空の空を象徴し冷静な



バガンのパゴダの頂上で日の出を待つ

ヤンゴン川



象の性格を表すそうです。そして自分の生れた曜日動物を拝んでいる人を沢山見かけました。蛇を表す土曜日生れの人は鼠を表す木曜日生れの人とは性が合わないので結婚しない方が良いと言われています。

ヤンゴンには釈迦誕生二千五百年を記念して建てられたバーエーパゴダがあります。デザインが斬新で内部の仏像も抽象的超モダンなものです。ここで開かれた世界仏教徒大会（一九五二―五六）には日本からも学者が出席し、更に神奈川県仏教会は仏像と梵鐘を寄進したそうです。モン族が一番早くミャンマーに上座仏教を取り入れましたが、後十三世紀から十八世紀にかけてペグーに王朝を作りました。ここには全長五十五メートルもの白塗りの涅槃像があります。世界一大きいそうですが割にやさしい顔付きをしています。郊外には巨大な仏像が四体四方に向って立っています。古都ペグーはヤンゴンか

ら北八十キロほどの所にあり日帰りが可能なので観光客で賑わっています。

ミャンマー・今と昔

ミャンマーは約四千万の人口でその七割がバーマ族で残りは百二十以上の少数民族で成り立ち、必ずしも統一国家とは言えません。人口の大半がイラワジ川の土地の豊かな下流に住み、残り三分の一は北部に住んでいます。イギリスはミャンマーを同じ統治下にあつたインドの一州として百年以上植民地支配をしてきました。一九四八年に部族紛争未解決のまま独立しましたが、シャン族が反乱を起し内線の兆しが高まりました。それを理由に軍部が独裁体制を確立し今日に至っています。それ迄ヤンゴンは東南アジアでもバンコックを遙かに凌ぐ交通や貿易の拠点でした。しかし植民地主義への反対として軍事政権は鎖国制作と社会主義的経済

を取入れ外国の影響を徹底的に排除した結果、国際社会から完全に孤立してしまいました。

ミャンマーの識字率は本来比較的高かつたろうですが、これは寺小屋式教育によるところが大きく、一九六〇年代の軍事政権は寺院の勢力が増大するのを恐れ僧侶を登録させ監視を強めたりしてミャンマー社会に於る寺院の實際的役割を著しく弱めました。政府の手に移った教育も問題が多々ある様です。しかし寺院は仏教本来の道を通じて人々に深い影響を及ぼし仏教は生活の行動原理となっております。アジアの社会でありながら男女平等が浸透し財産の共有権や離婚の自由も実践されております。

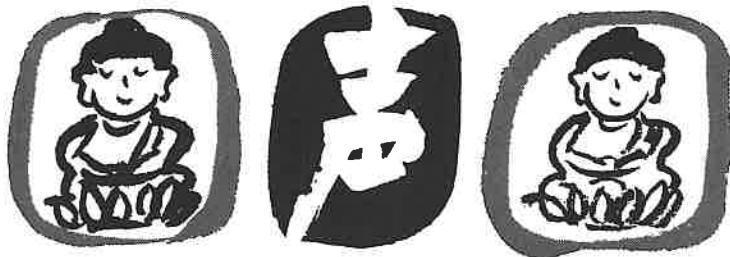
軍事政権による「ビルマ式社会主義」は完全な失敗に終り、一九八七年国連はミャンマーを最低発展途上国に指定しました。翌八八年一党独裁に反対して起った民主化運動も軍の発砲弾圧に会い空しく後退しました。更にアウン・サ

ン・スー・チー女史の率いる国民民主連合の国民会議の総選挙での圧倒的な勝利とその後の同女史の自宅軟禁は日本を始めとする西洋の批難の的となり、かつて最大の援助供与国であった日本は援助を凍結しております。対抗策として軍部は新憲法の生徒と民政への移行を約束していますが、準備中の草案では議員の二十五パーセントは軍人で占める事になっていたので、現状はあまり変らないでしょう。経済面では市場解放を打出し、少しながら国营企業の民営化や貿易及外資の自由化に切換えています。年平均六パーセントの経済成長を果し、中国、タイ等の隣国を中心とした貿易も活発になっておりますが、インフレが未だ二十パーセントもあり、一人当りの年間国内総生産額が二百五十ドルという低いものです。

一九六〇年代に行つた農地改革も不徹底のままで土地のない農民が部落の半数近くもいます。

それで農産物輸出国になる為には平等な土地の再分配は生産性低下になるのでできません。その為、余剰の農業人口は建築ブームのヤンゴンやマンダレーに集中し都会のスラム化とそれに伴う社会問題を生む虞があります。今後の課題はいかにして民政に戻り、部族を統合し、近代国家に向けて第一歩を踏み出すかという事です。そして人口の八十パーセントを占める仏教徒がいかに仏教の精神と近代化・産業化とを調和発展させるか皆が注目しているところです。





お変わりないことを
切に願う

京都府 山下良道

まことにとんでもない年明けとなつてしまいました。皆様におかれましてはお変わりございませんでしょうか。今年ほどお変わりないことを切に願わずにいられない時もありました。此処昌林寺では、この度の震災による被害は僅かに湯飲み茶碗三個と軽微なものでしたが、神戸の人達を思うととても喜ぶ気にはなれません。

それにしましても今回実に沢山のことを考えさせられました。どうでもいいことが全て崩壊し、一番大切なものがくつきりと明らかになつたような。例えば、通常の番組編成を一切止めて震災情報だけを流し続けたテレビですが、三日目ともなると少しづつCMやドラマが入ってきました。そのCMやドラマを見てその余りの下らなさにショックを受けはしなかったでしょうか。こいつら一体なにをやっているのかといったような。法華経譬喩品の火宅のたとえ「諸子等は、火宅のうちにおいて、嬉戯に樂著して、

覚らず、知らず、驚かず、怖れず、火は来たりて身に逼り、苦痛は己に切れども、心に厭わずして、出ずること求め意なし。幼い子供たちが燃え盛る家のなかで、玩具に心奪われて嬉々として遊び戯れるすがた。私自身何度もお説教の中で使ってきた譬え話ですが、今回ほどまざまと其を實際に見たことは有りませんでした。燃え上がる神戸の街を写した直後にCMになり、そこに登場する能天気な人々。それはもはやグロテスクとさえいえるものでした。しかし考えてみると、燃え上がる神戸の光景と同じ程悲惨

な映像を我々は今までも見てきたはずで。ボスニアばかり、ルワンダしかり、そして最近ではチェチェンと。とはいえ正直に申して私には彼らの苦しみを自分のものとして受け止めることは出来ませんでした。今回自分自身が恐怖を味わったあと、映像の中の人々の苦しみを、はじめて自分のものとするのが出来たのです。ということは、私自身火宅の中で遊び惚けていた子供だったと言うことです。そして更に考えれば、運良く今回は震災からは逃れはしましたが、我々が住むこの火宅はやがては焼け落ちるのです。

その火宅から本当に出ずる方法とは、是はもはや単なる地震対策ではすまないわけですからして又私一人がそこから逃れたとしても全く意味が有りません。この世の生きとし生けるものすべてのものと一緒にこの火宅を出る。大乘の菩薩として、それを是からの誓願として生きていきたい。今回亡くなった五千人の人達の冥福を祈りつつ、そのことを強く強く思っています。

『成寿』から色々な
昔を思い浮かべ…

長野県 池沢悦二

今を去る十一年前、黒田方丈は「一食を善光寺に布施して下さい。其の布施を大切に使用させていただき、有為な青年僧を海外に留学させたい」と切々と訴えられました。私は何人位の青年を留学させたのかと尋ねると、最低五〇名だとはつきり申されまして更に其の中で五人位しっかりした人が生れれば本望ですとつけ加えられましたが、現在では世界十七ヶ国六十一名の

留学僧が出来てしまいました。一日一日の努力の偉大さに、只々頭の下がる思いがいたします。

昨日茶人の田中清氏から電話があり、「池沢さん、四月二十一日は永平寺へ十五条糞掃衣献上七年目に当ります。いろいろお世話になった黒田老師のことが思い出されます。折がございましたらよろしく」との事でした。もう七ヶ年がたつてしまいました。そして永平寺も監院様が南沢道人老師となり、道人老師により白純大和尚様の十七回忌の供養が厳修されたと「成寿」に記されております。

道人老師の長男のご結婚が丁度七年前の四月二十一日、私共が永平寺上山の日でございます。成寿二十四号をお贈りいただき、色々な昔を思い浮かべこんなことを書いております。

月日の経つことは誠に早くセガレ紫山もアメリカ禅センターへ渡米したのが昭和五十六年、二年後帰国し結婚したのが五十八年五月でした。本年は長男が満十歳になり、月おくれの涅槃会に合せて四月十五日、出家得度の式を行いました。紫山も初めての受業師となり、父と子の立場で目出度く終らせていただき参列



した私共夫婦も感激一入でございまして。どれもこれもすべてが方丈様の御厚思と感謝申し上げます。



すばらしい『成寿』
一字一句尊く

保谷市 三矢記代

あじさいの花が雨にかがやく日々、先生にはお変わりなく

ご活躍の事と存じます。

先日の錦戸先生の御法要の折には、ありがたいお言葉を頂き、本当にありがたく心より感謝申し上げます。

すばらしい『成寿』二十四巻を頂き、誠にありがとうございました。「巻頭言」より「読者のたより」迄、ありがたく、一字一句尊く、黒田先生の温かく、やさしいそしてすばらしい人を思いやる情熱を感じさせて頂きながら、幸せな時間を過ごさせて頂きました。
御本の中から開祖様の思いと同じ心が……

育英会にお掛けになる、先生の人を育て愛する情熱が一

字一字に、「なぜ留学僧育英会をつくったか」の章に黒田先生のハンサムなお写真と共にへ生かされていることに気づくので大変ものすごく感激致しました。そして何か本当にうれしい様な、ありがたい思いになりました。

私は学生時代、武蔵野女子大学（真宗）に学び、当時学生仏教音楽研究会のサークルに入っておりまして。週に一度、築地本願寺に、伊藤完夫先生のもとに駒沢、立正、大正、武蔵野の大学が合唱の練習に集まり、交流も致しておりました。私も駒沢大学には何回か行かせて頂き、棟方さ

ん（現在テレビ朝日のアナウンサー）や静岡県松永さん、仙台の清野さん等と役員もさせて頂いておりました。もしかして、黒田先生を皆さん御存知ではないかと思いました。又、雲道義道先生のお名前が

「読者のたより」に見付けました時、私の大学の学長先生でいらっしやいました。本当にうれしく（大変お世話になっておりましたので）何か深いご縁を思いました。

通度寺は、私も七年前佼成会の平和使節団として、八日間韓国に行かせて頂き、なつかしく、美しいカラーの写真の中に、再び新しい想い出が

よみがえって参りました。

黒田先生との出逢い！

『成寿』との出逢い！

私にとって本当に仏様のお配らいとして、心より感謝申し上げます。





善光寺ニュース

鈴木宗幹先生を祝う会 日々庵の隆昌とご健勝を祈念

「鈴木宗幹先生を祝う会」が五月二十七日（土）に、駒沢の三越迎賓館シルバーハウスで開宴されました。

日々庵・鈴木宗幹先生は黒田方丈の茶道の恩師で世田谷区深沢に門を構えられて五十有余年、また、このたび先生が古希を迎えられ、日々庵の隆昌と益々のご健勝を祈念して、御社中と駒澤大学茶道部一服会（会長 新美昌道師）の合同で開かれました。



鈴木宗幹先生ご夫妻

善光寺ニュース



一服会会長と佐々木先生

黒田方丈が実行委員長で駒澤大学 茶道部創立四十五周年記念茶会

駒澤大学茶道部創立四十五周年記念茶会が五月二十七日(土)に、日々庵・鈴木宗幹先生のご厚情により添釜の御光栄にあずかり、世田谷区上野毛の五島美術館で開筵されました。黒田方丈は記念茶会実行委員長、また新美方丈は事務局長として重責を担い、当日は大勢のご来客をもてなしました。

善光寺夏季旅行に五十名が参加

善光寺の本寺・大田山光真寺(栃木県大田原市)の夏大祭に参拝し、合わせて檀信徒間の親睦を計る夏季旅行が七月二十四日(月)二十五日(火)に行われ、約五十名が参加されました。午前七時に善光寺をバスで出発。

善光寺ニュース

早朝にもかかわらず皆様は元氣一杯。首都高速、東北道をひた走り、光真寺を参拝の後、黒磯温泉の覚楽に一泊し、翌日夕刻五時過ぎに横浜駅で解散となりました。世話役の善光寺婦人会、善光寺旅行会の皆様、ご苦勞様でした。

全日本仏教婦人連盟会長 山本杉先生のご逝去

社団法人全日本仏教婦人連盟会長山本杉先生が九月九日、九十三歳の天寿を全うし、永眠されました。

山本先生は、明治三十五年広島県呉にご生誕、やがて医療の道を志され、医学博士の学位取得とともに小児科専門医として開業。昭和三十四年から三期にわたり参議院議員として国政にも参画され、各方面に多大なご活躍をされてこられました。ことに仏教活動にお



光真寺参拝の一行

善光寺ニュース

いては、まだ戦後の荒廃が色濃く残る昭和二十九年、日本の真に平和で豊かな国造りのためには仏教婦人の連帯と組織化が急務と、中心になって「全日本仏教婦人連盟」を結成されました。先生の理想は、慈悲の宗教である仏教が世界の宗教と手をたづさえて、世界の平和と生命を貴ぶ運動に寄与したい、そしてその原動力に仏教婦人がならなくては、とのお考えで、世界を飛び回られる大変多忙なご活躍でした。黒田方丈の師父・榎庵白純大和尚、黒田方丈、親子二代にわたり、先生には多大のご厚情を戴き、お世話になりました。謹んでご冥福をお祈り致します。

東隆眞先生、東京都功労者表彰

駒沢女子大学学長代理で善光寺留学僧育英会理事の東隆眞先生が、十月一日(日)都民の

日に、平成七年度東京都功労者として表彰されました。

東京都では、都民の生活と文化の向上に特に功労のあつた各界の人々を表彰してきていますが、東先生は、学校教育の振興を通じて社会の進展に尽力し、功労顕著で、一定の推薦基準を満たす永年の実績が認められました。心からお祝い申し上げます。

「私の現代墨彩画論」

伊藤三喜庵先生講演会



善光寺ニュース

十月五日(木)、画家・建築家で善光寺総代の伊藤三喜庵先生が、社団法人新日本建築家協会関東甲信越支部JIAトーク実行委員会主催の「JIAトーク 想」『時には静かに考えてみませんか』で講演されました。

伊藤先生は「私の現代墨彩画論——私自身への説話」と題し、「本能のように永い間絵を描き続けてきた私の自らの説話」を二時間にわたって講演し、参加者の感動を呼びました。



善光寺総代及び役員会開催

十月二十一日(土)午後二時から善光寺釈迦殿において、平成七年度総代及び役員会が開かれました。議案は平成六年度決算報告、平成七年度行事予定報告、開創二十五周年記念式典会計報告、その他で、慎重な審議と活発な討議が行われました。

式次第は次のとおりです。

第一部

- 一、開式の言葉
- 二、本尊上供
- 三、開基家(株)ナリス化粧品前社長故村岡有尚氏追善供養敬徳院殿興隆有道禅居士霊位位牌開眼法要
- 四、感謝状贈呈式
- 五、委嘱状交付式
- 六、堂頭挨拶
- 七、善光寺の歌
- 八、閉会の言葉

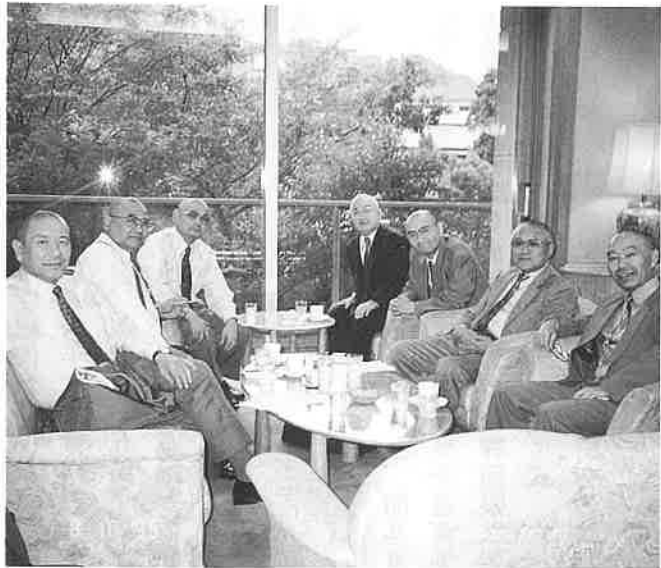
善光寺ニュース

第二部

一、役員紹介 二、議長選出 三、今年度行事報告及び開創二十五周年記念行事会計報告 四、平成六年度決算報告 五、護持会会計報告 六、育英会行事報告 七、平成八年度行事予定 八、出版行事予定 九、檀信徒へ年末年始の行事関係書類後送の件 十、その他

箱根で駒大三心会開かれる

黒田方丈は十月八日(日)〜九日(月)に箱根湯本のホテル河鹿荘で開催された第九回駒大三心会(駒澤大学仏教学部卒業生の会、会長は東隆眞先生)に出席しました。八日は夕刻から総会および講演会、九日は芦ノ湖を始め、関所跡、大湧谷など天下の險箱根の紅葉を散策し、旧交を暖めました。



ワットパグナム表敬訪問と
バンコク・チェンマイ仏跡参拝の旅

曹洞宗神奈川県第二宗務所第五教区主催



(団長 梅田文丈老師)、「ワット・パグナム表敬訪問とバンコク・チェンマイ仏跡参拝の旅」に黒田方丈が参加しました。日程は十月二十三日(月)出発、チェンマイ泊、二十四日(二十)十六日バンコク泊、二十七日(金)帰国。二十五日、旅行団一行は、黒田方丈が修行されたワット・パグナムを表敬訪問し、寺院内で懇親会をしながら昼食。改めて、黒田方丈とワット・パグナムの深い仏縁に一入の感慨を覚えめました。

詳細は次号に発表いたします。

第十回善光寺留学僧育英会総会

十一月五日(日)二時から善光寺釈迦殿において、第十回善光寺留学僧育英会総会が行われました。議案は平成七年度経過報告、その他で、詳細は次号にてご報告致します。

善光寺ニュース

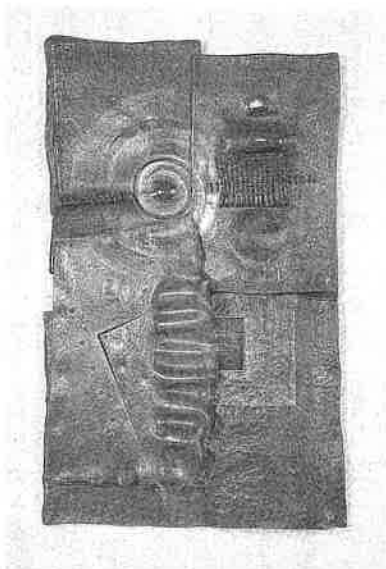
善光寺の歌がCDに

開創二十五周年記念式典で披露された成寿山善光寺の歌（作詞・廣島一雄氏、作曲・岡島雅典氏）のCDが、このほど大塚録音社の制作により完成しました。歌唱は現在日本のコンサート・シンガーの第一人者として高い評価を受けている芳野靖夫氏（バリトン）、ピアノ伴奏は高須亜紀子氏。なお、「善光寺の歌」の他に岡島氏作曲による「永劫」「歲月」も収録されています。「善光寺の歌」が皆様に愛唱されるよう願っています。



山崎先生より作品を寄贈される

第二十六回日展（一九九四年）で特選を受賞された山崎輝子先生の作品で「オルフェの聲」が先生のご好意により善光寺に寄贈されました。心から御礼申し上げますとともに、これからのますますのご活躍を祈念いたします。






読者のたより

仏教興隆、国際親善の
実を着々と築かれて

東京都港区
田中良昭先生

「成寿」二四巻拝受致しました。いつもカラー写真の美しさに敬服しておりますが、今回も永平寺、韓国通度寺、光真寺のそれぞれのカラー写真の美しさは格別でした。留学僧育英会を通じ仏教興隆、国際親善の実を着々と築かれていられるお姿に敬意を表します。今回採用の栄に浴した中国からの留学僧湛如氏は既に一年半私の元で研究中ですし、韓国の通度寺から来日している

東洋大学大学院生の李煥秀氏も仏教系四大学院単位互換制度を利用して今年一年私の講義を聴講されます。益々の御発展を祈ります。

教化にも利用させていただいて：

東京都世田谷区
芦辺謙禅様

「成寿」二四号をご恵送頂きまして有難うございました。平素は何かと御法愛を辱うし有難く厚く御礼申し上げます。宗門でも稀な又、本当に貴重な留学僧育英会を発願せられ、益々の御発展と充実した御成果、まことに御芽出度うござ

、ます。大変な御苦勞を重ねられておられる御姿を拝し、心から敬意を表し頭の下がる思いで一杯です。

今回の貴誌もカラー写真始め多くの写真で、又大変参考になる充実した内容の記事を大変興味深く拝読させていただいております。私の拙い教化に利用させて頂いております。有難うございました。

又、大慈大悲を賜りました白純老和尚様の十七回忌との事、御生前の大恩に対し心から感謝し、報恩の誠を捧げて品位を増崇し奉ります。

青年僧が初志を貫いた 大事業

東京都世田谷区
池田魯參先生

先般は「成寿」二四巻をお送り下さりありがとうございました。いつもながら美しい写真とスケッチと心のこもった諸先生の美しい御文章が満載されていて、家族共々拝読させて頂いています。

御老師の「なぜ留学僧育英会をつくったか」を拝読させて頂き、若き青年僧時代の御老師の心に期したものがどれほどのものであったのかよくわかりました。それからの道

程は決して平坦なものではなかったと拝察致しますが、立派に初志を貫き今日の大事業をやり遂げられたことに驚嘆しつつ、今後益々の御精進を祈念してやみません。今年度から聴講生でいらつしておられる川村宗央さん（日蓮宗の方）が、なつかしそくに若き頃の出会いを語っておられ、まだお礼を言上してなかったことを思い起しました。一筆お礼方々益々の御活躍を祈りつつ：

かしこ

孫達のエネルギーを
もらって私も元気に

神戸市
村岡守見子

皆様には御健勝にてお過
しでいらっしやいます事と存
じ上げます。

夫がいなくなりましたから
は、生活に張りもなく、楽し
い事の思いも少く過してお
りましたが、ようやく昨日、嫁
が孫二人をつれて帰ってまい
りました。一度に天地がひっ
くり返る程の賑やかさになり
ました。嬉しい事に孫息子が、
家中に飾ってある主人の写真
を見ては、おじいちゃん、お

じいちゃんと言って、親しそ
うに見入っている様子に、思
わず胸の熱くなる思いを致し
ております。この孫達のエネ
ルギーをもらって、私も元氣
に過さねばと氣をとり直して
いる所でございます。

人間の本質が、生かされて
生きるお言葉に

横浜市
石澤良昭様

「成寿」二四号を拝受致し
ました。興味深い記事、報告
の中で、方丈さまの「なぜ留
学僧育英会をつくったか」を
拝読いたし感銘を受けました。
生かされて生きるお言葉には

人間の**本質**があるように思い
ます。成寿の内容充実とカラ
ーページ増には敬意を表しま
す。ますますのご発展をお祈
り申しあげます。

遅れて申し訳ありませんが
方丈さまには権大教師補任の
こと、心からお祝い申しあげ
ます。ご栄誉の極み、ご隆盛
を祈念致します。

台湾からの留学生
衷心深く感謝

台北市
葉 阿月先生

「成寿」第二四号と平成八
年度貴育英会に関する諸資料
を御惠贈下さいまして、心か

ら厚くお礼申し上げます。去年は王文雄氏に奨学金をお授け下さいましたお陰で日本留学ができましたこと、本人並びに小生達は衷心深く感謝しています。特に今後は広く、中国本土の諸学僧に奨学金とお世話をなさいますのは誠に有意義でありますと信じ、この小島の一角から黒田理事長様の益々の御健勝と御発展をお祈り申し上げます。

久しぶりに本山に参詣した気がして嬉しく

東京都渋谷区
奈良政子様

「成寿」春季号をお送り下

されありがとうございます。

永平寺のカラー写真を拝見し、久しぶりに本山に参詣した気がして嬉しくなりました。また白純先生の御自坊も拝見できて昔を思い出して本当に懐かしく思いました。私は昨年十二月二十日に転倒し骨折、以来三カ月程入院手術を致しましたが、まだ完全ではなく外出もままならず、健康の回復を願いながら生活しています。今少ししましたら善光寺様にもお詣り出来ると思っております。

先生はじめ皆々様の御健康を念じ上げます。

満中陰の法要も
相済み：

吹田市
西宝寺様

御寺内みなさまには御変わりなく御すごしのことと御慶び申し上げます。扱て過日來村岡様の御葬儀の節は御遠路御足労さまで御ざいました。昨日満中陰の法要を相済ませました。尚、社葬儀の席上大変貴重な御書頂き誠に有難う御ございました。ぼつぼつ拝読させていただいております。尚も其の節重ねて御懇志まで頂きまして有難う御ざいました。厚く御礼申し上げます。

御香一箱送品させて頂いた
ます。御献香下さいませ。

どうぞ御身体御自愛下さい
ますようお願い申し上げます。

今日までの
ご尽力に敬服

東京都目黒区
山野井克典様

いつも「成寿」を通しご活
躍の様子を見せていただき
おります。今回も有意義な記
事を読ませて頂き感動して
おります。

先生が留学僧育英会を創設
されたのは、つい先日のよう
に思っておりますが十一年
にもなるのですね。この間多

くの若い方々が留学の機会に
恵まれ、育ってこられたこと
と存じます。今日までのご尽
力に敬服しております。

どうぞ今後ともますますの
御活躍を祈念申し上げます。

黒田先生から
勇気を頂きました

三鷹市
渥美和也様

黒田先生におかれましては
御多忙な毎日を御過しのこと
と存じ上げます。先日は、大
変御馳走になり、また、いろ
いろと御心配頂きました誠
に有り難うございました。

また、この度は、すばらし

い御本を御頂戴し、厚く御礼
申し上げます。御本を読ませ
て頂き、韓国の旅を思い起し
ております。とっても楽しか
ったです。そして黒田先生の
二十代の経験は、若輩の私に
とって大変参考となり、勇気
を頂いたと思います。先生に
負けずに私も夢を持って自分
の体力の続く限り進んで行こ
うと思います。

是非これからも、御指導、
御鞭撻のほど、何卒よろしく
御願ひ申し上げます。

黒田先生、そして皆様様の
ご健康を祈っております。

心にしみる「こころ
うらみなく…」

東京都世田谷区
脇本雅子様

「成寿」を賜わりまして有難う存じます。「こころうらみなく…」心にしみます。御心にお掛けいただき過分に存じ御礼申し上げます。

御本で先生のいつもながらのパワフルな御活躍を拝見致し、過日朝日生命ホールに御講演を御一緒にいたしました友人にも見せてさしあげ、お若い頃の行脚のお話、情熱家でありつつしやる事等、おうわさ申しております。

丁度同封の源川彦峰展（過

日おとどけしました「良寛」

に應鶴銘碑の論文を発表しておられます）のお手伝いを致しましたので、先生にも御案内をと封筒にまでお入れしま

したが、お忙しくていらつしやるのに…とお送り申すのをあきらめましたら、御本を賜わりびつくり致しております。

源川先生には一年程前より書道理論を御指導頂いております。

先日、明石先生宅へお稽古に伺いましたら「小品と色紙」が出来上っております。おとどけ致します。お疲れの折等に御高覧いただけましたら

幸せに存じます。

伊藤先生の個展、拝見させて頂いた良かったです。

時節柄ご一家さまご自愛遊ばされますようお祈り致しております。

白一条、無垢の心で、
貫く仏道

東京都江東区
井上葉智様

「成寿」二四巻をご恵送して頂きありがとうございます。時の経つのは早いもので八九年十一月に東方学院主催タイのツアーで、黒田さまと佐藤俊明さまとのご縁を頂き、楽しい旅の思い出が蘇えってき

ます。が、現在も尚お元気で
変わらぬお姿を写真で拝見し
うれしく存じます。

私事ですが、五月の中旬、
水野弥穂子先生達と、天童寺
へ参ります。丁度七年前の五
月に菩提寺の方々と天童寺に
参拝しましたが、再度の旅に
心をふるわせております。

白一条、無垢の心で、貫く
仏道！ 日々淡々とした暮ら
しの中で少しづづ、少しづづ
「坐禅」の有難さを味っており
ます。神秘とは、そういうも
のなのでしょうか。
今後ともよろしくご交誼の
ほどお願い申し上げます。

深いお人柄に
気持も和らぎ

千葉県山武郡
中村多江様

先日はほんとうに有りがと
う御ざいました。改めて心よ
り厚く御礼申し上げます。

善光寺様にもご住職様にも
初めて伺い、お目にかかりま
したのに、何故なのでしょう、
とてもなつかしく（ご免なさ
い）母親のふところに戻った
様な、とても安らいだ気持ちに
なりました。そして子供のよ
うにとめどもなくあふれる涙
を止める事が出来ませんでした。
た。申訳ありませんでした。

おかしな奴と思われたことと
思います。

帰りましてから友人にその
事を話したところ「それ
はきつと、亡くなったお母さ
んがよろこんでいるのよ。」と
言われました。私もそうかも
しれないと思いました。合わ
せて御住職様の深いお人柄が、
何も言われなくても長い間い
ろいろと張りつめていた私の
気持ちを和らげて下さったのだ
と思いました。

頂戴致しました「成寿」春
季号、一文字一文字大切に読
ませていただいております。
くり返し、くり返し…

末筆になりましたが、成寿

山善光寺開創二十五周年、そして横浜善光寺留学僧育英会設立十周年との由、心からお慶び申し上げます。

私は初めて、生きていてよかった、生かさせていただいたで良かったと思う事が出来ました。

善光寺様の益々のご発展、そして御住職様の御健康をお祈り申し上げます。

充実した内容で楽しみ

東京都文京区
島田喜久子

先頃先代遷化の際は御心のこもった御手紙と共に御丁寧

な御香資を賜り、誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

この度「成寿」春季号お送り頂き恐れ入りました。

お世話になった白純老師ももう十七回忌でいらつしやる由、迦葉山に連れて行って頂いたのがなつかしく思い出されます。又、韓国の月下猯下の記事も嬉しく拝見致しました。私共のために半切を書いて下さり、御馳走になったことを思いながら読ませて頂きました。

益々充実した内容で楽しみに致しております。

光真寺の写真、
なつかしく

栃木県那須郡
石槻ユキ様

「成寿」お送り下さいまして心からお礼申し上げます。さっそくお礼申し上げますと思ひながらついお忘れてしまい申訳がなく思っております。元気だった私も年です、日赤にしばらくお世話になり、塩原国立病院でしばらく車イスの生活でしたのですっかり足が弱くなってしまう、歩く事が出来ずやとツエをつけてサンポに歩いておりますが思う様に行かず、困っております

ます。

光真寺の写真、なつかしく見せていただきました。方丈さんも十七回忌に成ったのですね。大変でしたでしょう。

小さい頃をなつかしく思い出しております。おデンワをかけたのですが、今は使われていないと言われ、かける事もできませんでした。

ほんとうにありがとうございます。ありがとうございました。

自由な時間を気ままに

原 横浜市
宏様

「オウム」だ「サリン」だ、な

どと世の中が騒々しいようでございます。こんなさ中、私は、三六年余りの役人生活に終止符を打つことになりました。

昭和三三年に横浜市役所に入庁以来、何度か引退をかんがえましたが、とうとう今日（六月十一日）までできてしまいました。これも偏に、皆様方のご助力の賜物と心より感謝いたしております。

横浜市に於いては、その殆ど（約二〇年）を建築主事として各区（磯子、港北、南、金沢、旭、中、鶴見）の建築行政に携わってまいりました。幸い、学生時代から木

質構造の研究を行なってまいりましたので建築物の指導には大変役立ち、又、興味を持って仕事をする事ができました。さて、これからは自由な時間が沢山取れそうなので気ままに暮らしていきたいと思えます。

社寺建築物の考案

歌舞伎等の演劇鑑賞

大相撲観戦

海水魚の飼育

小さな旅 etc...

それでは、皆様お元気で、長い間有り難うございました。
「我が人生に悔いはない」

この時だからこそ
健康の三原則を基本

東京都中野区
津田正裕様

二十一世紀を目前に人類の
業火が成してしまつた始末と
不易と流行、真偽すら見失つ
たお叱りでしょうか。年頭よ
り天災、それにも増す複合的
な人災の恐ろしさを自らの問
題として受け止め噛み締めて
おります。

この時だからこそ四時行わ
れ百物生ずる自然界を鏡とし
て、健康の三原則を基本に、
自らの徳性を養い道に志し、
聖賢の学びと実践に導かれて

他の為にある自らの使命に覚
醒することの大切さを痛感し、
精進黙養に努めております。

健康の三原則

- 一、心に喜神を持つ事
- 二、感動と感謝の心を持つ
事

- 三、陰徳を積む心を持つ事
- 生命許される限り、
一日一日を大切に

倉敷市
鳥屋原百合子

善光寺様には皆様ご壮健に
てご活躍のこととお喜び申し
上げます。

今年には阪神大震災、サリン
事件と続き、戦後五十年、繁

栄のみを目指したことへの反
省の時と、思いを深く受け止
めております。

今年の夏の湯水に痛んだ草
木も美しい緑を芽吹き、春の
前奏は始まっています。

世界の平和、人々の幸福を
心から願い、生命許される限
り、一日一日を大切に送りたい
ものです。

ますますのご盛栄をお祈り
いたします。



二寄付御礼

〈育英会寄付〉

黒田 俊雄殿	百万円
菊池 泰進殿	十万円
北館良之助殿	十万円
中村 淳子殿	十万円
実浄 文英殿	五万円
鈴木 紀元殿	五万円
山口今朝雪殿	三万円
黒田 トシ殿	三万円
滝沢 孝子殿	三万四千元
山野井克典殿	二万円
鳥屋原百合子殿	一万円
田口 基夫殿	一万円
石井 殿(江東区)	一万円
赫多 正円殿	一万円
佐々木慈光殿	一万円

〈成寿賛助〉

古谷 ミエ殿	一万円
中村 多江殿	一万円
三矢 記代殿	一万円
内海 忠男殿	一万円
中畑 勝善殿	一万円
四居 和子殿	一万円
志村 新殿	一万円
嶋田 武殿	五千元
宮本 延雄殿	二万円
松田 憲英殿	一万円
赫多 正円殿	一万円
船附 理人殿	一万円
大金きよみ殿	一万円
吉原木工所殿	一万円
滝沢 孝子殿	二千元



留学育英僧からのたより

この度のお集まりのご連絡、誠に有難うございました。しかし、大変心苦しいのですが、今回も私はドイツを離れることが出来ません。すでに1年半ほど日本に帰っておらず、そろそろ留学の経過を理事長にお話ししなければ、また私自身日本の空気を吸って、疲れを癒したいと思っておりますが、自分の研究の他に、10月からまた大学の授業が始まり、その準備で忙しくなりました。

また、この秋から市民学校で日本語を教えることとなりました。第1回目の授業はさすがに緊張しましたが、会社員や主婦など、ライブチヒの一般の市民の皆さんと出会えることは私自身興味深く、また、多少学費の助けにもなりますので、喜んでおります。

私自身の研究としては、ネパールのバクタブルという古都の300年ほど前の役所の記録文書を読んでおります。ネワール語という言葉で書かれていることに加え、今まであまり研究されていなかった分野ですので、読むのに苦勞しておりますが、Kolver先生や、ネパール人のMahesh Raj Pant先生などのご指導を受けて、少しずつですが、前進しているものと思っております。

次に日本に帰ることが出来る時期は、大学の授業の無い2月3月ですが、もしかすると、こちらで先生のご指導を受けるか、研究のためにネパールへ行かなければならないかかもしれず、確かなことは申し上げられません。

研究成果を挙げるのが、私の努めと思っております。日々感謝し、精進して参ります。

今回の欠席を重ねてお詫びいたしますとともに、理事長と、善光寺に集われる全ての方の、ますますのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

1995年10月14日

留学育英僧からのたより

アメリカ在住

第6回育英生 陳 永裕 (韓国曹溪宗)

私は去る8月からアメリカの方に1年間のVisiting Scloar としてBerkeleyのI.B.S に来ております。前角老師のご円寂を深く哀悼致します。どんなにご落心なされたか、察してしみじみ感じておりました。

私の『華嚴観法の基礎的研究』は、日本でご援助を頂いて研究した結果のものでございます。韓国での日本語の出版ということで、誤字が見えて申しわけなく思っております。

私は1年間こちらパークレイにとまりながら、英語や西洋の文化を見聞して、来年6月末に韓国に帰る予定でございます。もし都合が出来れば帰る途中に日本によって、ごあいさつ申し上げたいと思っております。

去年は普陀寺の修行館の建立を完成し、去る3月に落成し、7月末には4年間の住職や館長職を終えて、1年間のアメリカ訪問をゆるされました。

季節もますます寒くなりますので、どうかご自愛のことお祈り致します。

ドイツ・ライプチヒ在住

第9回育英生 佐藤 誠司

拝啓 黒田理事長様。こちらは、やはり大陸的気候のためでしょうか。日によって気温差が激しく、昨日は半袖、今日はジャンパーといった具合です。今年の秋は如何でしょうか。

(目 的)

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする

(派 遣 先)

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)
"923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 USA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
"Box 197, Mt.Tremper, NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

(派 遣 期 間)

平成9年4月より一年間

(給 費)

アメリカ・タイ及びその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

(提 出 書 類)

1. 論文(次項による)

○論題

- ①これからの国際交流と仏教の役割
- ②世界平和と仏教徒の誓願
- ③留学僧として私はこれを学びたい
- ④異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと400字詰原稿
用紙5枚以上(A4版タテ書き)

- 2.保証人と連署した願書
- 3.卒業証明書
- 4.履歴書
- 5.推薦書
- 6.健康診断書

(募 集 人 数)

平成9年度 2~3名

(願 書 締 切)

平成8年12月10日、事務局必着のこと

(発 表)

平成9年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 13 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成 9 年度・1997

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程並びに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

FOREWORD

Zenkoji T. Kuroda

However the fiftieth anniversary after the end of the World War II came around this year, it has started with such painful news as the great earthquake in Hanshin-Awazi area and AUM Shinri kyo's scandals reported in rapid succession by newspapers and TVs.

We are asked what the religion is, for example about the relationship between religion and politics, the freedom of belief, and the social relationship. Now it has become the center of public attention not only in Japan but also all over the world to solve these big problems.

Prof. Alfred Aché, French scholar in Buddhism says the only way to avoid the crisis of the extinction of mankind is to accumulate good deeds, not given to evil ways, and to purify own souls. This is what Shakyamuni taught us, the law of human life, the natural morality and none other than the great mercy.

I visited Komazawa Women's College the other day, its educational philosophy is to reach the new world by international exchange based on Buddhist education. I wish its taking a strong step toward the 21 century supported by the human truth.

Next, Rev Hakuyu Maezumi, the supervisor of Zen Center in Los Angeles died suddenly on 15 May when

he was back in Japan. He had endeavored for our Scholarship Society since the establishment as an adviser. After the private funera in Tokyo, the formal funeral was held in Los Angeles on the 100th day after his death, 26 August.

It had been forty years since 1965, he had devoted himself to the propagation of Soto Zen Buddhism in the United States, especially to the practice and the progress of “Eihei Shingi” and “Keizan Shingi”, which is the bases of life at temple. I greatly appreciate his achievement and think him as the one of the messenger in Buddhism from east to west.

It is said in Shobo Genzo Bendowa, there is the best and the idlest way to propagate the wondrous law of Buddha and to testify Anoku Bodai. The way is just to entrust oneself to Buddha, excluded the wicked thought, that is say, blessing samadhi, none other than to sit erect on one’s knees and to practice Zen meditation.

Rev. Glassman Chogen succeeded Rev. Zenkaku. I hope his endeavor as much as Rev. Zenkaku’s.

Now we must hope as a Buddhist back to Shakyomuri through our founders, to be humbly in harmony with society, to protect all living things and to contribute to the peace and the prosperity of the international world.

編集後記

▼初冬の候、皆様におかれましては
愈々ご清祥のことと存じます。成寿
25巻をお届け申し上げます。

▼本号は五月に急逝された前角博雄
老師を特集しました。東京・桐ヶ谷
寺における密葬はあまりにも突然の
逝去で、誰れもが悲しみに打ち拉が
れていました。ロサンゼルス禅セン
ターにおける本葬は、前角老師のア
メリカ人遺弟が心をこめて厳修し、
それは宗門の国際化を象徴し、悲し
みの中にも新しいスタートに禅セン
ター全体が力を合わせている様子が
感じられました。

▼今年は三月に善光寺開基家の村岡
有尚氏、四月に佛師の錦戸新観師、
五月に前角老師、九月に全日本仏教
婦人連盟の山本杉会長と、善光寺に

とっては大切な方々が死去されると
いう悲しいニュースがいつぱいでし
た。衷心よりご冥福をお祈りいたし
ます。

▼本号より宗門関係の学園めぐりを
特集として掲載します。第一回は「駒
沢女子大学」。宗門の学園としての姿
と、21世紀に向けての取り組みなど
お読みいただければ幸いです。

▼横浜善光寺留学僧育英会は来年で
十三年目となります。ご支援下さる
皆様のお力のお陰と、留学生諸氏の
努力もあって着々と成果が実り、年
ごとに関心度が高まっていることは
喜ばしいことであります。尚一層の
ご支援、ご協力をお願いいたします。
▼当育英会の名譽顧問でタイ国ワッ
トパクナム住職のプラタムパンヤー
ポデー大僧正が、このたびタイ国僧
の最高位ソムレットに就かれました。

心からお祝い申し上げますと共に、
ご法体益々ご自愛下さいますようお
祈り申し上げます。

▼当育英会留学生の論文集第二巻が
いよいよ発刊の運びとなりました。
年明けには皆様のお手許にお届けて
きるよう準備をいたしております。

▼いつも温いおたよりをありがとうございます。
を心触れ合う豊かなものにしていき
たいと思います。皆さまからのお便
りをお待ちしています。

皆様には祈りに満ちた輝かしい新
年でありますよう念じております。

成寿 第二十五号

平成七年十二月一日発行
発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十
二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一
FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺